

2.2.2 大豆

2.2.2.1 大豆(豆)

1) 国内生産

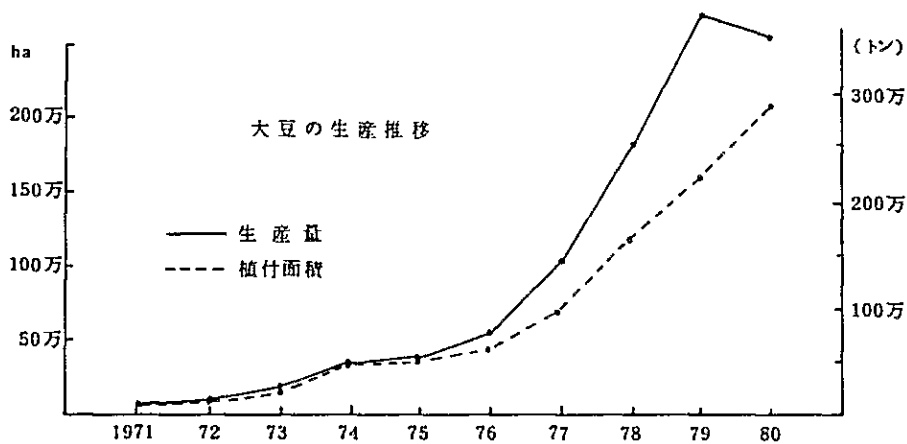
表105 大豆：過去10年間の生産実績

年 度	植付面積 1,000ha	収 穫 率 %	収穫面積 1,000ha	単 収 Kg / ha	生産量 1,000トン
1970 / 71	377	96.4	363	1,624	590
72	798	95.2	680	1,143	780
73	1,694	92.7	1,570	1,732	2,720
74	3,767	91.4	3,444	1,440	4,960
75	3,695	96.3	3,559	1,363	4,850
76	4,425	98.0	4,335	1,603	6,950
77	7,100	93.0	6,600	2,121	14,000
78	12,000	95.8	11,500	2,174	25,000
79	16,400	97.6	16,000	2,313	37,000
80	21,000	96.7	20,300	1,724	35,000

71~80平均	7,126	95.9	6,835	1,929	13,185
---------	-------	------	-------	-------	--------

出所：S. E. A. G

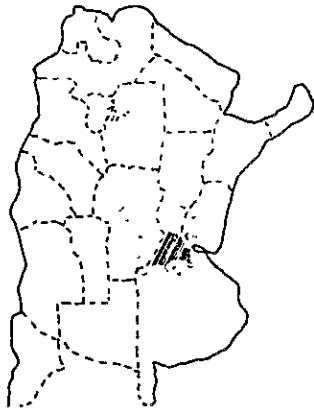
アルゼンチンにおける大豆の栽培は1950年代の終り頃より開始されたもので極めて新しい作物である。



国の統計には1957/58年より現われてくるが商業ベースでの生産が行われ始めたのは20年前の1960/61農年からでそれまでの1千ヘクタールたらずの栽培面積が一举に1万ヘクタールへと拡大されている。その後60年代を通じて3万ヘクタールまでの範囲に止っていたものが70年代に入ると世界の飼料需要の増加からこれに呼応して生産が急増し上表にみられるように急カーブを画いて栽培面積とそれに伴う生産量が増大し79年には史上最高の370万トンの生産をあげるにいった。他の穀物類が1930年頃を最盛期として以後今日にいたるまで停滞を続けている中で飛躍的な生産を

示した唯一の作物である。この生産増加は他の作物と異なって栽培条件が制約され、南米大陸ではブラジルの中南部地方、パラグアイの東部地方とあわせアルゼンチンの中部地方がすぐれた栽培条件を有しているのに対し、世界の生産国の中、ほとんどの国が自給に稍一杯か自給にもこと欠く状況にあり、とくに世界2位の大生産国中国は逆に大型の輸入国に転じつつある状態にあり、各大陸とも一部が自給態勢、他は継続した輸入を行っており北米と南米だけが供給側の立場にあるためである。米国、ブラジル、アルゼンチン及びパラグアイが世界のわずかな供給国であるため世界の需要が集中し、いきおい生産の拡大を促してきたものである。

大豆の生産地帯



国内の生産はミシオネス州より開始されたが、その後次第に南下し現在ではサンタ・フェ州南部とブエノス・アイレス州北西部すなわちこの両州の境界線を中心とした平原地帯に移行し、これにコルドバ州を加えた3州が一大生産地となっている。この3州の生産は植付面積とともに85%以上を占める。

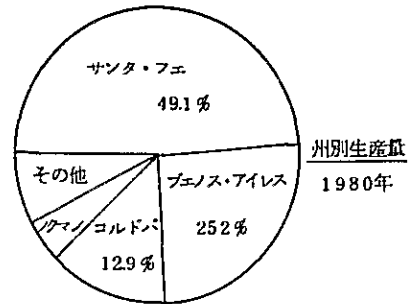
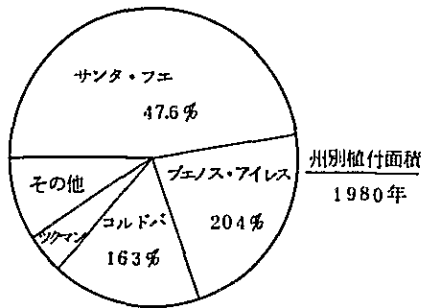
農場の整地と播種は一般に9月より開始され10月まで継続して行われる。この間降雨多量や気温の低下がひどい場合は11月まで延期されることもある。この頃になると同じくこの一帯を生産地とする小麦の収穫期に入るためこれが優先され当初順調に運ばなかった大豆の植付けは非常に遅延する。また3月頃の異常高温は時期はずれに成熟を早めたり害虫の発生を促す。79年には

この様な事例がコルドバ州で起り少からぬ被害をあたえている。適期に降雨があると4月より収穫が開始され5～6月と続き、79年の場合は7月に全国の収穫が終了している。

表106 大豆：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000 ha						生 産 量 1,000トノ					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
サンタ・フェ	2160	2500	4350	7140	8790	10000	2850	4340	9700	16000	21800	17200
ブエノス・アイレス	304	435	520	1330	2620	4700	370	623	740	2800	5200	8830
コルドバ	480	740	1010	1320	2630	3430	640	835	1650	2860	6560	4500
フクマノ	240	249	360	526	750	850	279	443	600	950	1490	1340
サンチャゴ・デル・エステロ	05	03	13	72	165	437	06	02	15	130	300	860
コリエンテ	179	184	260	475	460	480	255	301	400	370	350	710
ミノーイフ	261	256	350	320	328	320	380	340	570	290	300	540
エントレ・リオス	22	23	90	158	353	400	28	32	130	330	540	530
サルタ	04	-	30	122	250	240	04	01	60	237	400	356
カタマルカ	-	03	04	07	08	20	-	02	04	07	05	23
チャコ	23	27	18	20	20	30	26	27	18	24	24	15
全 国 計	3695	4425	7100	11500	16400	21000	4850	6950	14000	24000	37000	35000

出所。



最近の栽培状況を州別にみると79/80農年ではサンタ・フェ州が前年を1.4%、過去5ヶ年間の平均を100%上回る100万ヘクタールの植付を行って史上最高の記録を作った。しかしながら全国の総植付面積に占める比率は前年に達した5.4%を下回る4.76%へと縮めているが、これは国内2位のブエノス・アイレス州における植付面積が前年比7.9%増を示し、国内植付面積に対するシェアを前年の16.0%より22.4%へ伸ばしたためである。コルドバ州の場合は前年と同様に全国面積の1.6%であるが増加率は前年比3.0%増、過去5ヶ年間の平均に対して2.87%と大きい。植付面積に対する収穫面積の比率はその年の気象条件によって左右され変動するか、過去10年間の平均は高く植付面積の9.6%が収穫されている。79/80農年も天候が順調でなかったにもかかわらず収穫率は全国平均で9.67%に達しており主要生産州についても88.9%に止ったコルドバ州を除き、他はすべて9.0%以上の収穫率であった。

単収については表105にみられるように過去10年間に顕著な向上がみられ76/77農年以降全国平均で1ヘクタール当たり2トンを超えるようになり78/79農年には2,313kgの記録となった。これに対し79/80年はふたたび1,724kgへと単収を落しているがこれは天候不順と害虫の発生によるものである。

アルゼンチンの単収を世界の生産国と比較す

ると79年では米国、中国、ブラジルの三大生産国を上回っておりアルゼンチンにおける生産性の高さが示されている。広大な面積と高い生産性は大豆生産におけるアルゼンチンの立場をますます強固なものとしている。

以上の通り79/80農年は単収の極度の減少から植付面積の増大にもかかわらず前年の生産量を上回ることは不可能であった。唯一の例外はブエノス・アイレス州で栽培面積拡大の割に単収の低下がわずかであったことか全国生産比率の増加につなかつた。

ロ) 世界生産需要動向

大豆は豊富な植物蛋白や食用油搾油原料とし

て貴重な作物であるばかりでなくその搾油粕は家畜の飼料として重要な役割をもつなど多用途を持つ特性から近年高い関心を持たれてきたが、70年代に入って以来、工業先進国を中心として拡大された養鶏、養豚用飼料としての需要増大に伴う世界的な生産拡大がみられた。

表107 大豆：世界の単収とアルゼンチンとの比較 Kg/ha

区 分	1977	1978	1979
世界平均	1,608	1,518	1,643
米 国	2,606	1,806	2,219
中 国	1,529	1,186	1,350
ブ ラ ジ ル	1,770	1,260	1,240
全上パラナ州	2,136	1,341	1,709
パラグアイ	1,647	1,579	※
アルゼンチン	2,121	2,174	2,313
サンタ・フェ州	2,395	2,353	2,529
ブエノス・アイレス州	1,574	2,154	2,000
コルトバ州	1,823	2,200	2,523
ツクマシ州	1,676	1,806	1,987

出所：FAO SEAG ※資料未入

表108 大豆：世界の生産推移（各3年間平均）

単位 1,000トン

主要生産国	1965/67		66/70		71/73		74/76		77/79	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
米 国	24,949	64.3	30,450	67.3	36,343	66.8	36,739	58.1	52,983	62.7
中 国	11,013	28.4	11,078	24.5	11,691	21.5	12,327	19.5	13,187	15.6
ブラジル	611	1.6	1,073	2.4	3,445	6.3	9,665	15.3	11,004	13.0
アルゼンチン	20	0.1	39	0.1	207	0.4	559	0.9	2,533	3.0
その他の国	2,181	5.6	2,580	5.7	2,690	5.0	3,944	6.2	4,829	5.7
世界計	38,774	100.0	45,220	100.0	54,376	100.0	63,234	100.0	84,536	100.0
推 移	-		+ 166		+ 202		+ 163		+ 337	

出所：FAO

表107、及び108にみられる通り世界の大豆生産国の中では米国が58-63%のシェアでリードしており中国、ブラジル及びアルゼンチンがこれに続いているが、中国は生産の増加がみられぬため65/66年当時の28.4%のシェアを最近ではその半分に落し、76年までは急激に伸びてきたブラジルも78、79の2年間にわたる天候不順のため生産が落ち、世界生産に対するシェアは74/76の15%より77/79年には13%へと落した。世界の大豆生産の中で成長率からみて顕著な実績を残しているアルゼンチンは65/67年当時わずか2万トンの生産によって世界の0.1%を占めていたにすぎないが77-79年の3年間平均で3%のシェアとなり79年度だけを見ると4%へと伸びている。

表109 大豆：最近の世界生産量

単位 1,000トン

大陸及主要生産国	1975	1976	1977	1978	1979
中 北 米	(43,181)	(35,597)	(48,983)	(50,949)	(62,181)
米 国	42,114	35,042	47,948	50,149	60,851
メ キ シ コ	699	302	507	324	701
カ ナ ダ	367	250	527	475	629
南 米	(10,810)	(12,338)	(14,437)	(12,833)	(15,113)
ブラジル	9,892	11,227	12,513	9,800	10,700
アルゼンチン	485	695	1,400	2,500	3,700
パラグアイ	220	284	377	300	450
コロンビア	169	75	103	131	169
ア ジ ア	(14,347)	(14,081)	(14,647)	(15,027)	(15,465)
中 国	12,662	12,453	12,955	13,257	13,350
インドネシア	590	522	523	530	600
ヨーロッパ	(376)	(410)	(399)	(460)	(495)
ソ 連	(780)	(480)	(540)	(680)	(600)
アフリカ	(103)	(114)	(45)	(206)	(214)
大洋州	(74)	(45)	(55)	(77)	(103)
世界計	69,670	63,064	79,206	80,232	94,171

出所：FAO

世界の需給関係については世界の各主要生産国の農年が一定していないのでF A Oの歴年を単位とした統計によらず米国農務局が80年8月に行った推定をもとに検討すると次のことが観察される。

イ) 世界の輸出は79/80年に前年比13%の増加を示した。この指数は世界生産の80%が集中する米国の場合も同様であるが同国では急激な生産の増加に対して国内の需要がこれに伴わないため国内のストックも又極度に増加する見込みである。大豆(豆)の場合アルゼンチン及びブラジルは米国に次ぐ重要な輸出国であるが輸出に占める比率は、それぞれ85%及び53%と低い。ただしブラジルの場合は豆の状態での輸出は極力避けており搾油加工を行って国内の食油及び飼料需要を満たしたのち余剰の食油及び粕の輸出を主体としている。

ロ) ヨーロッパ共同市場は地域内での輸出はあるがネットでみた場合世界輸入の435%を吸収している。1国として輸入がもっとも大きいのは日本で年間400万トン以上の輸入を行っており、スペインがこれに続く大型輸入国である。

ハ) 工業用原料に向けられる大豆についても米国のシェアが40%以上を占めるが、この分野ではブラジルの比率も高く16.8%に達している。この両国ともすべての原料が国産品で供給されている点に強みがある。

表 110 大豆：世界の需給 1980年8月の推定値 単位 100万トン

項目別及国別	1978/79		1979/80		前年対比 %
	数量	比率%	数量	比率%	
イ. 生産					
米 国	50,898	65.3	61,715	65.4	+ 21.3
ブラジル	10,200	13.1	15,200	16.1	+ 49.0
アルゼンチン	3,700	4.8	3,300	3.5	- 10.8
その他の国	13,052	16.8	14,160	15.0	+ 8.5
世界計	77,850	100.0	94,375	100.0	+ 21.2
ロ. 輸出					
米 国	20,491	81.7	23,133	81.9	+ 12.9
ブラジル	610	2.6	1,500	5.3	+131.4
アルゼンチン	2,830	11.3	2,400	8.5	- 15.2
E C 諸国	338	1.4	375	1.3	+ 11.0
その他の国	748	3.0	856	3.0	+ 11.4
世界計	25,050	100.0	28,264	100.0	+ 12.8
ハ. 輸入					
E C 諸国	12,005	46.7	12,377	44.9	+ 3.1
日 本	4,132	16.1	1,450	16.1	+ 7.7
ス ペ イ ン	2,237	8.7	2,464	8.9	+ 10.2
中 国	276	1.1	1,000	3.6	+262.3
台 湾	1,111	4.3	1,000	3.6	- 10.0
ソ 連	1,750	6.8	1,500	5.4	- 14.3
東欧諸国	694	2.7	865	3.2	+ 24.6
その他の国	3,481	13.6	3,939	14.3	+ 13.2
世界計	25,686	100.0	27,595	100.0	+ 7.4
ニ. 工業加工					
米 国	27,706	41.6	30,210	39.9	+ 9.0
ブラジル	8,953	13.4	12,700	16.8	+ 41.9
アルゼンチン	625	0.9	700	0.9	+ 12.0
E C 諸国	11,344	17.0	12,038	15.9	+ 6.1
日 本	3,397	5.1	3,700	4.9	+ 8.9
ス ペ イ ン	2,207	3.3	2,500	3.3	+ 13.3
台 湾	861	1.3	891	1.2	+ 3.5
ソ 連	2,300	3.5	2,015	2.7	- 12.4
東欧諸国	1,125	1.7	1,446	1.9	+ 28.5
その他の国	8,096	12.2	9,450	12.5	+ 16.7
世界計	66,614	100.0	75,650	100.0	+ 13.6
ホ. 期末ストック					
米 国	4,736	71.1	10,886	83.5	+129.9
ブラジル	395	5.9	595	4.6	+ 50.6
アルゼンチン	111	1.7	111	0.9	-
その他の国	1,418	21.3	1,431	11.0	+ 0.9
世界計	6,660	100.0	13,023	100.0	+ 95.5

出所：U. S. O. A.

アルゼンチンの輸出：1976年に77千トンの輸出量をもって開始されたアルゼンチンの大豆輸出は4年後の79年には早くも米国に次ぐ280万トンに拡大し7億ドルの外貨収入を得た。アルゼンチン史上でも短期にこれ程の急成長を示したのは初めてのことであり、世界でもおそらく類例のない輸出の増大であろう。この事例は停滞を続けるアルゼンチン農業の底力を示した1例といえる。アルゼンチン産大豆の主要輸出先は西欧諸国の中でもオランダ、イタリア及びスペインが合せて79年度輸出の70%を占めている。1980年度の輸出についてはまだ統計が発表されていないので判明しないが79/80年の減産が影響して輸出は79年を下回る見込みである。80年上半期の実績をみると前年同期を45%増える784千トンで主要輸入国はソ連(4079千トン)オランダ(1113千トン)及びスペイン(87.2千トン)となっているが、他方輸出部門が7月始めに発表した数字は230万トンとなっているので急激な減少はなかったものと推定される。80年度より新しい市場として現われたソ連は世界でも大型の輸入国でありアフガニスタン問題を契機としたこの買付けは、とうもろこしの項で述べた通り飼料用穀物の今後5ヶ年におたる取引契約によるものであるが今後の重要な市場として注目される。一方80年4月には穀物取引委員会がパイロット・プランとして5千万トンの大豆をサルタよりチリーのアントフマガスタに通ずる鉄道を利用して輸出することを発表した。これは輸出大豆のすべてが大西洋側の港湾に集中している現状から将来の極東市場への輸出を大平洋岸より行なおうとする構想であり注目されている。

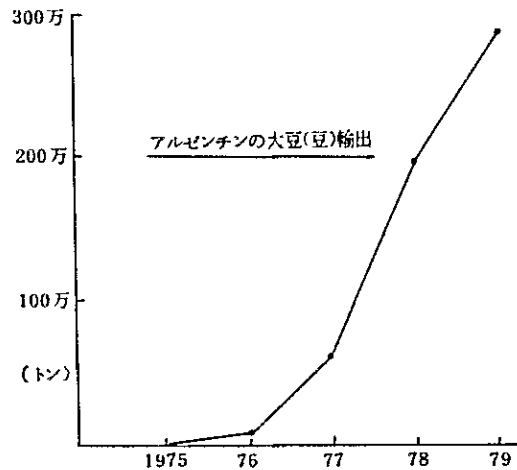


表 111 大豆(豆)輸出実績

単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
オランダ	-	74,913	266,784	769,031	1,248,315
イタリア	-	-	84,481	256,146	408,262
スペイン	-	-	-	234,572	348,303
デンマーク	-	-	5,994	35,468	112,079
中国	-	-	-	33,135	101,917
西独	-	2,000	52,192	163,729	90,823
英国	-	-	-	95,127	88,414
ベルギー	-	-	65,266	106,233	85,636
ブラジル	-	-	-	6,000	62,761
フランス	-	-	-	57,913	56,181
ルーマニア	-	-	7,750	16,190	28,279
メキシコ	-	-	54,733	62,000	18,100

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
ギリシヤ	-	-	-	12,721	25,300
リバノ	-	-	6,700	34,603	14,194
その他の国	-	-	69,716	101,909	121,223
計	-	76,913	613,106	1,984,759	2,809,787

出所：

国際価格：シカゴ穀物市場の79年8月より80年9月にいたる平均価格の推移をみると、大豆相場は79年8月より80年4月までの下落を続けた期間とその後の上昇期間に明確に区分される。

表112 大豆：シカゴ穀物市場の平均価格推移

区分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
ト当りUS\$	263.96	262.11	246.85	248.90	243.87	243.67	241.28	232.10	218.34	229.56	232.63	270.18
前月比 %	-5.9	-0.6	-5.8	+0.8	-2.0	-0.1	-0.1	-3.8	-5.9	+5.1	+1.3	+16.1

出所：MERCADO DE CEREALES A TERMINO DE BUENOS AIRES

最初の期間内にみられる価格の下落は米国の史上最高大豆生産が需要を上廻りストックを増大させたことを主要因としており、ブラジルのこれ又史上最高の生産も価格面にネガティブな影響をあたえた。またアフガニスタン問題によるソ連向農産物の輸出中止（この中に大豆も含まれる）、さらには次期農年の植付拡大のニュース等すべてがマイナス要因として価格に影響したことはいうまでもない。この期間中例外的に価格の上昇をみた11月は米国とイラン間の緊迫した政治情勢を反映したものであり、また米国ドルの切下げによるヨーロッパ諸国の需要増大は9月の下落を緩和した。後期の価格は他の作物にみられると同様に米国の旱魃を反映したものである。

へ) 国内市場価格

国内生産物の大半が輸出される大豆の国内市場価格は国際価格の変動を直接反映する。上述の通り好調であった需要の伸びにもかかわらず供給量がこれを上廻ったため世界のストックは増加し、このため下落した国際価格に平行して国内価格も79年8月より80年4月にかけて下落した。インフレのはげしいアルゼンチンでは実際価格の表示では実質的な価格の変動を観察出来ないため1980年の価格をベースとし卸価格にみられるインフレを除外した実質価格の表示が行なわれているが、この実質価格によると80年の2、5、7月を除きすべて前月比価格の下落をみている。

79年8月より12月までの国内価格の下落は同期間中にみられた国際価格の下落を反映したものであるが、80年1月のアフガニスタン問題だけは米国の相場下落とは逆の現象を生じており、米国の対ソ制裁に同調しなかったアルゼンチンの国内市場では相当量の対ソ輸出が行なわれるとの予想のもとに価格は2月に反撥し一挙に上昇した。しかし3月にブラジルの記録的な生産が報じられるや価格は再び下落、4月には最低の水準へと転落する。その後80/81農年の米国の減産、継続する需要増、その結果減少したストック等がそれまでの供給過剰を緩和し相場の上昇へとつながっている。80年度中に行なわれた国内取引上の措置としては1980年3月6日穀物取引委員会が発令した決議21,197号がある。これは従来取引の基準として定められていた「蛋白質」「脂肪分」及び「灰分」の含有基準と、その含有量に伴う割増金又は割引制度を廃止したもので次の理由によるものであった。

イ) 国際間取引においては「蛋白質」の含有量は取引の基準とされていない。

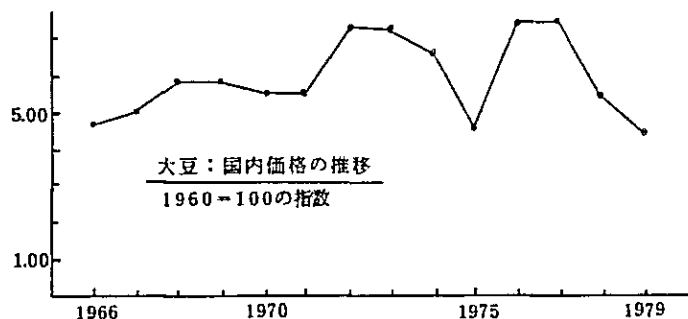
ロ) これに対し脂肪分の含有量が国際間取引契約の要素となっている。しかしアルゼンチンの従来の規定は国際規準に応じておらずこれに合わせる必要があった。

また4月には同取引委員会決議第21,425が発令され、北部地方の79/80生産大豆についての買付けに関する細則が発表され、5月には天候不順の結果として被害を受けたため、低品質大豆の売買を規制する新しい基準が設定されている。

表113 大豆：国内価格の推移

月別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	10g当りペソ価格	%	1960=100	%
79年 8月	32,564	- 31	411	- 135
9	31,750	- 25	379	- 78
10	32,252	+ 1.6	371	- 21
11	31,882	- 1.1	355	- 43
12	31,500	- 1.2	339	- 45
80年 1月	31,341	- 0.5	323	- 4.7
2	35,738	+ 14.0	352	+ 90
3	33,591	- 6.0	316	- 10.2
4	31,550	- 6.1	286	- 9.5
5	33,543	+ 6.3	292	+ 2.1
6	35,500	+ 5.8	290	- 0.7
7	40,918	+ 15.3	324	+ 11.7

出所：J. M. G. 1 Q. g = 100 kg



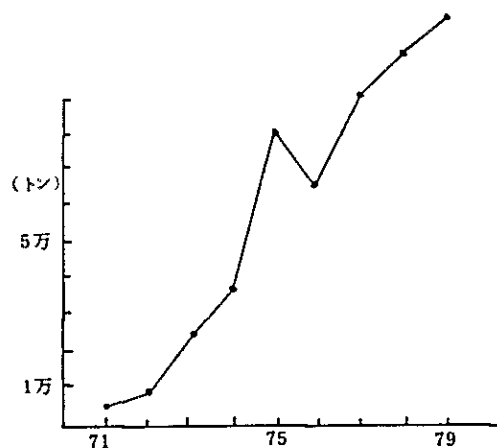
2.2.2.2 大豆油

イ) 国内生産

表114 大豆油：国内生産推移

年 度	生産量 1,000トン
1971	53
72	92
73	246
74	380
75	802
76	660
77	905
78	1031
79	1143

出所：BOLSA DE CEREALES B. A.



1967年までは1,000トン以下の生産規模であった大豆油の国内生産は70年代に入って以降増産が開始され、78年に10万トン、79年度はさらに11万トンへと増加をたどっている。この大豆油生産の拡大は原料大豆の急激な増産を反映するものであることはいうまでもない。しかしその伸び率は最近やや緩慢化している。1980年度の実績については資料を入手していないが原料大豆が減産したためもし輸出が前年並みに行なわれたとすれば大豆油の生産は79年度と同水準での停滞、または下降したものと考えられる。

ロ) 世界の生産需要動向

世界の大豆油生産も1979年度にはふたたび新記録を作り前年を68%上回る126百万トンに達している。主要生産国の順位はここ数年間変化がなく米国が最大の生産国として約40%を占める。米国の生産量は前年を8.3%上回るもので500万トン以上に達しているが同時に世界最大の輸出国でもあり、79年度の輸出量113万トンは世界輸出の37.1%に相当する。米国の輸出量は4ヶ年間に100%以上の増加をみている。米国に次ぐ世界の生産国はブラジルで77年以降世界生産の14%前後のシェアを保持し、輸出量においても米国に次ぐ位置をしめているが、ブラジルの緩慢な輸出増加が世界貿易の拡大に平行していないため世界輸出に占めるシェアは76年当時の26.5%より79年には17.5%へと減少している。

表115 大豆油・世界の生産

単位 1,000トン

生産国 又は生産国	1976		1977		1978		1979	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
米 国	4,372	42.4	4,008	38.9	4,818	40.8	5,218	41.4
E C 諸 国	1,599	15.5	1,603	15.5	1,902	16.1	2,032	16.1
ブ ラ ジ ル	1,275	12.4	1,524	14.8	1,703	14.4	1,693	13.4
中 国	1,046	10.1	1,040	10.1	1,071	9.1	1,120	8.9
日 本	485	4.7	532	5.2	598	5.1	621	4.9
アルゼンチン	81	0.8	92	0.9	107	0.9	111	0.9
その他の国	1,463	14.1	1,517	14.6	1,623	13.6	1,815	14.4
世界計	10,321	100.0	10,316	100.0	11,822	100.0	12,610	100.0

出所：OIL WORLD

表116 大豆油：世界の輸出入

単位 1,000トン

国 別	1976		1977		1978		1979		
	重量	%	重量	%	重量	%	重量	%	
輸 出									
米 国	510	27.2	774	35.8	929	34.7	1,129	37.1	} 原料生産国
ブ ラ ジ ル	498	26.5	502	23.2	504	18.8	534	17.5	
アルゼンチン	64	3.4	40	2.0	66	2.6	74	2.4	
ベ ル ギ ー	101	5.4	85	3.9	131	4.9	118	3.9	} 原料輸入国
オ ラ ン ダ	164	8.7	176	8.1	291	10.9	347	11.4	
西 独	264	14.1	283	13.1	266	9.9	276	9.1	
ス ペ イ ン	125	6.7	134	6.2	273	10.2	311	10.2	
その他の国	152	8.0	166	7.7	215	8.0	256	8.4	
世界計	1,878	100.0	2,160	100.0	2,675	100.0	3,045	100.0	

輸 入

國 別	1976		1977		1978		1979	
	重量	%	重量	%	重量	%	重量	%
イ ン ド	116	61	453	208	488	184	567	18.6
パキスタン	193	10.2	96	44	178	67	280	9.1
イ ラ ン	248	13.1	157	72	279	10.6	251	8.2
モロ ッ コ ス	85	4.5	121	5.6	126	4.8	150	4.9
フ ラ ン ス	93	4.9	91	4.2	110	4.2	109	3.6
中 国	資料なし	※	148	6.8	134	5.1	106	3.5
西 独	33	1.8	52	2.4	96	3.6	96	3.2
コ ロ ン ビ ア	38	2.0	50	2.3	48	1.8	93	3.1
そ の 他	1,081	57.4	1,005	46.3	1,185	44.8	1,393	45.8
世界計	1,887	100.0	2,174	100.0	2,644	100.0	3,045	100.0

出所：OIL WORLD

大豆油の世界貿易も大豆(豆)の場合と同様に少数の輸出国により数多くの国が供給を受けている。輸出国の中にはヨーロッパ諸国を含むが、これらの国は原料の大豆を米国又は南米の生産国より輸入し、これを加工して輸出しているもので米国、ブラジル、アルゼンチンの様に自国の原料を用いた大豆油の生産輸出とは性質を異にしている。

輸入国は世界全般にわたりその数は非常に多いが中でも最大の輸入国はインドで世界輸入量の18%を占めており、パキスタン及びイランも79年度でそれぞれ9.1%及び8.2%を占める重要な市場である。以上3国のはが世界輸入の5%以上を輸入する国はない。

アルゼンチンよりの輸出量は国の統計とOIL WORLDの発表した数字の間に若干の相違はあるが原料豆の国内生産増加に伴って上昇しており79年度において8万トン(OIL WORLDでは7.4万トン)に達している。FOB平均価格は638ドル/トンで前年度を17.3%上廻っており輸出額は51,527千ドルに及ぶ。仕向先国はチリー、ボリビア、ウルグアイ等の南米諸国、オランダ及び南アフリカ連邦などで毎年継続した輸出が行なわれており、又79年にはブラジル及びパキスタンが大量の買付けを行ったのでアルゼンチン当局は新しい市場として大きな関心を示している。しかしながらこの中でブラジルの輸入は原料大豆の生産が政府当局(ブラジル生産融資委員会)の推定量を大きく下廻ったためすでに輸出契約を行った国に対して輸出義務を果たしたあと、国内に搾油用原料大豆が不足する事態が起きたため自国産の原料を輸出しながら原油を緊急輸入し精油したという特殊な事情によるもので、アルゼンチンの輸入も一時的なものであり今後継続する市場となり得るものではない。

表117 大豆油：アルゼンチンの輸出実績

単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
ブラジル	-	-	-	-	32,430
パキスタン	-	-	-	-	11,242
ベネズエラ	-	-	-	4,059	10,999
チリ	330	8,167	13,881	11,612	7,234
ツネス	1,000	-	-	2,991	6,688
ポリビア	1,217	896	6,481	5,529	3,598
オランダ	9,250	2,921	7,364	606	2,019
ウルグアイ	2,287	1,200	200	-	700
南アフリカ	521	2,742	817	462	538
スペイン	-	-	-	-	500
インド	-	-	-	15,243	-
イラン	-	7,450	7,900	5,587	-
その他の国	5,921	40,727	3,175	19,775	4,838
計	20,526	64,103	39,818	65,864	80,786

出所：

大豆油の国際価格：シカゴ市場では表118に示す通り8月より4月まで価格は下落を続けた。この下落の原因はOIL WORLDによると全般的な油脂作物の増産予想と米国の対ソ穀物輸出中止によるものとしている。米国政府は国内価格維持のため各種の手段を講じたが、輸出中止による国内市場へのインパクトの影響は4月まで続いた。その後米国の油脂作物地帯やカナダ、ヨーロッパ西北部及び東欧諸国を襲った乾燥とソ連における降雨多過の被害が重ったため5月以降の価格は反復し、さらに米国の再度の乾ばつにより7月には前月比208%の大巾な上昇がみられた。ロッテルダム市場においても同様な傾向であった。

表118 大豆油：シカゴ市場価格

月別	トン当りUS\$	前月比%
79年 8月	616.58	-
9	608.61	- 1.3
10	579.63	- 4.8
11	572.42	- 1.3
12	552.53	- 3.5
80年 1月	523.62	- 5.3
2	517.95	- 1.1
3	491.73	- 5.1
4	451.23	- 8.3
5	469.90	4.1
6	484.36	3.1
7	585.17	20.8

出所：OIL WORLD

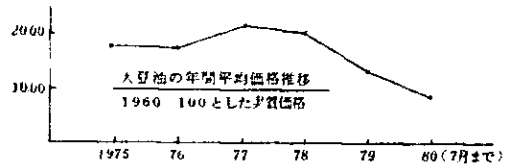
ハ) 国内市場価格

表119 大豆油：国内市場価格の推移

月別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	10g当りペソ	前月比	1960=100	前月比
79年 8月	108,455	- 0.2	1370	+ 10.7
9	114,450	+ 5.5	13.69	- 0.1
10	113,217	- 1.1	1308	- 4.5
11	108,500	- 4.2	1209	- 7.6
12	110,000	+ 1.4	11.84	- 2.1
80年 1月	105,818	- 3.8	1092	- 7.8
2	105,048	- 0.7	1035	- 5.2
3	95,857	- 8.7	902	- 12.8
4	89,700	- 6.4	814	- 9.7
5	90,095	+ 0.4	783	- 3.8
6	87,579	- 2.8	716	- 8.6
7	109,682	+ 25.2	867	+ 1.2

出所：BOLSA DE CEREALES, R. A.
1QR = 100kg

大豆油の国内市場価格は国際相場と同様の経緯をたどった。79年8月より80年7月にいたる1年間の価格はとくに低調で79年9月以降80年6月まで下落を続けており、同月の実質価格716ペソは過去5ヶ年間で最も低い価格水準となっている。

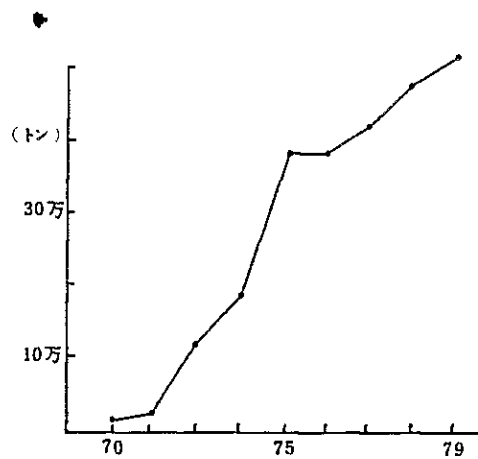


2.2.2.3 大豆の副産物

表120 大豆副産物の生産推移

年 度	生産量(1000トン)
1971	247
72	35.2
73	126.9
74	181.2
75	382.1
76	375.1
77	436.8
78	478.2
79	537.9

出所：BOLSA DE CEREALES, R. A.



大豆搾油加工の副産物として産出される大豆粕及び粉の生産量は穀物取引委員会の発表によると79年度で537.9千トン(OIL WORLDの資料では521千トン)で前年を12%上廻った数字となっている。80年のデータは未だ発表されていないが1~5月の生産量は162千トンと発表されており、前年同期の7.2%減である。国内生産の約半分は

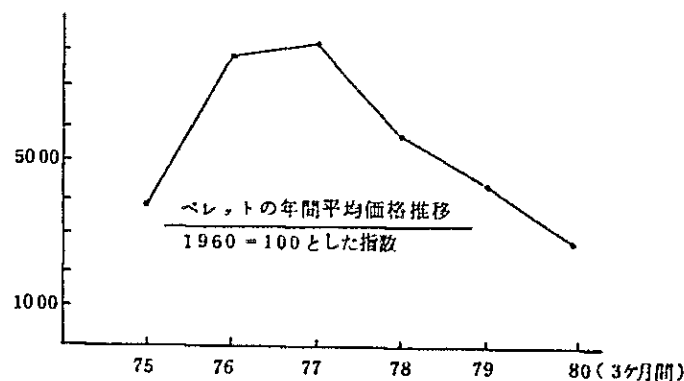
輸出されており、79年には前年比132%増の2895千トンが海外市場に向けられた。80年度は8月の中間までに119千トンの輸出が登録されているが、これは前年同期の166千トンを上廻るので年間を通じると前年の輸出量に達しなかったものと推定される。これらの副産物が大豆を原料とする以上、大豆の生産如何が大豆油及び粕の生産量に影響するのはいうまでもない。

OIL WORLDによると大豆粉の世界生産量は1979年に554百万トンに達したが、この量は前年比6.5%増であり、史上最高の記録となっている。最大の生産国、米国は2.7百万トンを生産し世界の41%を占める。米国は最大の生産国であるばかりでなく最大の消費国でもあり、その年間消費量は150百万トンに達する。同時にまた最大の輸出国で年間6百万トンを生産しており世界輸出の50%を占めている。EC諸国が全体の生産量(9百万トン)で米国に次ぎ16.4%のシェアを持つが、国別ではブラジルの生産が大きく71百万トンを生産しその70%を輸出している。アルゼンチンは生産量の約半分が輸出されるため国内価格は国際価格と深く関連する。大豆油の場合と同様に最近1年間は低調な価格に終っている。

表121 大豆副産物：ペレットの国内価格

月別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	トン当りペソ	前月比	1960=100	前月比
79年 8月	283,636	- 48	3581	- 151
9	278,000	- 20	3326	- 71
10	329,565	+185	3795	+14.1
11	300,000	- 90	3343	- 11.9
12	318,333	+ 61	34.27	+ 2.5
80年 1月	335,000	+ 5.2	34.56	+ 0.8
2	340,000	+ 1.5	3350	- 3.1
3	332,619	- 2.2	3130	- 6.6
4	252,500	- 24.1	2293	- 26.7
5	290,000	+ 14.8	2521	+ 9.9
6	310,000	+ 6.9	2534	+ 0.5
7	346,364	+ 11.7	27.39	+ 8.1

出所：BOLSA DE CEREALES



2.2.3 落花生

2.2.3.1 落花生(豆)

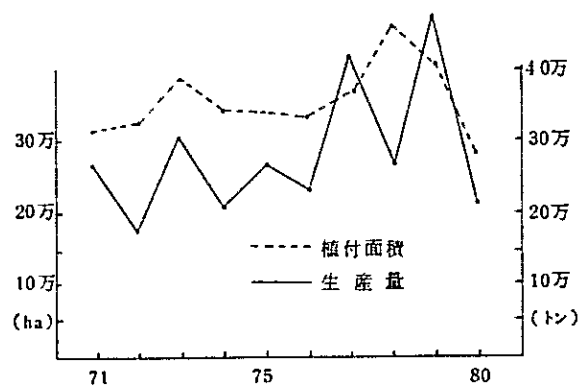
イ) 国内生産

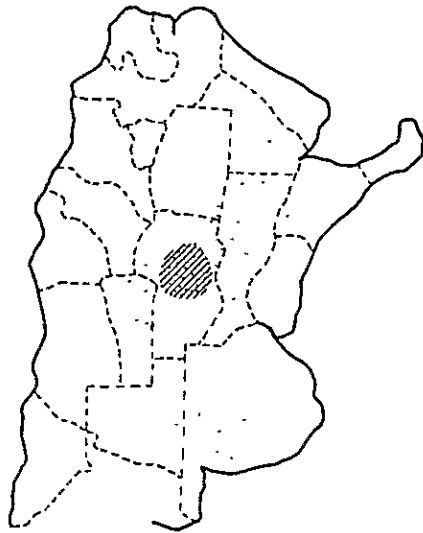
表122 落花生：過去10年間の生産推移

年 度	植付面積	収穫率	収穫面積	単 収	生産量
	1,000ha	%	1,000ha	kg/ha	1,000kg
70~71	3140	990	3098	1,251	271.3
72	3209	920	2938	858	176.4
73	3889	970	3790	1,161	308.0
74	349.5	99.0	341.5	84.2	203.0
75	383.2	93.1	356.8	1,052	262.6
76	335.0	92.2	308.3	1,094	236.5
77	370.0	99.2	367.0	1,635	420.0
78	452.0	94.7	428.0	607	260.0
79	400.0	98.1	392.5	1,198	470.0
80	286.6	97.4	279.1	738	206.0
71~80平均	360.0	96.1	345.9	813	281.4

出所：S. E. A. G.

国内では古くより栽培されてきた作物で前世紀の末にはすでに2万ヘクタールの栽培が記録されていたが、今世紀に入ってからはヒマワリの生産に押されて1930年代まで面積の大きな増加はなかった。落花生の栽培が重要視されるようになったのは、1930年の世界恐慌以後急激に減少した生産に対し、輸入抑制の必要から政府が採った保護政策を契機としている。その結果42年頃より生産は上向きに転じ、原料生産の増加は国内加工工業の発展をも促し、以降ゆるやかなカーブを描いた増産を続け今日にいたっている。この間1978年の植付面積15万ヘクタール、79年の生産量(脱殻重量)





47万トンが史上最高の記録である。一般に雨期に向けて11月に播種し、翌年の5月から6月にかけて収穫する。この作物は一斉に発芽させるための土地の水分、発芽後の気温が以後の成育に大きく影響する。発芽直後の降雨多量や気温が極度に低下する場合には再播種を要することもある。成育期間中に乾燥がひどいと子房柄の地面への侵入を妨げ種子の結実に影響する。また収穫時の湿度過剰は脱殻作業を遅らせるなどの問題がありこれらが単収に影響する。

国内の生産地帯はコルドバ州に集中し80年度でみると全国植付面積の97.6%、生産量の98.6%を占有する。その他の州では2位の生産規模をもつサンタ・フェ州にしても全国生産の0.2%に過ぎない。78年にはサルタ州で5,800ヘクタールの栽培が行なわれ注目されていたが、これも一時的なもので、80年には再び1,000ヘクタール以下に落ちている。

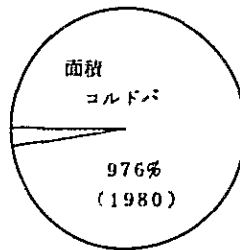
収穫率は毎年の天候不順にかかわらず順調で過去10年の平均では96.1%、77年には99.2%の収穫を行った。

表 123 落花生：州別生産実績

区 分	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
コルドバ	3800	3330	3670	4195	3900	2800	3720	3357	5980	3664	6540	2883
サルタ	01	01	03	02	53	09	01	01	03	03	88	08
サンタ・フェ	17	11	12	03	06	05	18	13	07	04	06	06
コリエンテス	08	05	06	09	05	06	07	05	05	08	05	03
ミシオーネス	03	02	03	01	01	01	03	02	01	01	01	01
サンルイス	-	-	-	06	20	25	-	-	-	10	24	01
ツクマン	-	-	01	-	-	-	-	-	01	-	-	-
その他の州	03	01	05	04	15	20	03	01	03	09	10	23
全国計	3832	3350	3700	4520	4000	2866	375.2	3379	6000	3700	667.4	2925

出所：S. E. A. G.

単位面積あたり収量については1975/76農年まで今世紀始めと同水準の1ヘクタール当り1トン前後の収量でこの間生産性向上のあとは見られない。この水準を抜いたのは76/77農年からで同年に1,635kg/ha、78/79年には1,700kg/haまでにいったが79/80農年は、



同年の天候不順からふたたび1トン台へ戻っている。1979年の統計から世界の単収と比較すると米国の2,963kg/haをはるかに下廻るがブラジルをやや上廻り世界最大の生産国のインドの倍以上の収量である。

表124 落花生：アルゼンチン 世界の単収比較

区分	アルゼンチン平均	コルドバ州	サルタ	サンタ・フェ	世界平均	米 国	ブラジル	インド
1977	1,635	1,637	1,529	1,228	967	2,754	1,455	846
1978	864	861	1,500	1,538	998	2,958	1,293	861
1979	1,700	1,708	1,660	1,420	1,001	2,963	1,636	806

出所：FAO

ロ) 世界の生産需要動向

FAOの統計によると世界の落花生(殻つき)生産量は1979年に19,015千トンに達しており1975年の19,428千トンに次ぐ記録となっている。大陸別にみるとアジアが最も大きく、この中に含まれるインドは世界最大の生産国で5,800千トンを生産して世界の30.5%を占め中国の2,795千トンと合するとアジア生産の80%、世界生産の45%を占める。

アフリカの生産は5,335千トンでアジアに次ぎ、中・北米、南米の順である。上記2国に次いで米国、スダン、インドネシアがアルゼンチンの生産を上廻っている。

一方世界の貿易については「OIL WORLD」が行った推定によると主要輸出国のネット輸出は78年の7,846千トンを79年には8%減少した7,214千トンであった。世界の輸出は米国が圧倒的に大きく79年には世界輸出の50%を占めた。78年には20%の輸出を行ったスダンは79年度にそのシェアを5.5%に落したのに対し、アルゼンチンの輸出は前年比12.3%増加したため米国につぐ輸出国となっており、世界輸出の11.5%を占めている。南米諸国の中では従来ブラジルが最大の輸出国であったが、ブラジル産落花生にみられるAPLATOXINA毒素の含有が許容量以上であるため世界の輸入国がブラジル産よりアルゼンチン産へと切り換えてきたこともアルゼンチン産落花生輸出の増大につながる1つの要因となっている。79年度におけるアルゼンチン産品輸出の増加は、1) 78/79年の国内生産の増加のほか76年

以降輸出政策として油脂原料作物全般にわたる輸出制限の撤廃、

2) 輸出税の段階的減額等によるものであったが増加率とは別に絶対量よりみると少なく油脂原料種子全体の輸出の中に占める比率はわずか0.5%に過ぎない。

急激に伸びた輸出も80年に入ると上半期では前年同期を上廻ったものの生産量が前年に比して減少したため年度全体では79年を下廻ったものと推定さ

表125 落花生：世界の輸出入 (千トン)

(輸出)			(輸入)		
国 別	1978	1979	国 別	1978	1979
米 国	3825	3582	西 欧 諸 国	5275	5139
アルゼンチン	371	831	カ ナ ダ	662	627
ガンビア	263	536	日 本	509	590
ス ダ ン	1600	100	ソ 連	369	300
南アフリカ	452	181	その他の国	894	848
ブラジル	136	200	世界計	7709	7504
中 国	204	300			
セネガル	17.0	50			
その他の計	825	834			
世界計	7846	7214			

出所：「OIL WORLD」

れる。

輸入側をみると世界の輸入量は78年の7709千トンより79年には750.4千トンへと落ちている。最大の輸入国である西欧諸国の中では、その80%がEC諸国でとくにフランスの買付けが大きい。79年の同国の輸入量は1361千トンで世界最大の規模であった。

一方ヨーロッパ市場における落花生の取引価格をみると79/80年の平均価格は年間を通じ16%の下落をみている。他方この1年間の平均価格トンあたり487ドルは前年の平均616ドルに対して21%の下落であった。いづれにしても全般的な価格の下落傾向であった。

表126 落花生：ヨーロッパ市場における価格推移

区 分	1979					1980						
	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当りUS\$	560	535	520	472	480	480	500	485	461	442	440	470
前月比 %	-	-4.5	-2.8	-9.2	1.7	-	4.2	-3.0	-4.9	-4.1	-0.4	6.8

出所：「OIL WORLD」

表127 落花生：輸出実績（アルゼンチン） 単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
オランダ	3,509	775	16,783	17,670	34,680
フランス	55	60	191	8,089	15,180
イタリア	171	20	1,281	4,193	11,643
英 国	201	-	525	2,677	7,613
西 独	20	-	812	1,076	2,643
スペイン	1,063	-	1,769	991	917
日 本	-	-	-	837	3,001
チリ	-	-	190	149	235
その他の国	125	-	3,796	1,458	7,210
計	5,144	855	25,653	37,140	83,122

ハ) 国内市場価格

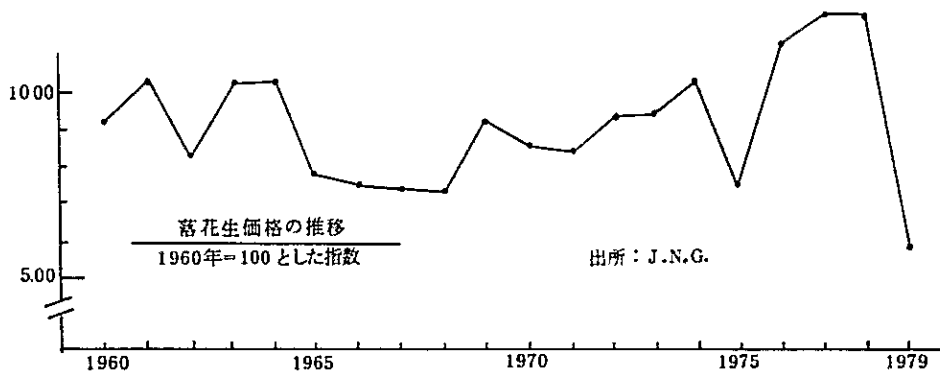
国内の落花生取引はコルドバ市及びロザリオ市で行なわれる。これは、この両市周辺に搾油工場が集まっているためであり、生産された落花生の約75%はこれらの搾油工場に搬入される。

79年8月より80年7月にわたる1年間の価格は搾油工場及び輸出業者の買付けが活発に行なわれなかったため低調に止った。過去の経緯をみると76、77及び78年に高値を保ったあと79年から80年にかけて下落を続けている。この様な状況を打開するため一部の生産者団体は政府に対し販売上の問題点解決を要請してきているが、その中には特別融資制度の設定、税金支払期限の延期等があげられている。

表128 落花生(工業原料用)価格推移

月 別	実際価格 (100キロ当り)		実 質 価 格	
	ペ ン	%	1960年=100	%
79年 8月	46,577	-16	588	-124
9	48,975	52	586	-03
10	44,273	-96	559	-46
11	47,308	69	566	13
12	取引なし	-	-	-
80年 1月	51,056	-	527	-
2	51,500	09	507	-38
3	取引なし	-	-	-
4	-	-	-	-
5	50,143	-	136	-
6	50,000	-03	409	-62
7	取引なし	-	-	-

出所：BOLSA DE CEREALES

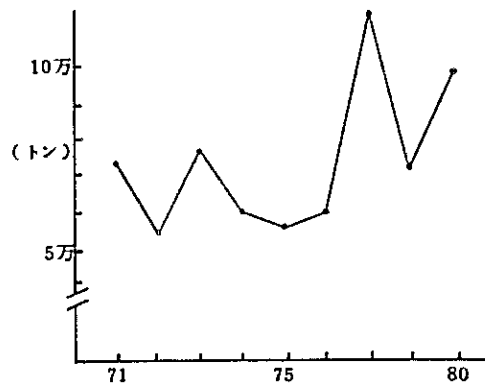


2.2.3.2 落花生油

イ) 国内生産

表129 落花生油の生産推移

年 度	生産量 1,000トン
1971	73.3
72	54.4
73	78.5
74	59.9



年 度	生産量 1,000トン
1975	558
76	601
77	1130
78	709
79	992

出所：BOLSA DE CEREALES

落花生油の生産量は原料の生産量に密接に関連する。最近の生産量は10万トン上下しているが1977年に達した113千トンはこれまでの史上最高の記録とされている。79年度も78/79農年における落花生の増産を反映して前年比165%の増加をみており、その生産量99千トンは77年に次ぐ生産規模であった。

79年度の実生産量99千トン（正確には99,218トン）に要した原料は270千トンで原料に対する搾油率は37%であった。80年度は79/80農年における原料生産の減少から落花生油の生産も又減少するものと“OIL WORLD”は推定している。これを裏付けるように80年上半期の生産量は、前年同期の37千トンに対し10千トンであった。

ロ) 世界の生産需要動向

過去数年来減少気味であった世界の落花生油の生産は、79年に上向きに変わり前年を8%上回る2.8百万トンへと復活した。この増産は世界貿易の推移にみられる通り世界の需要に応ずるものといわれている。世界最大の落花生油の生産国はインドで世界生産の47%を占め、中国がこれに続くが、この2大生産国とも国内消費が大きいため輸出余力を持たず主要輸出国には含まれていない。

表130 落花生油：世界生産とアルゼンチンの位置

単位 1,000トン

国 別	1976		1977		1978		1979	
	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア
インド	1,322	41.7	1,142	41.9	1,253	48.8	1,340	47.2
中国	419	13.2	365	13.4	359	14.0	418	14.7
セネガル	302	9.5	285	10.5	117	4.6	199	7.0
スダン	140	4.4	133	4.5	143	5.6	178	6.3
米 国	218	6.9	115	4.5	67	2.6	67	2.4
アルゼンチン	62	2.0	129	4.7	85	3.3	99	3.5
ブラジル	117	3.7	67	2.5	71	2.8	88	3.1
フランス	107	3.4	61	2.2	75	2.9	48	1.7
その他の国	480	15.2	430	15.8	396	15.4	401	14.1
世界計	3167	100.0	2727	100.0	2,566	100.0	2,838	100.0

出所：OIL WORLD”

上表にみられる世界の生産国については次の事項が特筆される。

- 1) セネガルは78年まで生産が下降したが、79年には復活し世界生産のシェアを高めた。
- 2) インド及び中国を除く主要生産国の中で継続して同等の位置を保っているのはスダンのみである。これは必ずしも生産増を意味するものではないが、他の国が世界生産の位置を上下させてきたのに対しスダンのみは常に4位の位置にある。
- 3) 米国、ブラジル及びフランスにおいて大巾な生産減がみられる。とくにフランスは世界最大の輸入国となっている。世界の輸出入についてみると最大の輸出国はセネガルで78年を除き常に世界の首位を占めてきた。76年にはブラ

ジルがこれに続く輸出国であったが77年より増加したアルゼンチンの輸出量が79年にいたるまでセネガルに次いでおりブラジルはその後に位置している。米国は76年以降次第に輸出を減じてきたが79年には急激な減少を示した。一方輸入国はフランスが圧倒的に大きく79年度で世界輸入の44%を占め、イタリア、ベルギー及び西独がこれに続く輸入国である。

アルゼンチンよりの落花生油輸出は“OIL WORLD”が発表した数量との間に可成りの開きがあるが、INDELの資料によると79年度の輸出量は126,512トンで前年を33%上廻っている。輸出先国はオランダがもっとも大きく西独がこれに続く市場である。ベネズエラは過去年間平均32,500トンの輸入を継続していたが79年には6,000トンに止ったのが注目される。80年度は国内の原料不足に伴う油生産の減少見込みから輸出量も又減少する見通しである。

表131 落花生油：世界の輸出入 1,000トン

国別	1976	1977	1978	1979
(輸出)				
セネガル	248	227	61	145
アルゼンチン	45	132	89	84
ブラジル	94	50	60	83
米 国	48	45	40	5
その他の国	106	138	180	167
世界計	541	592	430	484
(輸入)				
フランス	218	217	186	221
イタリア	22	31	30	46
ベルギー	31	29	25	35
西 独	37	37	38	40
その他の国	224	279	179	157
世界計	532	593	458	499

出所：“OIL WORLD”

表132 落花生油：アルゼンチンの輸出 トン

仕向先国	1977	1978	1979
オランダ	34,058	38,024	79,083
西 独	14,458	11,249	14,373
フランス	2,949	10,440	11,871
イタリア	2,550	1,685	7,605
ベネズエラ	50,863	26,188	6,000
ス イ ス	-	1,022	1,000
その他の国	26,618	6,249	6,580
計	131,496	94,857	126,512

出所：INDEL

ロッテルダム市場価格については表133にみられる通りであるが、油類全般にみられると同様の傾向で全般的に低調な価格水準である。すなわち79年8月より80年7月の間では79年8月のトン当りUS\$875-に対して80年4月にはUS\$717-へと18%の下落であった。その後7月にUS\$870-と復活したがこれも79年度の水準に戻ったにすぎない。

表133 落花生油：ロッテルダム市場価格推移

区 分	1979年						1980年					
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当りUS\$	875.00	872.50	799.58	769.52	722.50	729.87	776.45	723.25	716.56	735.28	717.26	870.00
前月比率%	-4.3	-0.3	-8.4	-3.8	-6.2	1.0	6.4	-7.0	-1.0	2.6	-2.5	21.3

出所：“OIL WORLD”

ハ) 国内市場価格

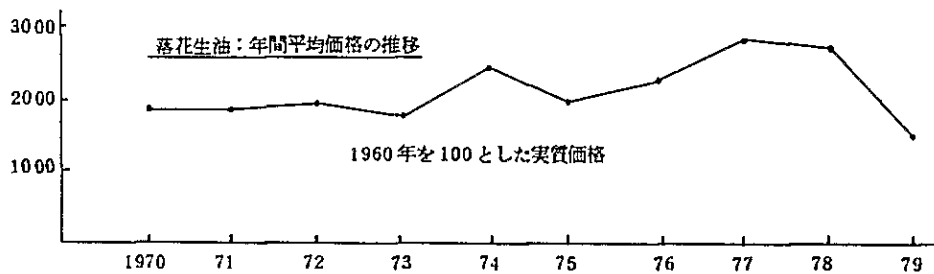
表134にみられる通り年間を通じ上下の変動を統括したが最高価格は80年7月の\$139,682最低は79年12月の\$94,389であった。これを1960年を100とした実質価格で見ると80年の1~2月にみられるゆるやかな上昇を除くと他の月はすべて下落の連続で80年7月によりやく回復した形となっているがそれでも1年前の水準に戻っていない。他の油脂にみられる通り落花生も同じく国内価格は国際価格に影響される。

表134 落花生油：国内価格推移

月 別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	\$/Qg	前月比	1960=100	前月比
79年 8月	102,023	- 02	1288	-11.1
9	107,500	+ 5.4	1286	- 02
10	101,304	- 58	11.67	- 93
11	96,954	- 43	10.80	- 7.5
12	94,389	- 2.6	10.16	- 5.9
80年 1月	101,727	+ 78	10.50	+ 33
2	118,905	+169	11.71	+11.5
3	107,762	- 94	10.14	-13.4
4	102,450	- 49	9.30	- 83
5	109,762	+ 71	9.54	+ 2.5
6	113,842	+ 37	9.31	- 2.4
7	139,682	+227	11.05	+ 87

出所：BOLSA DE CEREALES：BUENOS AIRES

Qg = 100 kg

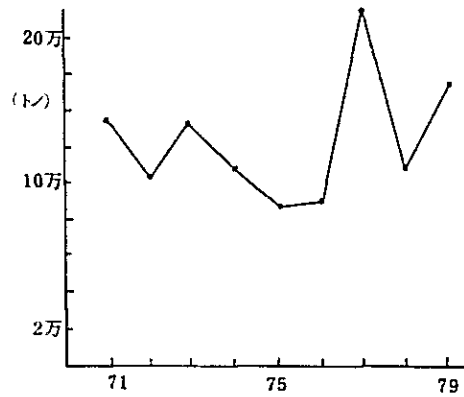


2.2.2.3 落花生加工副産物

表135 落花生副産物の生産推移 単位 1,000トン

年度	粕	粉	計
1971	97.5	40.1	137.6
72	75.3	31.1	106.4
73	87.8	48.8	136.6
74	40.8	68.6	109.4
75	30.5	57.9	88.4
76	19.7	79.3	99.0
77	34.7	163.6	198.3
78	21.2	88.1	109.3
79	15.8	140.6	156.4

出所：J. N. G.



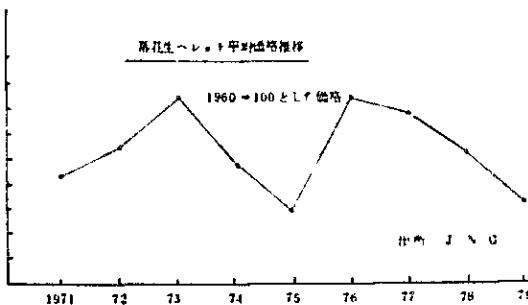
落花生粕の生産は下降してきており79年には15,760トンの生産量で1952年以降最低の記録であった。80年は1月～5月間には生産はゼロとなっている。これに対して79年度の粉の生産は140,619トンに達しており、77年の163,555トンに次いで史上2位の記録を作っているが、80年は再び下降する見通しである。

一方ペレットの輸出は79年に175,821トンの記録的輸出を行ったが、この量は前年比49.1%の増、77年に達したそれまでの記録を7.7%上回るものであった。アルゼンチン産落花生ペレットの最大の輸入国はオランダで全輸出量の66.8%は同国によって買付けられており、フランスがこれに次ぐ輸入国で34千トンの購入を行っている。

表136 落花生：ペレットの国内価格 トン当り

月別	実際価格		実質価格	
	ペソ	前月比	1960=100	前月比
79年8月	226,591	+ 3.4	28.61	- 7.9
9	238,000	+ 5.0	28.47	- 0.5
10	244,783	+ 2.8	28.19	- 1.0
11	259,091	+ 5.8	28.87	+ 2.4
12	270,000	+ 4.2	29.07	+ 0.7
80年1月	264,091	- 2.2	27.25	- 6.3
2	340,000	+28.7	33.50	+22.9
3	325,714	- 4.2	30.65	- 8.5
4	304,000	- 6.7	27.60	- 9.9
5	300,000	- 1.3	26.08	- 5.5
6	300,000	-	24.52	- 6.0
7	307,727	+ 2.6	24.33	- 0.8

出所：BOLSA DE CEREALES



全般的に低調な油粕作物副産物市場の中で落花生ペレットはもっとも影響の少ない商品で79年8月より80年7月までの1年間に35.8%の上昇をみているが、この中で80年の2月には前年2月の価格を5.0%上超った。これをインフレを除外した実質価格で見ると過去の平均価格を下回るが他の作物にみられるような大きな変動はなかった。

世界の落花生粉の生産は表137にみられる通り79年で約400万トンである。生産順位は原料落花生の生産に順じておりインド及び中国が上位を占め、アルゼンチンはブラジルに次いで4位の位置にある。

世界の貿易量についてみると原料落花生の場合と異りインドの輸出が多く79年には世界輸出の25%を占めた。しかし同国は1976年に世界輸出の60%を占めたことがあり、当時よりみると世界貿易に占めるシェアは減少しており反面セネガル及びアルゼンチンの輸出増加がみられる。

表137 落花生粉：世界の生産

トン

国 別	1976		1977		1978		1979	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
イ ン ド	1,917	43.7	1,655	43.5	1,817	50.5	1,942	48.3
中 国	608	13.9	529	13.9	521	14.4	606	15.0
ブ ラ ジ ル	158	3.6	90	2.4	96	2.6	119	3.0
アルゼンチン	99	2.3	198	5.2	132	3.6	156	3.9
米 国	276	6.3	152	4.0	87	2.4	89	2.2
ス ダ ン	221	5.0	210	5.5	225	6.2	281	7.0
セ ネ ガ ル	373	8.5	352	9.2	146	4.0	248	6.2
その他の国	730	16.7	621	16.3	604	16.8	579	14.4
世界計	4,382	100.0	3,807	100.0	3,628	100.0	4,020	100.0

出所："OIL WORLD"

表138 落花生：アルゼンチンのペレット輸出

トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
オランダ	20,153	42,302	109,703	57,874	117,380
フランス	6,608	6,562	40,303	6,029	34,194
西 独	1,798	250	1,792	-	10,817
イタリ-	-	-	-	-	2,755
ベルギー	-	640	3,345	-	-
ポルトガル	-	-	7,196	-	-
その他の国	1,530	-	895	54,038	10,675
計	30,095	49,754	163,234	117,933	175,821

出所：I. N. D. E. C.

表139

落花生：アルゼンチンの粕輸出

年度別	重量 トン	主要仕向先国
1975	2,992	オランダ
1976	497	"
1977	3,067	" フランス
1978	-	-
1979	12,983	オランダ, フランス

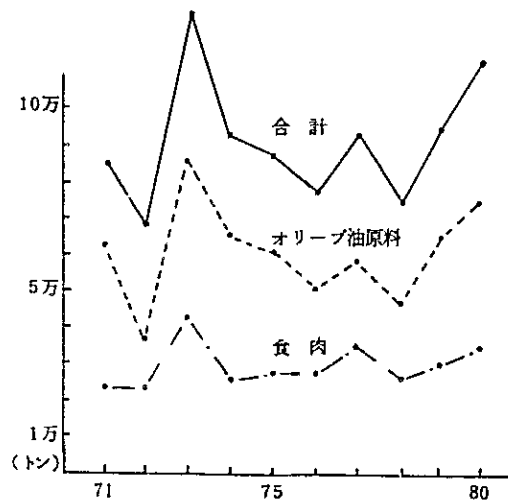
出所：I. N. D. E. C.

2.2.4 オリーブ

表1.40 オリーブ：生産推移 単位 トン

年 度	オリーブ油原料	食用原料	計
1971	62,549	23,713	86,262
72	36,931	22,103	59,034
73	86,820	41,180	128,000
74	66,270	25,930	92,200
75	61,000	28,000	89,000
76	50,940	28,360	79,300
77	59,000	35,000	94,000
78	48,000	27,000	75,000
79	65,000	30,000	95,000
80	77,000	35,000	112,000

出所：S. E. A. G.



アルゼンチンでは比較的新しい作物である。1950年頃には政府の奨励などに刺激されて生産が拡大し約600万本の植付けが行なわれていたが、1960年の農業センサスでは500万本に減少し、この間約100万本が放棄されたと推定されている。当時は約2万の農家がこの栽培に従事したと記録されているが、現在の栽培農家数についての資料はいまだ発表されていない。

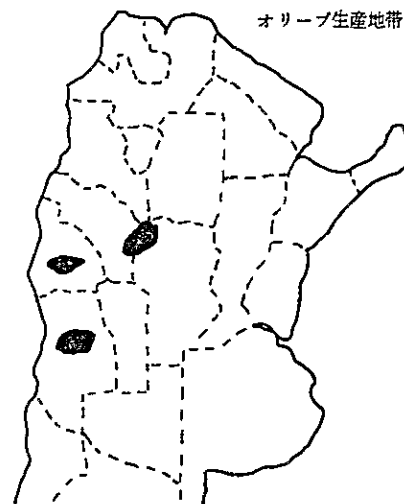
過去10年間の生産推移をみると73年に約13万トンの生産を上げたのを最高に以後減少をみてきたが、80年には再び10万トンを上回る生産に戻った。

生産物はオリーブ油搾油原料用と缶詰め又は瓶詰等にして直接食用にするものと2種に分けて統計されており、その比率はほぼ7：3の割合である。また1本あたりの平均収量は約10kgといわれている。

オリーブ樹は樹齢の長い植物で植付後5～6年目より生産を開始し最盛期は12～15年後といわれる。このため投下資本の回収が遅く、とくに灌漑を要する地域では当初に相当の投資を必要とするのが難点である。

オリーブ栽培上の自然条件は大陸性気候で土壌に透水性があり、他の作物には透性の少ない砂利の多い砂質の土壌がよいとされている。このためメンドーサ、サン・ファン、コルドバ、ラ・リオハ各州間にみられる乾燥又は半乾燥地帯に普及しているが、この地帯は国内のブドウの産地でもあるところから農地の地価が高く、オリーブ栽培のコストを高めることになっている。

オリーブ油の国内生産はオリーブ果の生産量に左右されるので一定しないが79年度には2万トン以上の生産が行なわれ



た。生産量と輸出量の割合は、輸出が1万トン弱でほぼ一定しているので国内生産が増加した時は輸出量は50～60%、生産が減少する年は大半が輸出にまろされる。

表141 オリーブ：州別生産実績(用途別)

州別	オリーブ油原料 1,000トン						食用原料 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
メンドーサ	329	235	298	290	320	423	169	169	20.3	13.0	16.0	16.3
コルドバ	7.3	8.7	7.5	7.0	7.3	29.7	0.8	2.1	2.3	1.0	0.9	5.3
サン・ファン	19.0	14.1	20.0	9.0	22.0	1.6	2.2	1.7	2.0	1.0	3.0	6.4
ラ・リオハ	0.2	0.1	0.2	2.0	1.3	1.0	5.7	6.1	6.9	9.0	7.3	4.1
カタマルカ	0.4	0.2	0.4	0.5	0.4	0.5	1.4	0.7	1.6	1.8	1.4	1.5
エントレ・リオス	0.5	3.8	0.5	0.1	1.4	1.4	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.1
その他の州	0.7	0.5	0.6	0.4	0.6	0.5	0.9	0.8	1.8	1.0	1.2	1.3
全国計	61.0	50.9	59.0	48.0	65.0	77.0	28.0	28.4	35.0	27.0	30.0	35.0

出所：S. E. A. G.

輸出先は伝統的に隣国のブラジルがもっとも大きくかつ毎年一定した買付けを行なう安定した市場であり、輸出総量の98%（79年）を吸収する。この他イタリア及びフランス等の市場もあるが散発的であり、毎年継続した輸入は行っていない。

表142 オリーブ油の生産量と輸出量

単位 トン

仕向先国	1974	1975	1976	1977	1978	1979
ブラジル	8,031	7,101	9,628	9,092	8,710	9,392
イタリア	2,276	1,417	-	2,105	-	-
フランス	491	238	-	-	-	-
米国	168	88	3	45	113	15
エクアドール	15	47	32	31	1	15
セネガル	550	104	-	-	-	-
コロンビア	63	-	33	2	-	-
ウルグアイ	-	-	-	2	34	43
その他の国	132	272	120	402	14	135
計	11,726	9,267	9,816	11,679	8,872	9,600

国内生産量トン	19,067	17,124	12,243	11,508	15,004	21,780
---------	--------	--------	--------	--------	--------	--------

出所：I. N. D. E. C.

2.2.5 その他の食油原料作物

以上のほかアルゼンチンで生産されている主な食油原料作物としては綿実、とうもろこし、ぶどうがあるが、これらの作物は食油生産以外の用途を持つので本報告書では繊維、穀物、果実等の項目に含めた。

表143 アルゼンチンの食油生産量 1,000トン

原料別	1975	1976	1977	1978	1979
ひまわり	2089	3067	3207	4103	470.7
大豆	802	660	905	1031	1143
落花生	558	60.1	1130	709	992
綿実	467	333	394	540	492
オリブ	171	122	115	15.0	21.8
ブドウ	49	58	52	45	13
とうもろこし	32	32	39	3.3	37
ナール油	0.1	0.1	0.5	0.9	1.8
その他の原料	14	30	0.3	0.7	0.4
計	4183	4904	5850	662.7	765.4

出所：J. N. G.

これらその他の作物を含めた食油の総生産量は前表の通りである。

その他の原料に含まれるものとしては、ゴマ、ペにはな等がある。ゴマは新しい導入作物でミシオーネス州で試作されているが機械化が困難なため生産拡大の可能性は薄い。これに対してペにはなはパンペアーナ地方の半乾燥地帯で試験が行なわれており、単収のよさと水分の不足する地帯でヒマワリ栽培を不運とする場所での代替作物として注目されている。

B) 工業原料油

2.2.6 亜麻

2.2.6.1 亜麻種子

1) 国内生産

表144 亜麻：過去10年間の生産実績

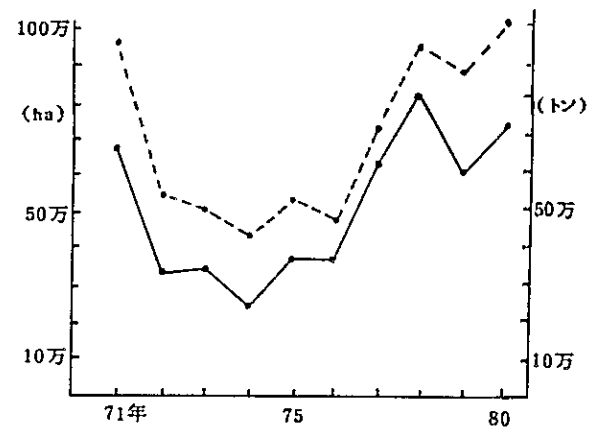
年度	植付面積	収穫率	収穫面積	単収	生産量
	(1,000ha)	(%)	(1,000ha)	(kg/ha)	(1,000トン)
70/71	973	90.8	884	816	680
72	539	83.7	451	700	316
73	509	86.7	441	748	330
74	415	94.0	390	762	257
75	520	96.3	501	761	381
76	471	94.7	446	845	377
77	722	93.1	674	915	617
78	950	93.1	884	916	810
79	893	91.5	817	734	600
80	1,070	91.4	978	760	743

年 度	植付面積	収穫率	収穫面積	単 収	生 産 量
	(1,000ha)	(%)	(1,000ha)	(kg/ha)	(1,000トン)
71~80 平均	706	90.8	642	803	515

出所：S. E. A. G.

アルゼンチンにおける亜麻栽培の歴史は古い。過去の統計によると1878年には、すでに輸出が開始されており、1910年頃になると栽培面積は150万ヘクタールを越えている。最盛期は1930年代で300万ヘクタール以上に拡大され200万トン以上の生産をあげたものであった。当時の生産拡大の理由としては、イ) 亜麻の栽培適地は小麦や大麦と同様であるが、これらとは根の張り方が異なる(亜麻の方が更に深く浸透する)ため土壌よりの養分

取の場所が違特性が麦類との輪作に利用されたこと、ロ) 米国の市場がアルゼンチン産亜麻を搾油原料として継続して輸入していた、等である。このため第2次大戦まではアルゼンチンの重要輸出品目に数えられていたが、大戦後米



国における亜麻の生産が拡大され、輸入を必要としなくなったことからアルゼンチンの輸出は激減し、国内ストックの増加を生じた。この事態に

対し政府が構じた種々の対策によって価格の暴落はまぬがれたも

のの次第に低下していく価格は、生産者の本作物に対する関

心を薄らげ栽培面積の減少へとつながっていく。当時政

府がとった政策として特記されるものは滞貨した原

料処理の手段として国内搾油工場の設置を促進

したことで、以後輸出形態も又第1次産品

輸出の形から、より付加価値の高い加

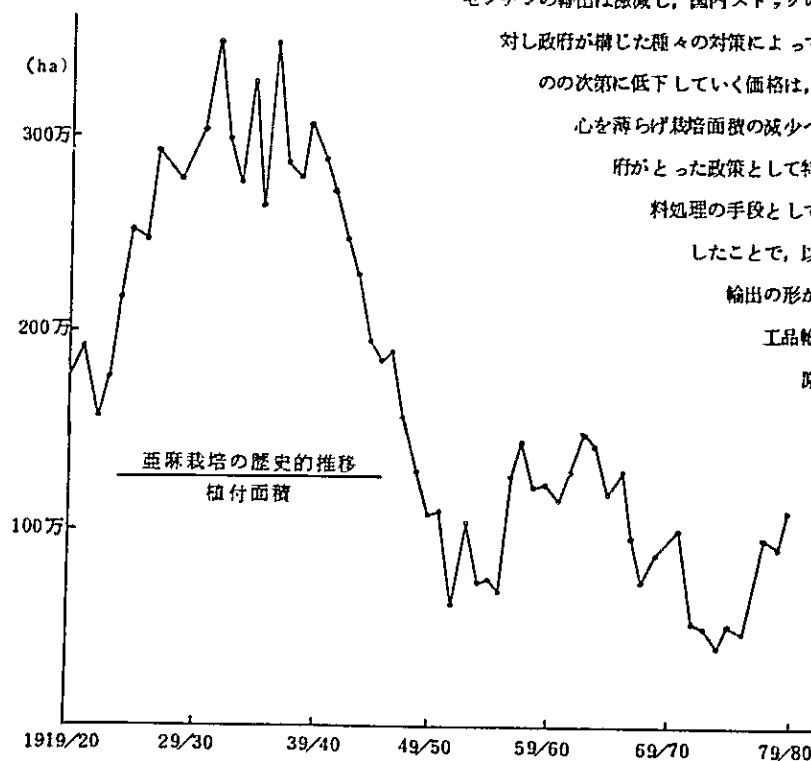
工品輸出へと移行するようになり

原料としての輸出はほとんど

行なわれていない。亜麻

栽培が次に遭遇した

問題は、とくに



第2次大戦以後普及してきた合成品の出現で、このため生産物の市場はさらに狭められながら1970年代に入るが、73年には天候不順も加って栽培面積、生産量ともに今世紀最低の記録に止めるなど斜陽傾向が続いている。1976年以降は軍事革命の経済政策として採用された段階的な輸出税の廃止、油脂原料穀物販売の自由化などが市場に若干の刺激をあたえて栽培のゆるやかな上昇が始まってきた。

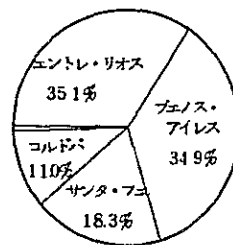
表145 亜麻：州別生産実績

州別	植付面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	234.4	214.2	321.8	400.0	306.0	373.0	200.0	173.5	273.0	400.0	270.0	303.0
エントレ・リオス	140.3	112.3	202.2	300.0	323.0	375.5	95.0	71.6	200.0	230.0	145.0	198.0
サンタ・フェ	70.5	72.2	116.6	168.0	172.0	196.0	45.0	61.7	79.8	130.0	115.0	141.0
コルドバ	69.0	67.3	76.0	76.0	83.0	118.0	38.0	67.1	61.0	46.0	63.0	97.0
サンチャゴ・デル・エステロ	2.6	2.8	2.8	3.6	3.6	4.0	0.9	1.5	0.6	2.2	3.8	1.7
コリエンテス	1.3	1.0	1.8	1.5	4.4	2.0	1.0	0.7	1.1	1.3	2.7	1.6
ラ・パンパ	1.8	1.5	0.6	0.5	0.4	1.0	0.7	0.8	0.4	0.2	0.2	0.5
チャコ	0.1	0.1	0.2	0.4	0.7	0.5	0.1	0.1	0.1	0.3	0.4	0.3
全国計	520.0	471.4	722.0	950.0	893.0	1,070.0	380.7	377.0	617.0	810.0	600.0	743.0

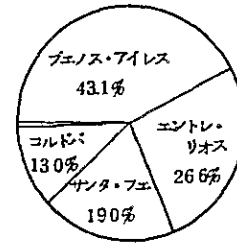
出所：S. E. A. G.

栽培地域はブエノス・アイレス州西部、サンタ・フェ州南部と、これに接続するエントレ・リオス州及びコルドバ州に集中する。中でもブエノス・アイレス州とエントレ・リオス州の栽培が大きく、単収に勝るブエノス・アイレス州の生産が全国1位を占める。

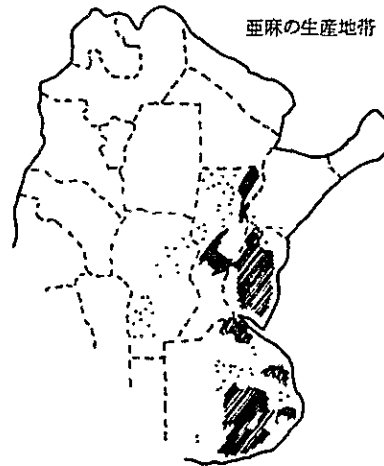
播種時期は降雨の有無によるが、5月より開始される。降雨がないと土地の播付け準備が出来ず遅延し7月に入ることもある。発芽後の成育には雨量を不可欠の条件とし、9月頃まで降雨不足が続くと順調な成育が妨げられる。また害虫や雑草の発生も成育を鈍らせ、降雨は結実に欠陥をあたえる大きな原因となる。成育と結実が順調に行なわれると10月にはすでに収穫に入るところも出てくる。収穫作業中最も障害となるのは強風と暴風雨で作業を遅らせるばかりでなく、最終的な単収に大きな影響をあたえ



植付面積 (1980年)



生産量 (1980年)



る。地域に従い12月～1月に収穫の最盛期を迎え1月の末にはほとんどの収穫を終了する。

統計によると1930年代以降単収の変化がみられず、70年代もヘクタールあたり平均642kgの水準が続いている。近年の生産技術の向上にもかかわらず亜麻栽培にみられる生産性の停滞は亜麻がすでに重要作物の枠外におかれ地力のある土地は他の有利作物によって占められていることを意味するものである。

表146 亜麻：主要生産州の単収

州 別	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	880	863	932	1,064	931	871
エントレ・リオス	685	673	996	793	503	612
サンタ・フェ	668	911	749	833	689	766
コルドバ	605	1,014	886	807	1,000	826

出所：S. E. A. G.

ロ) 世界の生産需要動向

FAOの統計によると79年度は植付面積と単収のいちじるしい増加により世界の亜麻生産は顕著な増加を示し、前年比15.6%増の3,187千トンに達した。この生産量は従来生産記録である1970年の4,088千トンには遠く及ばないが、過去5ヶ年間の平均生産量を2.2%上回るものであった。

世界最大の生産国はカナダ及びアルゼンチンで相互に首位の座を譲っているが、79年度はカナダにおいて単収の減少をカバーする植付面積の拡大がアルゼンチンをしのいでおり、それぞれ26.2%及び25.6%のシェアを占めた。これに続くインド、米国及びソ連等が主要生産国に含まれる。

表147 亜麻：世界生産

国 別	1977		1978		1979	
	1,000トン	%	1,000トン	%	1,000トン	%
カナダ	650	21.7	559	20.3	836	26.2
アルゼンチン	855	28.6	725	26.3	816	25.6
インド	419	14.0	504	18.3	514	16.1
米 国	384	12.8	277	10.0	337	10.6
ソ 連	290	9.7	320	11.6	300	9.4
その他の国	395	13.2	373	13.5	384	12.1
世界計	2,993	100.0	2,758	100.0	3,187	100.0

出所：F. A. O.

亜麻の世界貿易は78年度で輸出入とも70万トン弱で均衡しており、カナダの輸出が大きな割合を占める。70年代に入ってから77年まで世界の輸出はほとんどカナダ1国によって行なわれていたが、78年にはアルゼンチンが21万トンの輸出を行ってカナダに続いた。しかし79年には9月までの統計では再びカナダの輸出が世界の84%を占めている。アルゼンチンの78年度輸出は例外的なもので基本的に原料亜麻の輸出は行っていない。

一方、西独、オランダ、ベルギー等の西欧諸国及び日本が世界の輸入市場である。

表148 亜麻：世界の輸出入 1,000トン

国別	1976	77	78	79※
(輸出)				
カナダ	247	329	409	232
アルゼンチン	-	21	216	11
その他の国	76	83	72	32
世界計	323	433	697	275
(輸入)				
西独	52	109	173	48
日本	97	81	95	47
オランダ	3	10	93	15
ベルギー	25	31	67	20
その他の国	140	178	229	99
世界計	317	409	657	229

出所：FAO ※79年は1～9月間

表149 亜麻：アルゼンチンの輸出 トン

仕向先国	1977	78	79
オランダ	12,396	11,243	10,503
西独	10,837	7,637	2,391
イタリ-	-	8,506	708
スペイン	-	7,031	574
デンマーク	-	3,753	-
ブラジル	-	3,569	-
チェコスロバキア	-	2,509	-
フランス	-	1,433	-
その他の国	-	140	124
計	23,233	215,749	14,300

出所：

世界の市場価格についてはカナダのWINNIPEG穀物取引所の79年8月より80年7月にいたる価格推移をみると8月より12月までは世界の油脂穀物の供給が豊富であったため価格の下落がみられた。この状態はイラン問題及びアフガニスタン問題を反映した80年1～2月に反転し、3～4月にはこの国際間政治情勢下での一時的な需要の減退から価格の下落を招いたあと、5月以降は北半球、とくに最大の生産国カナダの天候不順による減収予想によって価格は再び上向きとなった。

表150 亜麻：WINNIPEG穀物市場価格

区分	1979年					1980年						
	8月	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7
トン当りUS\$	292.19	307.98	302.73	282.66	260.92	280.09	287.23	270.83	244.17	264.17	287.19	327.22
前月比率%	-4.1	+5.4	-1.7	-6.6	-7.7	+7.3	+2.5	-5.7	-9.8	+3.4	+9.5	+13.9

出所：OIL WORLD

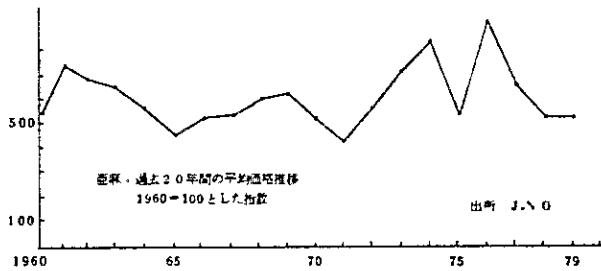
ハ) 国内市場価格

表151にみられる通り亜麻(種子)の国内相場は実質価格の減少を続けた。全般的に少ない供給量と需要の減少が取引を低調化したのが原因である。これは又国際相場におけるWINNIPEG市場及びロッテルダム市場の低調な市況を反映したものであり、このため買手市場となって輸出業者にきびしい品質の選択を許している。

表 151 亜麻：国内市場価格の推移

月 別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	ペソ/トン当	上月比	1960=100	前月比
79年 8月	42,014	6.6	5.31	- 4.8
9	44,105	5.0	5.28	- 0.6
10	40,704	- 7.7	4.69	-11.2
11	40,059	- 1.6	4.46	- 4.9
12	41,994	4.8	4.52	1.4
80年 1月	40,451	- 3.5	4.18	- 7.5
2	42,219	4.1	4.16	- 0.5
3	43,100	2.1	4.06	- 2.4
4	41,310	- 4.2	3.75	- 7.6
5	42,167	2.1	3.67	- 2.1
6	42,889	1.7	3.51	- 4.4
7	46,936	9.4	3.71	5.7

出所：BOLSA DE CEREALES DE B. AIRES.



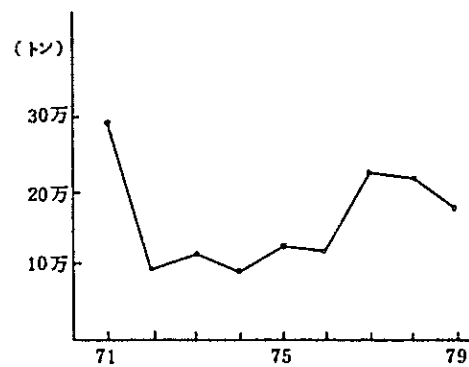
2.2.6.2 亜麻油

イ) 国内生産

表 152 亜麻油の生産推移

年 度	生産量 1000トン
1971	293.8
72	95.0
73	116.5
74	89.7
75	126.9
76	123.2
77	233.6
78	215.4
79	175.5

出所：S. E. A. G.



生産される原料のほとんどが搾油されるので油の生産量は種子の生産量如何によって定まる。国内生産量は上表に示す通り、1979年において157千トン（“OIL WORLD”）～175.5千トン（農牧省資料）であった。80年については原料種子が増産されたので油の生産も増加する見通しである。但し77～78年に達した20万トン以上の規模にはならなかったものと推定される。

ロ) 世界の生産需要動向

77年以降アルゼンチンは世界最大の生産を行っており79年には226%を占め、インド、米国、西独諸国がアルゼンチンに続く主要生産国である。乾燥が早い亜麻油は鉄鋼の調質用に用いられるほか、これを煮沸すると塗料ロンス、印刷用インキ等の原料となるため需要が多く、76~78年にかけて生産増加があったが、79年には最大の生産国アルゼンチンの大巾な減少が世界生産に影響し、結局前年比108%減の約70万トンの生産に止ったアルゼンチンに続くインドは76年に世界1の生産を行ったあとは減少しているが、ふたたび76年の水準に戻りつつある。その他米国も主要生産国に加えられるが、西欧諸国におけるここ3ヶ年間の増産が注目される。76年の生産量38,000トンは79年に78,000トンと100%以上の増加であった。

表153 亜麻油：世界の生産 単位 1,000トン

国 別	1976		1977		1978		1979	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
アルゼンチン	108	172	228	326	221	287	157	226
インド	172	273	113	162	147	190	143	205
米 国	105	166	98	140	112	145	116	167
西 欧 諸 国	38	60	67	96	97	125	98	141
その他の国	208	32.9	193	276	194	253	182	26.2
世界計	631	1000	699	1000	771	1000	696	1000

出所："OIL WORLD"

亜麻油の世界貿易は

79年度で輸出245千トン、輸入256千トンであった。アルゼンチンは最大の輸出国で76年では51%、79年では63%占める。その他の国では米国がやや大きい程度で全体に少なく、いずれも世界輸出品の5%を越えていない。アルゼンチンの最近の傾向としてはソ連の買付けが増加しており、79年ではオランダを上廻っている。輸出単価は、78年のトン当りUS\$

表154 亜麻油：世界の輸出入 1,000トン

国 別	1976	1977	1978	1979
(輸 出)				
アルゼンチン	113	199	235	154
米 国	9	11	25	S/D
その他の国	98	84	80	91
計	220	294	340	245
(輸 入)				
オランダ	23	33	26	28
英 国	23	22	29	14
西 独	37	32	53	29
ポーランド	45	34	40	33
ソ 連	31	42	59	37
中 国	11	15	34	17
そ の 他	79	103	101	98
計	249	281	312	256

出所："OIL WORLD" ※ S/D 資料なし

表155 亜麻油：ロンドン市場価格

月 別	US\$/トン	前月比
79年 8月	665.83	1.0
9	686.25	3.0
10	625.97	-8.8
11	664.88	6.2
12	624.56	-6.1
80年 1月	648.55	3.8
2	699.52	7.9
3	713.62	2.0
4	664.00	-7.0
5	649.72	-2.2
6	662.97	2.0
7	685.54	3.4

出所："OIL WORLD"

31642に対し、79年は
US\$48175へと伸びた。
80年については8月15日
現在で195,000トンの輸出
に達したが、これは前年同期
の輸出量を上廻るものであり、
年間を通じて79年を上廻っ
たものと推定される。

ロッテルダム市場における
価格は上下を繰返えした流動
的なものであったが、80年
7月の価格は1年前に対して
3割の増加でしかなかった。

表156 亜麻油：アルゼンチンの輸出 単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
ソ 連	9,008	24,719	30,300	58,777	80,107
オランダ	56,329	66,698	117,320	122,258	34,474
ポ ーランド	-	-	7,654	838	21,976
中 国	-	-	-	4,751	12,810
イタリ-	5,484	8,190	10,177	10,325	8,265
英 国	-	528	4,990	12,058	5,673
西 独	8,760	3,793	7,430	15,360	3,482
ス ペ イ ン	-	-	835	2,933	3,381
南アフリカ連邦	1,075	1,039	1,792	-	2,633
その他の国	3,681	18,850	-	12,832	10,815
計	81,337	112,842	199,348	240,132	183,616

出所：I. N. D. E. C.

ハ) 国内市場価格

亜麻油の国内消費量は生産量の10%に
満たぬため外国市場の動向とそれに伴なり
国際価格の変動は直接国内価格に影響する。
すなわち、国際価格にみられる80年2月、
3月の高値は輸出部門の需要を呼び実質価
格でみた国内価格の最高値を記録した。ま
た同年6月に記録された905/Qgは
73年以降の最低値であった。

表157 亜麻油：国内価格推移

月 別	実 際 価 格		実 質 価 格	
	ペソ/Qg	前月比	1960=100	前月比
79年 8月	80,045	+ 41	10.11	- 7.2
9	82,650	+ 3.2	98.9	- 2.2
10	78,674	- 1.8	90.6	- 8.4
11	81,583	+ 3.7	90.9	+ 0.3
12	86,278	+ 5.8	92.9	+ 2.2
80年 1月	90,045	+ 4.4	92.9	-
2	98,045	+ 8.9	96.6	+ 4.0
3	110,595	+12.8	104.0	+ 7.2
4	103,950	- 6.0	94.4	- 9.2
5	107,667	+ 3.6	93.6	- 0.8
6	110,737	+ 2.9	90.5	- 3.3
7	115,227	+ 4.1	91.1	+ 0.7

出所：BOLSA DE CEREALES

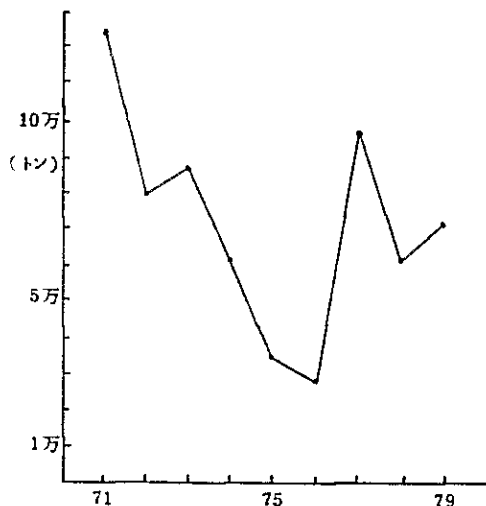
Qg = 100kg

2. 2. 6. 3 副産物

表158 亜麻副産物の生産量

年 度	生 産 量 1,000トン		
	粕	粉	計
1971	97.5	287	1262
72	75.3	52	805
73	87.8	-	87.8
74	40.8	21.5	623
75	30.5	58	363
76	19.7	95	292
77	34.7	62.4	97.1
78	21.2	40.0	61.2
79	15.8	55.5	71.3

出所: BOLSA DE CEREALES B. A



搾油粕の生産量は油の生産量に比例するのでアルゼンチンはどこでも世界最大の生産国である。粉についてみるとアルゼンチン以外では76年に世界最高の生産をあげたインドは77年に極度に生産を落したあとまたびジュア-を高めている。最近顕著な増産をみているのはEC諸国で76年の62千トンより79年には157千トンへと飛躍したが、これは亜麻油における経緯と同様である。世界の貿易量は79年に前年の773千トンを21%減少する611千トンに落ちている。最大の輸出国はアルゼンチンで、世界の55%を占め、米国の比率は24%であった。

表159 亜麻油副産物
アルゼンチンの輸出 単位 トン

年 度	粕	ペレット
74	64,723	3,967
75	213,634	13,948
76	201,810	32,699
77	397,501	71,893
78	425,169	37,883
79	322,870	70,074

出所: I. N. D. E. C.

表160 亜麻油副産物: 粉の世界生産 単位 1,000トン

国 別	1976		1977		1978		1979	
	生産量	%	生産量	%	生産量	%	生産量	%
アルゼンチン	213	17.8	156	33.9	155	30.8	309	23.9
イ ン ド	333	27.8	219	16.4	285	19.4	278	21.3
米 国	192	16.0	189	11.0	213	14.4	215	16.4
EC諸国	62	5.2	106	7.9	156	10.6	157	12.0
その他の国	398	33.2	373	27.8	369	25.0	345	26.4
世界計	1,198	100.0	1,343	100.0	1,478	100.0	1,304	100.0

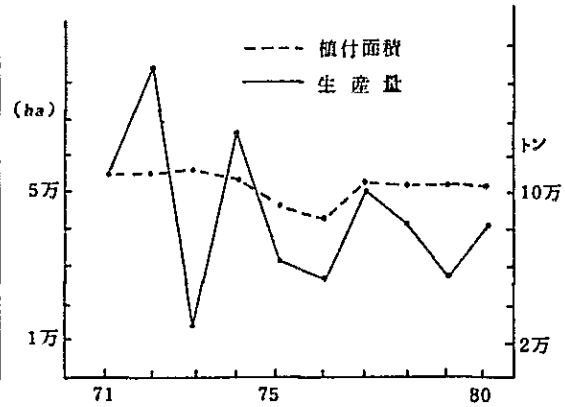
出所: "OIL WORLD"

2.2.7 油 桐

表 16 1 油桐：過去 10 年間の生産実績

年 度	植付面積 1,000ha	単 収 kg/ha	生産量 1,000ト	
			果 実	油
1970/71	56.7	2,130	1100	240
72	56.6	3,004	1700	214
73	57.0	1,229	250	21.8
74	52.8	2,574	1360	93
75	48.5	2,625	61.0	19.9
76	43.7	2,231	550	15.8
77	52.9	1,923	1000	17.9
78	51.7	1,594	824	13.7
79	51.7	1,128	583	9.5
80	51.7	1,567	81.0	資料なし

出所：S. E. A. G.



中国を原産地とする油桐がアルゼンチンに導入されたのは非常に新しく、ミシオーネス州のマテ茶栽培にみられた経済的な危機をきっかけとしている。油桐は非常に湿気の多い亜熱帯性の気候を必要とするが、マテ茶の栽培地域がその条件下にあったため、ミシオーネス州のマテ茶栽培が油桐栽培に切り換えられたとみられ、現在でも全国栽培面積の99%は同州のパラナ川沿線に集中し、5万ヘクタールの栽培が行なわれている。この栽培地帯はコリエンテス州にもまたがり連続しているが面積は少なく400ヘクタール程度の栽培である。これら全国の油桐栽培農家は約6千家族と推定されている。

表 16 2 油桐：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000ha					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
ミシオーネス	474	426	515	513	513	513	590	526	990	820	575	803
コリエンテス	1.1	1.1	1.4	0.4	0.4	0.4	20	24	10	0.4	0.8	0.7
全国計	485	437	529	517	517	517	610	550	1000	824	583	810

出所：S. E. A. G.

油桐は植付後5年目から結実し、実には豊富な油を含み、乾燥度の速いその特性から建築、家具、車輛、船舶、航空機、電気機器等広範な工業部門の塗料原料として用いられるため、工業先進諸国よりの需要があり、生産量の大半が海外市場に向けられている。

米国、オランダ、ソ連及び日本等が重要な市場である。

表163 油桐：桐油の輸出実績 単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
オランダ	8,400	3,815	6,915	7,066	1,970
米 国	5,782	2,345	3,099	2,186	2,129
ソ 連	2,948	3,966	-	-	3,000
日 本	-	3,822	2,463	217	1,273
英 国	682	887	1,545	1,502	915
西 独	-	200	419	899	349
メキシコ	140	200	91	147	190
ポ ー ラ ン ド	-	-	-	-	703
ベネズエラ	-	63	152	15	80
その他の国	1,075	923	331	68	294
計	19,027	16,221	15,015	12,100	10,903

出所：I. N. D. E. C.

表164 桐油の国内生産

年 度	(1,000トン)
1971	240
72	21.4
73	21.8
74	9.3
75	19.9
76	15.8
77	17.9
78	13.7
79	9.5

出所：J. N. G.

単収は年によって変化があり、過去10年間でみると最高が1ヘクタール当り3トン、最低は1トン程度と開きが大きい。搾油率は一般に15%といわれているが、79年に生産された油の量は9,487トンで種の生産量に対して11.7%という数字が出ている。非食品油としては亜麻油に次ぐ生産量である。

以上、亜麻及び油桐のほかアルゼンチンで栽培されている工業用油原料作物としてはヒマがあるが、生産量は78年で508トン、79年には328トンと僅少である。

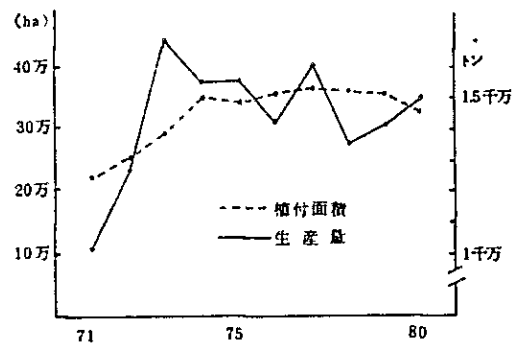
2.3 工業原料作物

2.3.1 砂糖きび

イ) 国内生産

表165 砂糖きび：過去10年間の生産推移

年度	植付面積	単収	生産量
	1,000ha	トン/ha (収穫面積)	
1970/71	2268	505	10,2600
72	2556	485	128700
73	2988	530	168700
74	3504	621	15,5360
75	3480	521	15,5000
76	3508	532	143100
77	3600	422	16,0000
78	3560	457	136000
79	3506	422	14,1200
80	3374	462	15,0000



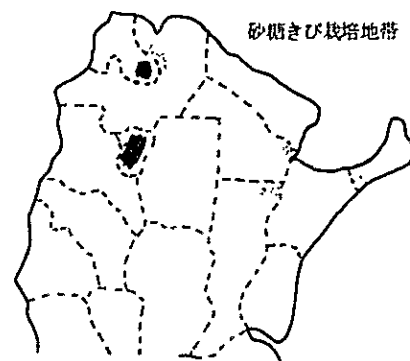
出所：S. E. A. G.

インドのガンジス川流域が原産地といわれる砂糖きびは降雨の多い典型的な亜熱帯気候のもとに育つ作物で霜に対して弱い。世界でもっともすくれた条件は赤道上下の各25°範囲内といわれており、キューバ及びカリブ海諸国、ブラジルの東北部、インド、インドネシアの一部及び中国の南海岸地方がこの条件下にある。

アルゼンチンも上記の条件すなわち南緯25度以北の地域を有しているが、南半球の気候は北半球とは異なり、北半球では北緯25度以内では降雪をみないのに反して、アルゼンチンの場合霜のおそれのない地域は皆無といえる程であり、降雨も不規則なため砂糖きび栽培に最適地といえる地帯はない。

この様な不利な条件の中で数少ない栽培可能な場所は国内北部の一部で、中でもサルタ及びフレイ州が国内でもっともすくれた条件下にあり、ツクマン、チャコ、ミンオネス州の一部が上記両州に順じている。しかしいずれの場合も段階的に年中収穫出来るカリブ海諸国とは異り、アルゼンチンでは年間一定の時期1回の収穫のみである。

(栽培地帯)：以上の栽培地帯は1)ツクマン州 2)北部地方：サンタ及びフレイ州 3)河川沿岸地帯：チャコ、サンタ・フェ及びミンオネス州の3地帯に分類される。栽培面積の規模からみると最も重要な地帯はツクマン州で全国植付面積の70%を占める。しかし砂糖きびの生産量は全国生産量の60%以下で生産性の低さを示している。これに対し北部のサンタ及びフレイ州は自然条件がすくれているため単収が高く、全国面積の22%に



対し生産量は全国の36%に達している。河川沿岸地帯とはパラナ川の沿線を指すものでミシオネス州の南部、コリエンテ州及びフォルモサ州の北部を含むが栽培規模は小さく単収はもっとも低い。とくにコリエンテス州では栽培を放棄した地帯が多く見られる。

表166 砂糖きび：主要生産州の単収 トン/ha(収穫面積) 1,000トン

州 別	1975	1976	1977	1978	1979	1980
ツクマン	479	399	368	344	391	397
フフイ	826	703	840	789	827	770
サルタ	702	739	726	712	733	757
サンタ・フェ	350	300	343	267	276	350
チャコ	249	256	290	273	192	353
全国平均	532	422	457	422	462	478

出所：S. E. A. G.

表167 砂糖きび：州別生産実績

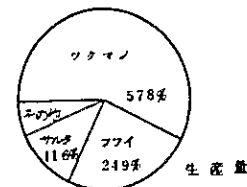
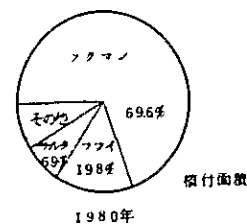
州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
ツクマン	2470	2500	2500	2500	2500	2350	9,7000	8,7420	9,2000	8,0000	8,6000	8,6730
フフイ	490	490	530	528	500	500	3,7510	3,4580	4,2000	3,4000	3,5000	3,7410
サルタ	220	220	260	240	223	233	1,3127	1,3830	1,8000	1,5000	1,4000	1,7410
サンタ・フェ	160	160	160	150	150	160	5600	4500	4800	4080	4140	5600
チャコ	80	76	90	82	72	69	1567	1510	2000	1970	1042	1940
ミシオネス	55	57	57	57	58	59	1112	1190	1130	890	960	850
コリエンテス	03	02	02	02	02	02	76	63	60	54	53	56
フォルモサ	01	01	01	01	01	01	08	07	10	06	05	04
全国計	3480	3508	3600	3560	3506	3374	15,6000	14,3100	16,0000	13,6000	14,1200	15,0000

出所：S. E. A. G.

苗の植付けは6月から9月にかけて行なわれる。多年性の作物で1度植付けると5年以上の収穫を可能とするが、この中で最初に収穫されるきびをCAÑA PLANTAと呼び、その後の収穫物をCAÑA SOCAと呼び区分されている。通常降雨の多い場所に栽培されるが灌漑による水不足の補完も必要とする。

収穫ははまたにマチャェテと呼ばれるパン刃を用い地面すれすれに切り取り、葉を除去して先端を切り取る。この収穫作業を機械化している国もあるといわれるが、アルゼンチンではすべて人手によって行なわれている。

収穫された砂糖きびは24時間以内に製糖工場に搬入されおは



ならず、この時間を超過すると糖分が減少する。従って農場と工場との距離は重要な関係をもっており工場を中心とした一定の半径内で栽培される。サルタ州やフフイ州で製糖工場が直接原料生産を行っているケースが多いが、国内の生産が集中するツクマン州では砂糖きび畑が細分化され、単独栽培者（CANEROS INDEPENDIENTES）と呼ばれる生産者が圧倒的に多い。単独栽培者とは生産した砂糖きびを工場に売り渡す生産者を指すもので工場の直営栽培と区別される。これらの小生産者は平均300スルコス（注：1スルコ（SURCO）は長さ100mうね巾2mの植付られた列を指すもので1ヘクタールに50スルコスの植付けが行なわれる。したがって300スルコスは約6ヘクタールに相当する。）の栽培規模であるが経済単位は900スルコスといわれており、その小規模栽培では生活を支えるにいたらないため、大部分の砂糖きび生産者は自己の農作業が終ると製糖工場又は他の工場等の賃金労働者として就労するのが普通である。

以上収穫の開始から終りまでをサフラ（SAFRA）と呼ぶ。アルゼンチンのサフラは天候の条件しだい開始の時期が決るが、一般的には6月から10月にかけて4ヶ月間である。

（最近の生産量）：過去10年間の砂糖きび生産は面積においてゆるやかな増加を示し、生産量では上下を繰返えしながらも上昇傾向である。79/80農年についてみると植付面積337.4千ヘクタール、生産量は15百万トンであった。砂糖きびの生産に応じて砂糖の生産も当然上下するが過去5ヶ年間における最高は78年に達した158万トン、最低は76年の126万トンであった。79/80農年については生産された砂糖きびの中、11,900,000トンが製糖工場に搬入され131万トンの砂糖が生産された。また23万㎡のアルコール生産のため1,997,000トンの砂糖きびが原料として使用されている。国内の製糖工場数は23で約21千人が就働している。

ロ) 市場

砂糖の国内消費量は年間100万トン弱ではほぼ一定しており、余剰分は国内ストックと海外市場への輸出に振り向けられるがこのいずれも毎年一定せず変動を繰返してきた。輸出は1963年から行なわれており、77年には60万トン以上の輸出実績を残しているが、その後減少して79/80年産品については275千トンの輸出に止まった。主要輸出先は米国（35%）、チリ（20%）及びモロッコ、ルーマニア、ベネズエラ等である。

表 168 砂糖きび：砂糖の需給状況

単位 1,000トン

年度 (サハラ年度)	前年度よりの 繰越在庫量	砂糖生産量	輸出重量	国内消費量	損失	次期への 繰越量
1974/75	1002	1,4321	4924	9847	58	49.4
75/76	490	1,2610	1708	1,0500	23	86.1
76/77	861	1,5499	4998	9042	91	132.9
77/78	132.9	1,5797	603.5	851.2	7.0	200.9
78/79	200.9	1,3070	430.8	971.3	73	98.5
79/80	98.5	1,3100	275.0	970.0	-	163.5

出所：INFORMACION ECONOMICA DE LA ARGENDNR

1979年頃よりキューバに発生したサビ病により、世界の供給量が需要を下回る予想がみられたため、長年振りに砂糖の国際相場は高騰したが、それまでの数年間、供給過剰のため国際価格は下落の一途をたどってきた。このため世界の輸出国による国際砂糖協定が締結され、供給量をコントロールすることによって価格の維持を図り、アルゼンチンもその枠内で輸出量の割当てを受けてきた。この間、アルゼンチンの砂糖輸出は低調な国際価格が生産コストを割る状

態で行なわれ、輸出による損失を国内価格でカバーするという不合理な状態が続いてきた。これは国内生産を急激に暴した場合に生ずる社会問題を避けるため、各製糖工場に一定量を義務的に輸出させる非常手段として採用された方法であったが、アルゼンチンの砂糖きび栽培には古くより経済的、社会的問題が根深く残っており、今日にいたるまで解決を見ていない。

ハ) アルゼンチンにおける砂糖きび栽培の持つ問題点

(歴史的背景)：砂糖きびが南アメリカ大陸に導入されたのは大陸発見直後の16世紀初頭である。アルゼンチンではジュスウィット宣教師達によってツクマン州の湿気の多い山麓地方に植付けられたのが最初となっている。砂糖きび栽培が植民地時代の代表的な産業であったブラジルの場合と異なり、アルゼンチンでは長期にわたって経済的な重要性を持たなかったが、今から1世紀半頃にEUSEBIO COCOMBRES(当時の司祭で後に司教となった)が堅木を利用したTRAPICHI(砂糖きびしぼり機)を作り最初の工業化を図って以来、次第に重要性を帯びるようになった。その後1876年に鉄道がコルドバよりツクマンに延長されたのが砂糖きび産業の画期的なインパクトとなり、ツクマン州において急速に発展した砂糖産業は同州のモノカルチャー的性格を帯びるようになり、それまで行なわれてきた自由な砂糖の輸入を制限しない場合深刻な社会問題を誘発するところまで進んでいった。

1833年以降砂糖産業保護のため輸入関税の引き上げなど一連の措置がとられていくが、単に経済上の措置に止まったこれらの過保護政策は非経済単位の小面積栽培者を増加させる結果を生じ、その栽培地域が不適地帯へと広がっていったため、生産面においても工業面においても低い生産性に止まり、特別基金(FUNDO REGULADORA)による救援すら必要とする事態、すなわち効率のよい生産者が生産性の低い生産者をカバーする不合理な形態が続くという極めて非生産的過程を踏んだのである。このような事態はその後長期にわたって地域社会の経済社会問題を不安定とする根本的な問題として州政府に限らず国家全体の問題にまで発展し、各時代の政府を悩ましながら今日にいたっている。若し最初から砂糖の含有量を基準とした生産と販売機構など技術的措置が構じられていたならば、又生産性の高い地域に対抗出来ない低生産性地帯の栽培が制限されていたならば「砂糖問題」の跡はあとに残らなかったであろうと現在では評論されている。

この事態に対する最初の対策は1928年当時のALVAL政府による改革の意図がみられたが実施されるまでにいたらず、ようやく1954年になって初めて特別基金の仕組みを廃止して「砂糖経済再編成プログラム」を通じた本問題の調整を図る法律が発令されたが、発令直後に政府が交代したため同プログラムも実施されることなく従来と同様の事態が継続した。

砂糖きび取引きの基準として糖分の含有量を規制したのはごく最近の1959年からである。この際、保償制度(REGIMEN DE COMPENSACION)の漸次廃止も同時にとりあげられ、数年後には直ちに単収の増加という形で成果を現わし始めるが前世紀より続く砂糖問題は単純なものではなく、これに派生する種々の問題を発生させ、とくに生産者の利益の圧迫が問題化され1964年には再び過去の不合理な補助制度へと戻っている。1966年には価格維持のために行った収獲量の制限もツクマン州の砂糖危機に対する緩和剤とはなり得ていない。同年には根本的な措置として国家砂糖法(LEY NACIONAL DE AZUCAR)と呼ばれる法律第17163号が発令されたが、同法律の急激かつきびしい規制はただちに非経済的のみみられていた小工場の閉鎖をひきおこし、ここに新しい社会問題を併発させるにいたり、これに対して新しい労働の場を造成しようとしたツクマン州政府の州内経済再編成計画(OPERATIVO TUCUMAN)をもってしても多くの問題を解決し得ないまま今日に及んでいる。

(現行の砂糖産業制度)：その後1972年には法律第17163号によって旧来の国家砂糖きび法が一部改正され現行の規制となっている。この新しい制度は輸出向けとならない余剰品が国内市場価格を混乱させてきた従来事例を避けるため、需要を満たす水準に生産を制限することを目的としたものである。その要点は次の通りである。

- イ) 国家砂糖局 (DIRECCION NACIONAL DE AZUCAR) は毎年各生産者及び製糖工場にそれぞれの量を割当てたクーポンを発給する。
- ロ) 各製糖工場は割当てられた量以上の製糖を行なうことは出来ない。
- ハ) 砂糖きひの最低価格は収穫前に生産コストを基礎として算出される。
- ニ) 砂糖きひ生産者に対する支払いは糖分含有量に応じた価格表に従って行なわれる。
- ホ) 各製糖工場には義務的輸出量が設定される。この輸出量は前期生産量を基準として設定される。
- ヘ) 国家砂糖局は国内市場への供給量を調整するため、各製糖工場に対し、毎月の出荷量を指定する。

2.3.2 綿

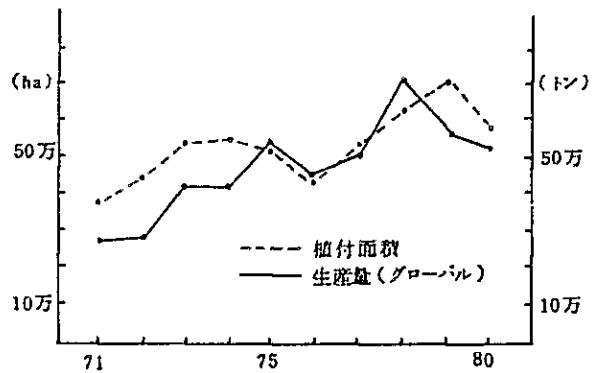
イ) 国内生産

表 169 綿：過去10年間の生産実績

年 度	面 積 1,000ha		単 収 kg/ha	生 産 量 1,000トン		
	植付面積	収穫面積		グローバル	種 子	繊 維
70/71	3382	3668	777	2850	1668	841
72	4354	3984	733	2922	1727	873
73	5355	4571	929	4240	2440	1248
74	5575	4740	883	4184	2375	1273
75	5132	5051	1,073	5410	3138	1717
76	4334	4136	1,077	4450	2585	1395
77	5430	5180	992	5140	3000	1600
78	6210	6070	1,176	7140	1142	2203
79	7020	6690	856	5725	3296	1737
80	5910	5675	908	5310	××××	1600

出所：S. E. A. G.

綿はスペインの植民地開設直後導入されたものでアルゼンチンでの栽培歴史は古い
が、商業ベースでの栽培が行なわれるようになったのは今世紀に入って間もない
1917年よりである。この頃より綿は国の重要作物に数えられるようになり、広大な北部地方の発展を支える基本的な作物として今日に及んでいる。栽培地帯はアルゼンチンの農業地帯としては新しいグランデ・チャコ地帯である。綿には1年生の草綿 (HERBACEO) とブラジルの東北地方で



多く栽培されている多年性の木綿 (ARBOCED) があるが、アルゼンチンの気象条件下では前者のみの栽培を可能としている。平均気温 17℃ 以上、成育期間の約 200 日中に降霜がなく降雨があること、収穫時に乾燥することなどを栽培条件とする。さらに有機質と燐の多い土壌が適地とされる。このような条件は北部地方に集中し、例外的に西部ではアンデス山麓、南部は寒冷地帯への限界、東部はウルグアイ川までの間に栽培を可能とする地帯が点在する。これを大別すると最適地帯としては中央部、適地ではあるが灌漑を要する地帯として西部、同じく適地ではあるが降雨多量の地帯として東部がある。

国内の主要栽培地帯は州別にみるとチャコ州及びフォルモサ州内の湿潤地帯、サンタ・フェ州北部、コリエンテス州西部、及び灌漑で補完されるチャコ、フォルモサ及びサノ・チャゴ・テル・コステロ州の西部地方が上げられる。

ちなみに植民地時代の主要栽培地帯はツクマン州であったが、このツクマンという言葉は土語の UTUCUMAN から来ており、これは“綿の国”という意味で大陸発見以前、古くより栽培されていた作物であることを物語っている。

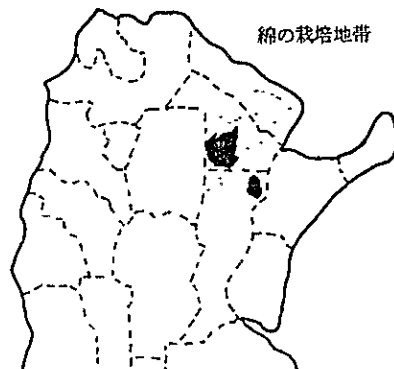
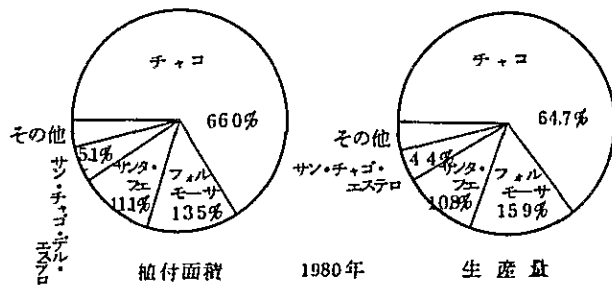


表 170 綿：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
チャコ	2810	2386	3136	3530	4445	3900	2730	2682	3180	4370	3740	3434
フォルモサ	770	608	860	1160	1060	800	950	530	805	1065	735	844
サンタ・フェ	711	591	630	710	704	657	880	681	613	920	700	572
サンチャゴ・デル・エステロ	485	425	450	425	463	305	580	332	252	452	308	236
コリエンテス	216	186	198	233	193	150	157	128	138	190	140	115
コルドバ	55	60	76	59	43	34	40	39	72	45	35	-
ミシオーネス	27	40	35	44	59	29	23	25	39	40	21	-
エントレ・リオス	29	23	27	10	21	20	19	18	19	06	16	-
サルタ	08	08	09	07	09	10	13	14	12	11	12	-
ラ・リオハ	01	07	01	03	03	01	01	01	02	03	02	-
ツクマン	17	-	-	01	01	01	14	-	-	01	01	-
その他の州	03	-	08	28	19	09	03	-	08	42	37	-
全 国 計	5132	4334	5430	6210	7020	5910	5410	4450	5140	7140	5725	5310

出所：S. E. A. G.

国内に繰綿工場が設置されされたのは1862年であるが、本格的な繰綿が開始されたのは1923年からで、この頃より綿産業は飛躍的な発展をとげ、1958/59農年には植付面積は70万ヘクタールに達している。その後70/71年に最低の面積39万ヘクタールに落ちたあと73年より再び増加し、79年には70万ヘクタールに戻った。収穫される棉花の中繊維の割合は3分の1で残りが種子の重量となる。当然繰綿工程の中で約12%の重量が減少する。



ロ) 市場

綿繊維の国内消費量は年間11万トン前後で経済省の資料によると78年度で102218トン、79年が110,400トンとなっている。国内消費量は過去10年間殆んど変化はなく、従って輸出量は原料生産の多寡によって変動する。海外の市場としては日本がもっとも大きく、78年度で総輸出量の37.5%、79年度には30.2%を占めた。日本について台湾、中国、ベルギー等が重要な市場である。

表 171 綿：繊維の輸出実績 1,000トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
日本	15,551	18,951	24,127	55,204	18,607
台湾	14,913	863	4,869	21,777	9,571
中国	1,150	778	1,722	26,681	5,065
ベルギー	2,826	2,674	2,833	7,201	3,854
タイ	3,975	771	659	1,823	2,374
西独	1,295	979	1,530	6,965	1,839
スペイン	-	-	1,168	1,521	1,932
オランダ	180	728	499	1,761	1,286
シンガポール	2,450	1,527	376	1,314	978
英国	1,597	2,349	3,024	4,403	799
ウルグアイ	-	50	880	752	675
イタリー	488	1,258	2,406	4,657	815
その他の国	21,381	19,484	20,144	12,998	13,679
計	65,806	50,412	64,207	147,057	61,474

出所：I. N. D. E. C.

綿実油

綿の生産の中で繊維と並んで重要な綿実油については、前述の通り収穫された棉花の3分の2が種子であり、その搾油歩止りは約15%である。綿実油は大豆、ヒマワリ及び落花生と並ぶ重要な商品であり、79年度では食油総生産量の6.4%を占めている。綿実油及びその副産物である粕及びベレットは国内の需要を満たしたあと海外へ輸出されている。綿実油ではエジプト及びベネズエラ、粕ではデンマーク及び西独、ベレットも同じくデンマーク、西独のほかオランダ等が市場となっている。

表172 綿：綿実油輸出実績 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
エジプト	-	990	1,540	-	15,511
ベネズエラ	-	-	-	4,244	9,157
東 独	-	-	-	1,535	1,031
西 独	-	-	-	2,595	303
英 国	-	-	1,048	803	913
オランダ	-	3,952	1,531	6,648	-
その他の国	-	-	1,514	619	973
計	-	4,942	5,633	16,444	27,893

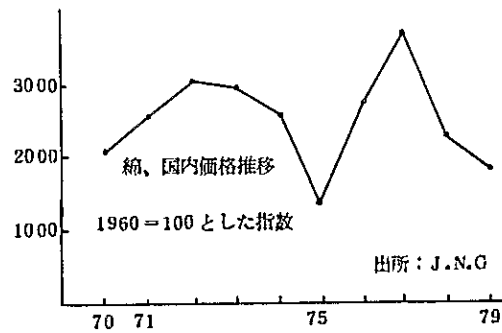
表173 綿： 粕 輸出実績 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
デンマーク	5,773	9,041	8,051	20,699	11,676
西 独	9,545	2,472	6,220	7,053	470
オランダ	3,617	1,251	2,149	1,348	-
ノルウェー	-	-	977	-	-
その他の国	-	-	-	5,243	-
計	18,935	12,764	17,397	34,343	12,146

表174 綿：ペレット輸出実績 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
デンマーク	8,550	65,716	58,275	97,840	105,395
オランダ	17,467	25,440	11,680	21,561	24,652
西 独	12,671	17,996	12,844	24,066	15,294
ブルートリコ	1,573	-	-	-	-
その他の国	-	1,000	5,554	-	-
計	40,261	110,152	88,353	143,466	145,341

以上の出所：I, N, D, E, C.

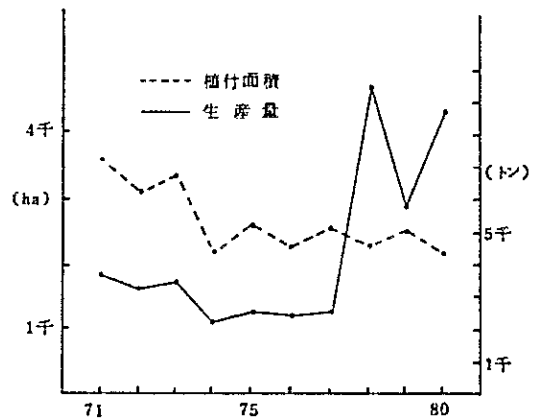


2.3.3 繊維用亜麻

表175 繊維用亜麻：過去10年間の生産推移

年度	植付面積	単収	生産量
	1,000 ha	kg/ha	1,000 kg
70/71	36	4,148	37
72	31	4,000	31
73	34	4,000	34
74	22	4,000	22
75	26	4,462	26
76	23	4,670	23
77	25	4,180	25
78	23	4,178	94
79	25	4,000	58
80	22	4,000	88

出所：S. E. A. G.



軟繊維と硬繊維に区分される長繊維の中、亜麻は軟繊維に属し高級布地の原料となる。この他軟繊維に属するものとしてはジュート、大麻、FORMIO（ニュージーランド麻）、ラミー等があり、これらは工業用又は家庭用品（容器、ロープ等）の原料となり、また硬繊維に属するマニラ麻やサイザル麻は工業用や船舶用ロープ、穀物用袋等に用いられる。これらの繊維類のほとんどはアルゼンチンに定着しておらず、亜麻及びFORMIOがわずかに生産されているに過ぎない。ジュートなどは穀物用袋やズックとして国内の消費が非常に多いにもかかわらず栽培が進んでいないのは、これら繊維作物の栽培上の自然条件によるものではなく、これらの作物が単価が安い割に栽培から加工にいたる間多くの人手を必要とする経済上の問題に由来しているためである。したがって隣国のブラジルやアジア方面の安い労力によって生産された製品を輸入として国内需要の大半が満たされている状況にある。

繊維用亜麻は植物学的には油脂用亜麻と同一である。しかし繊維の収量を高めるためには分枝が少なく長繊維が得られる

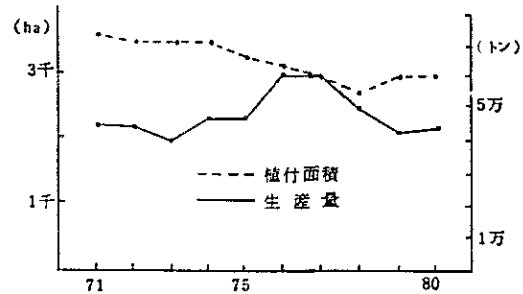
品種を選ばねばならない。又油脂用亜麻よりも温度が高く湿気が多い場所を適地とし幹がより長く成長して分枝させないため密植が行なわれる。土壌は腐植を含み根の侵入度が深い土地を好む。収穫は茎全体を引き抜き根の繊維も利用される。収穫された亜麻は乳酸発酵処理を受ける。

アルゼンチンにおける繊維用亜麻の生産は繊維の輸入が困難となった1939年から開始された。その後ブエノス・アイレス州を中心として栽培が広がり一時は5千ヘクタールまで伸びたこともあり、クエヨ地方、リオ・ネグロ州、ツクマン州等でも灌漑による試験栽培が行なわれている。アルゼンチンには気候上、土壌的にも適した地域が多く国内需要量以上の生産を可能とするが、その規模は5千ヘクタールを頂点として70年代も漸次減少を続けながら80年には2,200ヘクタールの栽培に終っている。70年代の栽培地帯はブエノス・アイレス州のみに止まり同州のJ'AUREGUI地区にある繊維工場の周辺に限定される。

2.3.4 フォルミオ（ニュージランド麻）

表176 フォルミオ：過去10年間の生産推移

年度	植付面積 1000ha	単 収 トン/ha	生産量 1000ト/
1970/71	36	500	445
72	35	500	438
73	35	500	400
74	35	600	480
75	33	600	480
76	32	600	600
77	30	600	600
78	25	556	500
79	30	600	420
80	30	620	434



出所：S. E. A. G.

ニュージランドを原産地とする植物でその繊維（長く硬い）はサイザル麻に似ている。栽培条件としては温暖又は高温の気候と水分の多い場所が好まれる。ジュートの場合と同様に洪水を受ける場所によく育つこの作物の利点は水浸による茎の腐蝕作業を行なう必要がなく機械によって繊維取出が可能なる点にある。

アルゼンチンにおける商業的栽培は1910年パラナ川のデルタ地帯で開始された。この地方は自然条件が適しているはかりでなく河川輸送の便がある他、社会面ではアルゼンチンではもっとも思われていない地域に属しているため地域の経済活動としても重要な意義を持っている。

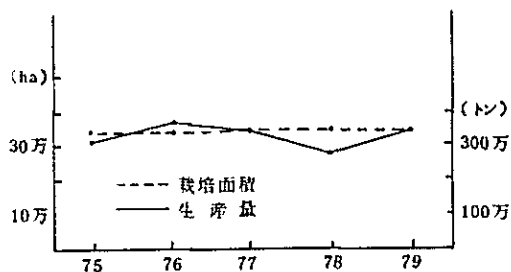
70年代の生産は78年までゆるやかな減少をみたのち、79、80年とやや復活して約3,000ヘクタールの植付けが行なわれており、76、77年の増産を除いて4～5万トンの生産が続いている。

2.3.5 ブドウ

1) 生産

表177 ブドウ：過去5ヶ年間の生産推移

年度	栽培面積 1,000ha	収穫面積 1000ha	単収 トン/ha	生産量 1,000トン
74/75	3423	331.2	9,360	3,1000
76	3425	3391	11,088	3,7600
77	3430	3407	9,979	3,4000
78	3430	3410	8,211	2,8000
79	3420	3410	10,264	3,5000



出所：I. N. D. E. C.

アルゼンチンにおけるブドウ栽培とこれを原料とするブドウ酒産業は前世紀の中頃にヨーロッパ移民とともにもたらされた産業の1つである。経済省の資料によると1874年にはすでに3,600ヘクタールの栽培が行なわれていた記録があり、それよりわずかに4年後の1888年には25,000ヘクタール、今世紀の始めには4万ヘクタールと飛躍的に拡大され、1936年に農業センサスが行なわれた頃には15万ヘクタールの大面積に達していた。当時を最盛期として後退した多くの主要作物とは逆にその後も面積は拡大し、現時点では34万ヘクタールの栽培が続いている。

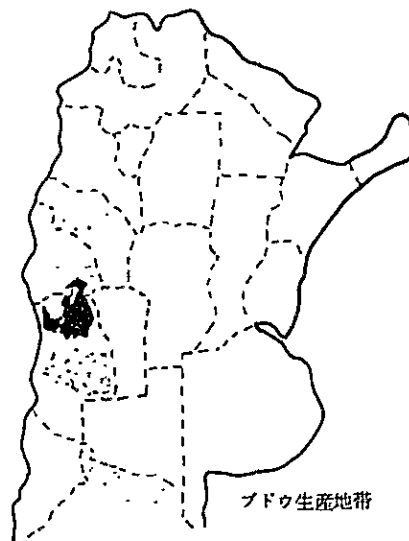
国内の生産地帯は、穀物類とは異って国内でもっとも乾燥する地帯の1つであるクマ地方と呼ばれるアンデス山麓地帯に集中しているが、高度の技術を要し灌漑を用いる典型的な集約栽培と生産物の高い商品価値は多くの農業者をこの地方に定着させ、その中心となるメンドーサ州及びサン・ファン州を發展させた作物として社会経済面での重要性の高い作物といえる。

カスビ海沿岸が原産地といわれるこの作物の栽培上の自然条件としては、夏期よりも冬期に多くの降雨があり、秋に乾燥する気象を要し、夏期の降雨不足は灌漑によって補完されねばならない。土壌については半乾燥地帯の典型といえる砂利の多い透水性の土地が適し、十分な施肥を必要とする。

アルゼンチンにおいてはこのような条件を備えた地帯として次のものがあげられる。

- ① メンドーサ州及びサン・ファン州の東部地方
- ② ラ・リオハ州東部、カタマルカ州南東部及びコルドバ州北西端
- ③ ブエノス・アイレス州南端のリオ・ネグロ州及びチブ川河口地帯

以上のほか国内の半乾燥地帯の全般及び湿润地帯の一部（エントレ・リオス州東部、ボナエレンセ沿岸地帯全般）は適性はうすが栽培可能地帯といえる。現在のところメンドーサ州が栽培面積の72%を占めており、これに隣接する



サン・ファン州を加えると国内ブドウ栽培の90%以上がこの地方に集中している形である。

表 178 ブドウ：州別生産実績

州 別	栽 培 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
メンドーサ	2474	2956	2460	2470	2470		2,0000	25530	22800	17640	23150	
サン・ファン	582	599	614	614	615		8100	9023	8000	7800	9040	
リオ・ネグロ	173	174	165	160	147		950	950	1160	820	1040	
ラ・リオハ	67	68	68	68	68	*	580	600	590	500	510	*
カタマルカ	39	39	40	40	40		390	414	550	500	480	
ブエノス・アイレス	23	23	20	19	20		430	324	290	270	260	
サルタ	21	21	19	18	19		212	337	284	230	240	
コルドバ	20	20	20	22	23		150	223	88	70	97	
その他の州	24	25	24	19	18		188	199	238	170	183	
全国計	3423	3425	3430	3430	3420		31000	37600	34000	28000	35000	

出所：I. N. D. E. C. 注：80年度資料は未入手

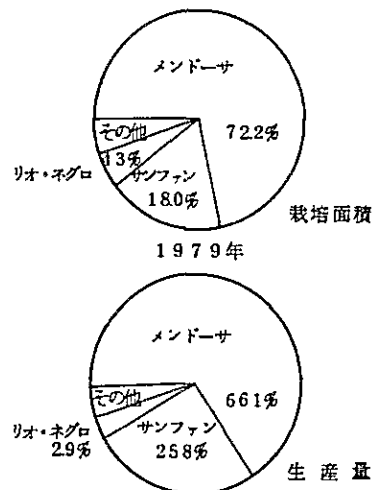
ロ) ブドウ酒の生産

生産されたブドウは1部が生食用に供給された後、ブドウ酒を始めとしジャンパン、リキエール、チェリー酒、干しブドウ等に加工される。77年の資料によると収穫された340万トンの中、288万トンが加工され、23百万リットルのブドウ酒が生産されたとあり、原料に対するブドウ酒の割合は82%であった。これは125kgブドウから100リットルのブドウ酒が得られた計算となる。

アルゼンチンのブドウ酒製造は、その自然条件から真正のブドウ酒、すなわち砂糖を附加する必要がなく、またヨーロッパから導入された各種の高級品種があるため高級ブドウ酒の生産を行ない得る利点をも有している。

一方、ブドウ酒の貯蔵能力は生産過剰の場合、供給量の調整手段として極めて重要なものであるが、74年当時国内の貯蔵能力が52百万リットルであったのに対し、78年には60百万リットルに増加しており注目される。ボデガ(BODEGA)と呼ばれる酒の貯蔵庫は全国に2,000、その中1,300がメンドーサ州、350がサン・ファン州、150がリオ・ネグロ州に分布する。

このアルゼンチンにおけるブドウ酒の生産量は世界の生産から見るとフランス、イタリー、スペイン及びソ連と共に世界の5大生産国に含まれる。79年度のブドウ酒生産量は27百万エクトリットルであったが、このうち国内消費に



向けられたのは23百万エクトリットルで1人当り年間消費量は89リットルとなる。この消費量も又フランス及びイタリーと並ぶ世界最高の水準にある。

国内消費が大きいだけに海外への輸出はつい最近の70年当初に開始されたばかりであるが、輸出も年々増大しており、77年には1千万ドルを越え、78年には2千万ドルを突破した。79年には再び1,4千万ドル台に戻ったものの今後の見通しとしては、イ)国内消費を上廻る生産力、ロ)既輸出国でのアルゼンチン産ブドウ酒に対する高い評価、ハ)普通品より高級品にいたる種類が豊富であること、ニ)低コスト生産により国際市場での競争力を有している、ホ)米国、カナダ、日本、メキシコ等購買力を持つ市場があり、隣国ブラジルも大きな市場と考えられる、こと等により今後の輸出は増大する見込みがたてられている。

表179 ブドウ製品の輸出実績

年 表	エクトリットル	US\$1,000
1974	92,135	4,758
1975	135,896	4,379
1976	446,170	8,696
1977	599,266	14,901
1978	704,296	21,486
1979	-	14,221

出所：I. N. D. E. C.

表180 ブドウ製品の品目別輸出内訳（1979年度）

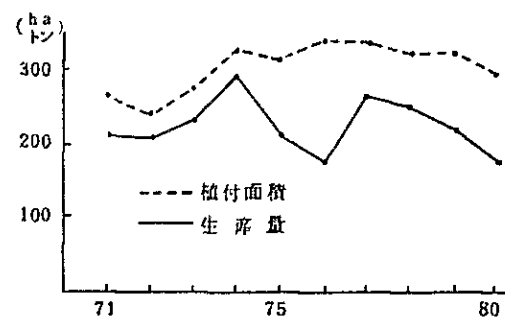
製 品 名	ト ン	US\$1,000
ブドウ酒(樽詰)	3,984	1,442
ブドウ酒(瓶詰)	7,589	7,487
ブドウ酒(その他)	19	17
小 計	11,592	8,906
ブドウ酒原料の汁	4,794	4,665
ベルモット	853	499
食 酢	45	21
シャンパン	52	90
小 計	5,744	5,275
合 計	17,336	14,221

2.3.6 ホップ (LUPULO) 生 産

表181 ホップ・過去10年間の生産実績

年 度	植付面積 ha	単収 kg/ha	生産量 トン
1970/71	265	774	205
72	248	823	204
73	273	883	241
74	330	894	295
75	314	720	203
76	345	499	172
77	340	761	260
78	320	781	250
79	320	780	227
80	295	709	170

出所：S. E. A. G.



ホップの栽培は90年前チンプ川盆地に入植したヨーロッパ移民によって開始された。当初の栽培目的はビール原料としてではなくパンの材料として家族労働の範囲で小規模に栽培されていたと記録されている。ビール原料としての商業的栽培はブエノス・アイレス州において1935年頃より開始されるが気象条件が適するリオネグロ方面へと移動し本格化している。ホップの栽培はブドウよりも高い気温を必要とせず温暖な気候の下に行なわれ、霜には弱いため冬に入る前に収穫される。多くの水分を必要とし、風に対してはこれに耐えうる設備を要する。またつるを張らせるための柵の設備も必要である。一般に木材や針金を用いているが、これらの設備のため固定投資を必要とすることや、長期にわたる収穫がすべて人手によらねばならぬこと、収穫後の処理にも特別な装置を必要とする、ことなど技術的、経済的に困難な問題が多くこれが生産の拡大を阻む原因とされている。

国内の生産地帯は上記の自然条件を満たすネウケン州に集中し全国生産の96%を占める。最初の栽培が始められたブエノス・アイレス州では71年まで生産が記録されているだけで、その後栽培は行なわれていないと思われる。

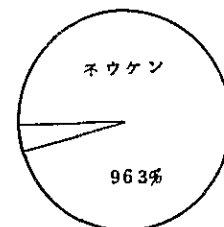
生産品の市場となる国内ビール工業界は74年のビール生産量450万リットルが、79年には250万リットル(1人年間10リットル)に落ちているもののホップの国内供給は需要の半分を満しているに過ぎない。

表 182 ホップ：州別生産実績

州別	植付面積 ヘクタール						生産量 トン					
	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1975	1976	1977	1978	1979	1980
ネウケン	278	315	310	296	296	277	183	152	240	229	215	164
その他の州	36	30	30	24	24	18	20	20	20	21	12	6
全国計	314	345	340	320	320	295	203	172	260	250	227	170

表 183 ホップ：単収

州別	1975	1976	1977	1978	1979	1980
ネウケン	700	485	860	870	830	700
その他の州	833	667	667	732	571	750
全国平均	720	499	761	781	780	709



1980年の生産量

2.4 嗜好作物

2.4.1 マテ茶

1) 栽培の経緯

マテ茶は大陸発見以前より土着のインディオ達の間でCAA-MATÉと呼ばれ飲用されていたと伝えられており、アルゼンチンの歴史以前より存在した作物である。細い竹を筒にして飲む方法や噛んで食用とした土人の習慣はそのままスペイン人の植民者の間に普及したか、同じくアメリカ大陸を原産とする煙草のようにヨーロッパには伝播せず、南米大陸の中でもマテ樹が自生するアルゼンチン、パラグアイ及びブラジルとその近隣諸国に止っている。中でもアルゼンチンとパラグアイでの消費が大きく、近隣のチリーやウルグアイでは自生樹がないためこれらの3国より輸出を行っている。最近ではアラブ諸国が相当量を輸入しており新しい市場として注目されている。

マテ茶は本来自生樹より採集されたがパラグアイ戦争当時乱伐され自生樹がほとんど消滅し、以後長年にわたってブ

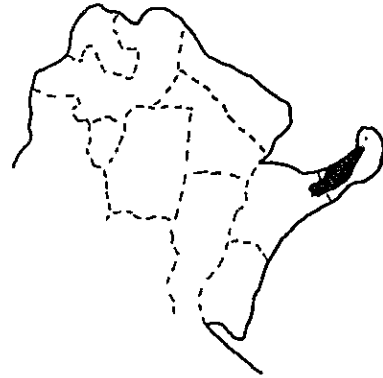
ラジル及びパラグアイより輸入せざるを得ない状態にあった。このため当時の政府はマテ樹栽培の必要性を感じ、ミシオーネス州では国有地の分譲に際して各割当地の一部にマテ樹を植えることを義務づけるなど種々の奨励策をとったため、今日ではブラジル、パラグアイを含む生産国の中で唯一の栽培国となっている。

ロ) 生 産

マテ茶の生産は統計局の年鑑に含まれてないので公式統計は不明であるが、アルゼンチンの経済地理を書いた

『GEOGRAFIA DE LA ARGENTINA』によると現在の栽培面積はコリエンテス州を中心に約140,000ヘクタール、生産量は15,000トンと推定されている。生産者の平均栽培面積は10ha前後で、その大半は家族労働によっており企業的な栽培形態はみられない。栽培面積のうち40%は1920～35年頃植付けられた老木のためその生産力はかなり衰えているものと思われる。

生産と需要との関連については過去に需給の不均衡から数度の危機を招いたため政府は「マテ茶の生産及び販売調整委員会」を設置し、収穫量をコントロールして国内消費に見合った量の収穫を行なわせたこともあった。このシステムは1964年まで継続され、その間に供給過剰を避けるため新規植付けを制限し植付に対して税金を課していた。



需給関係が極度の不均衡をもたらしたのは1965年で6年にはついに収穫を禁止する措置を止むなくしており、また67年には農牧省に収穫をコントロールする権限が与えられている。この様なマテ茶生産における危機は生産が人口増加率を上廻ったのに対し国内消費が伸びなかったこと、栽培技術の進歩がみられず1本あたりの収量が低いコスト高を招いていたことなどがあげられている。国内消費量は1951年当時の1人あたり年間76kgに対し、最近では50kgに落ちており、ウルグアイの1人年間10kgの半分となっている。

以上の需給関係にみられる不均衡とそれによってもたらされるマテ茶生産の不況の対策としては生産の合理化、つまり栽培規模をまとめて生産コストを落すこと、及び現存の老木を伐採しその土地を更に収益性の高い作物を栽培させようとするのが当局の指導方針となっている。外国市場も極めて狭少でウルグアイ及びチリーが伝統的な顧客として輸入が続いているに過ぎない。しかし最近ではシリア、レバノン、サウジ・アラビア及びフロイトの輸入があり新しい市場として期待されている。

表184 マテ茶の輸出実績

年 度	重 量 トン	金 額 1,000ドル
1975	2,564	1,429
76	4,735	2,529
77	3,996	2,750
78	4,091	3,217
79	2,539	3,146

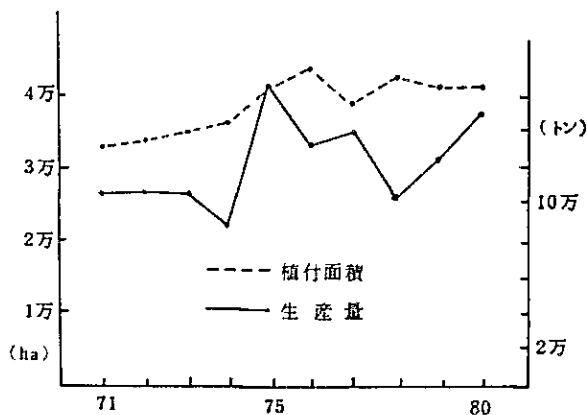
出所：

2.4.2 茶

イ) 生産

表185 茶:過去10年間の生産実績

年 度	植付面積 (1,000ha)	単 収 (kg/ha)	生産量 (1,000トン)
1970~71	336	4,495	1290
72	343	4,441	1310
73	350	4,419	1286
74	364	2,881	871
75	410	4,371	1650
76	440	3,694	1330
77	390	3,590	1400
78	430	2,395	1030
79	407	3,079	1250
80	410	3,759	1530



出所: S, E, A, G

導入の歴史が比較的新しい作物であるが、たちまち国内需要を満たし輸出余力を生じるまで急激に伸びた品目である。アルゼンチンに最初の種子が導入されたのは1924年でミノールネス州のLORETO農事試験で試作されたあとチャコ州、フォルモサ州及びコリエンテス州北部でも栽培されたが、結局ミノールネス州とコリエンテス州北部が最適と結論づけられた。この際にして開始された茶栽培はコーヒーの場合と異って霜に対して抵抗力が強いことや当時マテ茶栽培が危機に直面していた時代でもあったため、とくにミノールネス州を中心としたマテ茶栽培者の中で茶に対する関心が湧き、1940年に30ヘクタールの植付けが行われたのを皮切りに1952年には2700ヘクタールへと拡大し、この頃より本格的な茶栽培の時期が始った。従来の輸入品が国産品によって代替され始めたのもこの当時(1959年)からである。

国内の生産地は自然条件等の制約からミノールネス州とコリエンテス州に限定され、中でもミノールネス州が植付面積及び生産量において90%以上の圧倒的なシェアを占める。全国の植付面積は約4万ヘクタール、生産量15万トンが現在の生産規模である。70年代においては74年に10万トンを誇る減産ののち75年には165万トンの史上最高記録を残すなど生産は上下の変動を繰り返しているが、これは主に霜害などの天災や市場の需要に影響されたものである。

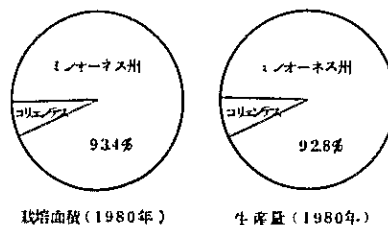
表186 茶:州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
ミノールネス	38.1	41.7	36.3	40.0	38.0	38.3	1540	1210	1290	940	1144	1420
コリエンテス	2.9	2.7	2.7	3.0	2.7	2.7	11.0	12.0	11.0	9.0	10.6	11.0
全国計	41.0	44.4	39.0	43.0	40.7	41.0	1650	1330	1400	1030	1250	1530

表 187 茶：単収の推移 kg/ha

州 別	1975	76	77	78	79	80
ミシオーネス	4,400	3,634	3,554	2,350	3,019	3,737
コリエンテス	4,074	4,444	4,074	3,000	3,926	4,074
全国平均	4,371	3,694	3,590	2,395	3,079	3,759

出所：S. E. A. G.



国内には大小260以上の精製工場があり、この中の20工場が全生産量の4分の3を加工しているといわれる。アルゼンチンの1人当り年間消費は茶の飲用を習慣とする国、たとえば英国の4kg、オーストラリアやニュージーランドの25kg、チリーの1kgなどと比較すると少なく200gに過ぎない。したがって生産された茶の約75%は海外へ輸出されている。主な輸出先国はチリー、米、英、オランダ等である。

表 188 茶：輸出実績 単位 トン

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
チ リ	6,484	9,115	7,354	8,938	9,695
米 国	2	2,534	4,881	8,149	7,493
英 国	-	11,323	7,379	7,388	5,349
オ ラ ン ダ	266	1,304	2,203	3,831	2,748
カ ナ ダ	212	100	343	802	748
西 独	234	285	253	234	351
パキスタン	15	16	-	132	466
南アフリカ	35	-	38	11	510
ウルグアイ	39	113	108	196	172
オーストラリア	-	-	-	42	242
その他の国	10,146	349	2,269	1,223	1,853
計	17,433	25,139	24,828	30,949	29,627

輸出金額1000ドル	15,065	15,953	34,783	23,783	22,178
------------	--------	--------	--------	--------	--------

出所：I. N. D. E. C.

2.4.3 コーヒー

コーヒーはアルゼンチンが輸入を続けている数少ない農産物の一つで多額の外貨を支出する項目である。国内消費量は約4万トンと推定されており、これに見合った輸入が75年まで継続され年間6千万ドル以上の外貨を支出してきたが、76年以降コーヒーの国際価格の高騰から外貨節約のためコーヒーの輸入が制限され2万トン程度に縮小された。それでも輸入額は77年に1億ドルを越えており、78年、79年も7千万ドル以上が続いている。

このため農牧省では国内生産を図るべく各種の栽培試験を行ってきたが、コーヒー樹が霜に弱いところから全国的に降雪

をみるアルゼンチンには栽培適地がなく過去のテストはすべて失敗に帰していたところ、最近サルタ州及びミノネス州の一部に霜のない小地域が見出され試験栽培が行なわれており、その結果は現在までのところ好調であるといわれる。最も可能性のある地域はサルタ州の北端でボリビアとの国境に近い VALLE DE ARACAYAL 地区の ORÁN, SAN MARTIN 及び SANTA VICTORIA の各都を含む地域とされている。この地帯は 18 世紀の当初 (1729 年) にジェズエート派の宣教師がコーヒーを植付けたあとがあり、当時から数少ない栽培適

表 189 コーヒーの輸入実績

年 度	重 量 トン	金 額 1,000ドル
1975	40,052	63,076
76	29,643	76,226
77	17,787	104,584
78	22,403	75,338
79	23,216	71,942

出所:

地と見られていた場所である。森林地帯と呼ばれているこの地帯の気象は年間の平均気温が 20℃、降雨量は 1,500mm で降雪がなく、コーヒーの試作が行なわれている地域は南回帰線にある標高 600m 地帯約 35,000 ヘクタールの中にある。

以上の様な状況のもとにサルタ州政府は「コーヒー計画」と呼ぶコーヒー栽培プロジェクトを実施に移しており、上記地域内 500 ヘクタールでの栽培を試みている。この計画は 8 万本のコーヒー苗の導入より開始されているが、この苗は州政府管下の試験場で管理され、同計画に関心を持つ農家に配分する予定となっている。

同試験場の情報によると 1 ヘクタール当りの植付本数は 1,500 本で、1 本あたり 600~900 グラムの収穫を行ない得るといふ。収穫開始後数年間は 1 ヘクタール当り 1,200 kg の生産から始まりコーヒー樹が完全な生産状態に入ったあと、2 トンの収穫をあげようとするのが同計画の目的となっている。

これらの試験結果から将来約 2 万ヘクタールの植付けが行なわれれば 10 年以内には国内需要を賄いうる体制に持ちこむ可能性が出てくる。

2.4.4 煙草

1) 国内生産

表 190 煙草 - 過去 10 年間の生産推移

年 度	植付面積 1,000ha	収 穫 率 %	収穫面積 1,000ha	単 収 kg/ha	生 産 量 1,000トン
70/71	708	918	650	949	617
72	735	930	684	1,076	736
73	780	950	741	958	710
74	890	937	834	1,172	977
75	927	946	877	1,115	978
76	818	964	789	1,199	946
77	810	926	750	1,200	900
78	700	886	620	1,016	630
79	776	966	750	933	700
80	653	883	577	1,075	620
71~80平均	780	932	727	1,075	781

出所: S. E. A. G.

煙草はアルゼンチンで最も古くより栽培されてきた作物で1870年にはすでに現在の10分の1面積に栽培が行われていたことが記録されている。しかし本格的な栽培面積の拡大が行われたのは第2次大戦後であり、その直後に国内市場の需要を満たすようになった。以後煙草は農業生産面、工業面及び商業面において重要な位置を占めて来たばかりでなく、その販売にかかわる税収は国家歳入の重要な項目となっている点はこの国と同様である。

煙草は同じくアメリカ大陸を原産地とするマテ茶とは逆に地域や社会的階層に関係なく普及したため大きな市場を持つが、その栽培方法が極めて集約的であるため、多くの労働力を要し栽培地域には生産者が集中して地価をつりあげ、これが生産コストを上昇させる大きな原因となっている。

煙草は夏作の単年性作物で春に播種し秋に収穫する。また各種の気象に合うため栽培地域は広範囲にわたるが、高い単収を得るためにはカリと窒素分に豊かな湿潤な亜熱帯地方の砂質壤土が最適とされる。アルゼンチンではこの条件を持つ地域として次の地帯があげられる。

イ) 北西地方：ツクモン、サルタ、フアイ各州の高台及びコルドバ山系〜この地方では外来の RUBIO 種の栽培が多い。

ロ) 東北地方：コリエンテス、ミシオーネス州でネグロ種の栽培が多い。

ヘクタール当りの単収は徐々に増加しており77年には全国平均で1,200 kg/haの実績をあげた。北西地方では、とくにツクモン、サルタ、フアイ州において高い生産性を示し、コリエンテス及びミシオーネス州では最近急激な植付面積の減少がみられる他、成熟期及び収穫期における降雨多量による単収の減少が伝えられている。

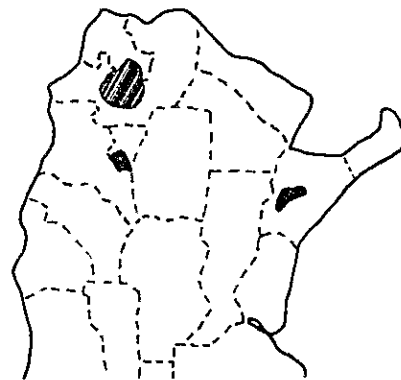
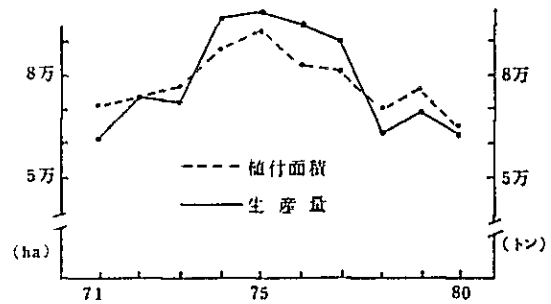


表191 煙草：主要生産州の単収

州別	1976	77	78	79	80
サルタ	1,461	1,345	1,170	1,018	1,170
フアイ	1,344	1,619	1,169	1,135	1,260
コリエンテス	1,044	571	634	874	781
ミシオーネス	1,036	1,066	922	670	622
全国平均	1,119	1,200	1,016	933	1,037

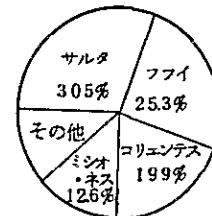
出所：S. E. A. G.

表 192 煙草：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
サルタ	200	214	228	177	176	199	250	239	300	207	170	220
フフイ	174	150	180	150	144	165	214	230	280	173	160	194
コリエンテス	299	239	204	197	209	130	277	241	96	85	180	100
ミシオ・ネス	199	155	125	110	184	82	172	155	130	95	120	51
ツクマン	34	37	40	40	37	42	41	55	56	34	36	50
カタマルカ	05	07	13	12	13	13	06	11	20	20	21	15
チャコ	12	12	13	11	10	10	14	12	14	12	10	08
その他の州	04	04	07	03	03	12	04	03	04	04	03	32
全国計	927	818	810	700	776	653	978	946	900	630	700	620

出所：S. E. A. G.

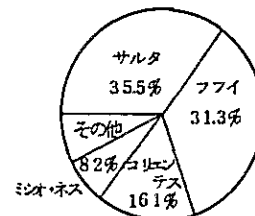
生産される煙草の種類は在来種と外来種に大別される。在来種は大陸発見以前より土着民が栽培していたものであり、外来種とは輸入された改良品種をいうが最近では国内生産の70%は外来種によるものである。77年の生産量内訳は次表の通りである。



植付面積 (1980年)

表 193 煙草：1977年生産の種類別内訳

区 分	生 産 量 (トン)
イ 在 来 種	
CRIOLLO MISIONERO	12,000
CRIOLLO CORRENDUO	10,000
CRIOLLO SALTEND	7,000
PARAGUAYO	50
CUEROA	10
計	29,060
ロ 外 来 種	
VIRGINIA	45,000
BURLEY	16,000
ORIENTAL	300
KENTACKY	200
BAHIA	30
計	61,530



生産量 (1980年)

出所：SERVICIO NACIONAL DE ECONOMIA Y SOCIOLOGIA RURAL

ロ) 国内消費及び輸出

国内で消費される煙草はほとんどが紙巻煙草で葉巻煙草は少ない。一般に74年以降価格の上昇と消費者の購買力の減退により消費量は減少傾向にあるといわれている。すなわち75年には20本入り紙巻煙草の消費は1,900百万箱であったのが、77年には1,800百万箱をやや上回る程度に止った。巻煙草の国内生産はその大半が外資系企業による5社に集中している。近年来機械化への切換えが進み、60年代には10,000人が就働していた煙草部間の労働人口は最近では6,000人に減少したといわれる。

国内で生産されていない一部の品種のものが若干輸入されているが僅少である。70年代におけるアルゼンチンの輸出は75年を頂点として下降をたどっており79年は21,635トンの輸出であった。

表 194 タバコの輸出実績

年 度	重 量 トン	金 額 1,000ドル
1975	32,805	31,253
76	27,359	19,704
77	23,748	22,638
78	23,243	26,414
79	21,635	29,830

出所：I. N. D. E. C.

2.5 野菜類

2.5.1 えんどう豆

イ) 生 産

表 195 えんどう豆(乾燥用):過去10年間の生産推数

年 度	植付面積		単 収	生 産 量
	1,000ha	1,000ha		
1970/71	226	207	810	168
72	193	149	803	120
73	159	130	966	126
74	147	133	1,209	161
75	148	146	1,322	193
76	183	181	2,003	363
77	230	199	1,508	300
78	490	420	1,095	460
79	207	155	774	120
80	212	187	995	186

出所：S. E. A. G.

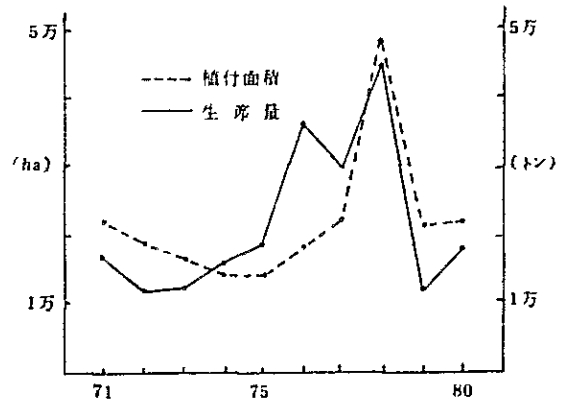
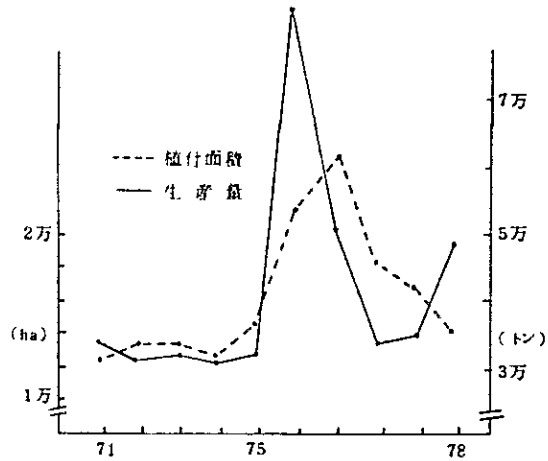


表196

えんどう豆(青えんどう)：過去10年間の推移

年 度	植付面積 1,000 ha	単 収 kg/ha	生 産 量 1,000 トン
1970/71	122	2,957	340
72	134	2,574	312
73	134	2,711	328
74	128	2,601	314
75	146	2,489	342
76	215	4,049	841
77	246	4,414	513
78	183	2,112	340
79	170	2,188	350
80	142	3,564	490



出所：S. E. A. G.

最近の栽培状況については農牧省公式発表によると79/80年の植付けは特に問題なく行なわれ、成育期間中も天候に恵まれ、とくに10月の降雨はコルドバ州における開花と結実に効果をもたらした。一部にあぶら虫の被害がみられたが、これも農薬散布によって防御されておりブエノス・アイレス州やサンタ・フェ州では降雨過多であったが除草も支障なく行なわれ、10月には青えんどうの収穫が一部開始された。11月、12月と収穫が続き1月にはほとんどの収穫が終了したと報じられている。

えんどう豆は青えんどう(莢)と豆(乾燥豆)の収穫を目的とするものに区分されている。過去10年間の生産推移をみると乾燥豆では78年、青えんどうでは76年に大巾な増産がみられた。

国内の栽培地帯はブエノス・アイレス州西北部及びサンタ・フェ州南東部に集中しており、ツクマン州、サンチャゴ・デル・エステーロ州などがこれに続く生産地帯である。

市場は国内のほか乾燥豆は海外にも輸出されており、オランダ、ブラジルを主な市場とする。国内価格は極めて低調で79年8月以降80年7月までの1年間は実質価格において50%の減少をみた。

表197 えんどう豆：輸出実績 単位 トン

仕 向 先 国	1975	1976	1977	1978	1979
オ ラ ン ダ	979	5,272	-	2,6930	2,243
ブ ラ ジ ル	-	10,356	-	10,506	3,895
コ ロ ン ビ ア	-	-	-	2,134	-
南 ア フ リ カ	-	-	-	1,200	-
ウ ル グ ア イ	-	17	70	1,111	60
そ の 他 の 国	69	176	2	2,556	-
計	1,048	15,821	72	44,437	6,198

出所：I. N. D. E. C.

表198 えんどう豆(乾燥豆)：州別生産実績

州別	植付面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
ブエノスアイレス	99	141	133	360	133	125	12.5	30.4	12.7	40.0	10.3	12.0
サンタ・フェ	28	25	81	11.6	5.9	8.2	5.2	4.5	16.0	4.9	0.5	6.1
チユブ	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	0.1	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7	0.1
その他の州	11	0.7	0.6	0.4	0.5	0.4	0.9	0.7	0.7	0.4	0.5	0.4
全国計	14.8	18.3	23.6	49.0	20.7	21.2	19.3	36.3	30.0	46.0	12.0	18.6

出所：S. E. A. G.

表199 えんどう豆(管えんどう)：過去10年間の生産推移

州別	植付面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
ブエノスアイレス	75	129	152	94	97	75	12.2	52.1	19.8	15.0	15.5	26.5
サンタ・フェ	16	38	47	4.3	2.6	2.5	2.4	15.3	14.9	2.5	2.4	8.8
ツクマン	2.4	1.6	1.6	1.5	2.2	1.6	10.3	6.3	7.1	6.8	8.5	5.5
サンチャゴ・デル・エステロ	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.4	0.6	0.5	0.4	0.6	1.0	1.2
メンドーサ	0.6	0.6	0.1	0.4	0.3	0.4	3.8	3.9	0.7	1.1	1.9	1.2
フフイ	0.4	0.4	0.6	0.6	0.3	0.2	1.5	1.3	3.5	2.9	1.1	1.0
コリエンテス	0.8	0.8	1.1	0.9	0.7	0.7	0.8	0.8	1.5	1.4	0.9	1.0
その他の州	1.3	1.0	0.9	0.9	0.9	0.9	2.6	3.9	3.4	3.7	3.7	4.8
全国計	14.6	21.5	24.6	18.3	17.0	14.2	34.2	84.1	51.3	34.0	35.0	49.0

出所：S. E. A. G.

表200 えんどう豆：国内価格推移

月別	実際価格		実質価格	
	\$ 1 kg	前月比	1960=100	前月比
79年 8月	510	+ 119	0064	- 9.86
9	510	-	0061	- 4.69
10	500	- 1.96	0058	- 4.92
11	450	-10.00	0050	-13.79
12	437	- 2.89	0047	- 6.00
80年 1	450	+ 2.97	0046	- 2.13
2	450	-	0044	- 4.35
3	422	- 6.22	0040	- 9.09
4	420	- 0.47	0038	- 5.00
5	406	- 3.33	0035	- 7.90
6	420	+ 3.45	0034	- 2.86
7	420	-	0033	- 2.94

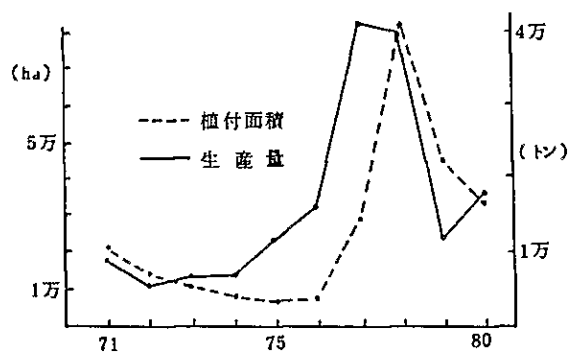
出所：BOLSA DE CEREALES B. A.

2.5.2 レンズ豆

1) 生産

表 201
レンズ豆：過去10年間の生産推移

年 度	植付面積	単 収	生産量
	1,000ha	kg/収獲面積ha	
1970/71	21.0	363	95
72	147	475	56
73	11.1	687	67
74	9.0	829	68
75	8.4	1,588	12.9
76	87	1,801	155
77	29.7	1,443	41.4
78	82.0	736	400
79	46.0	569	12.4
80	31.6	730	168



出所：S. E. A. G.

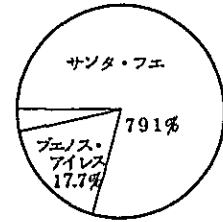
過去10年間の統計によると植付面積、単収ともに極端な変動があり、74～76年の1万ヘクタール以下の面積が78年には8万ヘクタールに拡大し、単収も74年の829kg/haが76年には1.801kg/haに飛躍するなどの変化を示しているが、当時の状況を説明した資料がないのでこの間の事情は不明である。

表 202 レンズ豆：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	1975	76	77	78	79	80	1975	76	77	78	79	80
サンタ・フェ	48	51	257	680	362	250	80	100	37.8	29.4	63	104
ブエノス・アイレス	35	36	40	11.0	64	56	49	55	36	103	58	60
コルドバ	-	-	-	27	1.6	0.4	-	-	-	01	01	0.2
ツタマン	-	-	-	03	1.8	0.2	-	-	-	02	02	0.1
エントレ・リオス	-	-	-	-	-	0.4	-	-	-	-	-	0.1
全国計	83	87	297	820	460	31.6	12.9	155	41.4	400	12.4	168

出所：S. E. A. G.

国内最大の生産地帯はサンタ・フェ州で植付面積及び生産量でそれぞれ79.1%及び61.9%を占めるほかブエノス・アイレス州がこれに続くが、その他の統計に表われるコルドバ、ツクマン及びエントレ・リオス各州の生産は僅少である。80年度でみると生産量の60%は海外に輸出されている。主要市場はオランダで総輸出量に占める割合は78年で62%,79年では77%であった。

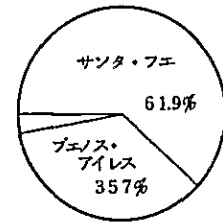


植付面積 (1980年)

表203 レンズ豆：輸出実績

仕向先国	1975	1976	1977	1978	1979
オランダ	7,983	11,800	16,888	18,265	7,884
西独	1,637	3,110	1,717	617	1,143
ブラジル	441	3,408	1,174	991	245
ポリビア	48	3	112	67	57
ウルグアイ	141	370	945	924	421
イタリア	61	657	1,420	435	-
その他の国	90	5,918	7,738	8,237	460
計	10,401	25,266	29,994	29,536	10,210

出所：I. N. D. E. C.

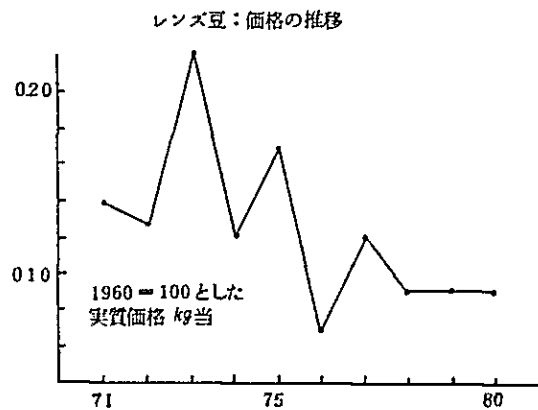


生産量 (1980年)

表204 レンズ豆：国内価格推移

月別	実際価格		実質価格	
	ペソ/kg	前月比	1960年=100	前月比
79年 8月	645	591	0081	-471
9	650	078	0078	-370
10	650	-	0075	-385
11	786	2092	0087	1600
12	913	1616	0098	1264
80年 1月	925	131	0095	-306
2	1,004	854	0098	316
3	1,050	458	0099	102
4	1,065	143	0097	202
5	1,333	2516	0116	1959
6	1,450	878	0118	172
7	1,464	097	0116	169

出所：BOLSA DE CEREALES



2.5.3 ジャガイモ

表205 ジャガイモ：生産推移

年度別	収穫面積 1,000ha					生産量 1,000トン				
	早播	順早播	順遅播	遅播	計	早播	やや早播	やや遅播	遅播	計
75/76	82	227	669	71	1049	595	1820	1,1670	778	1,486.3
77	81	212	71.8	100	1111	87.2	2300	1,3600	1198	1,797.0
78	98	230	740	93	1161	870	2350	1,2000	920	1,614.0
79	7.2	195	742	86	1095	430	2100	1,331.0	71.0	1,655.0
80	95	205	757	86	1143	1030	2070	xxx	1100	xxx

出所：S. E. A. G.

注 80年度順遅播についての資料は未発表

区 分	68/69~78/79平均		
	収穫面積	単収 kg/ha	生産量
イ) TEMPRANA 早播	11,000 ha	7,800	82,400 トン
ロ) SEM-TEMPRANA 順早播	33,800	8,400	264,000
ハ) SEM-TARDIA 順遅播	87,000	16,000	1,358,000
ニ) TARDIA 遅播	13,700	7,000	88,000
計	145,500	12,300	1,792,400

出所：S. E. A. G.

もっとも重要な野菜類の1つで大型栽培が行なわれている。栽培は地域別に異り統計上は①早播、②やや早播、③やや遅播、④遅播の4種に区分されている。早播ジャガイモはツクマン州の生産がもっとも大きく、やや早播ではコルドバ州、やや遅播はブエノス・アイレス州、遅播ではサンタ・フェ州の生産が首位を占める。量的にもっとも大きいのはやや遅播で、79年度を例にとると年間生産量の80%に達している。

アルゼンチンにおけるジャガイモ栽培が本格化したのは第2次大戦中でそれほど依存していた輸入品の供給が途絶えた時を起点としているが、その後栽培面積は急激に増加し70年代には平均145千ヘクタール、生産量は180万トンに達した。栽培農家数は約3万といわれる。

国内の栽培地帯は気象条件や消費市場よりの距離等に制約されるが次の3地方に分けられる。

- イ) ブエノス・アイレス南部の BALCARCE, GEN, PUEYRREDON, GEN, ALVARDO 及び TANDIL 地域で国内のジャガイモ栽培地帯としてはもっとも重要な地域である。
- ロ) サンタ・フェ州内のロザリオ地域及び VILLA CONSTITUCION 地域
- ハ) クーロ地方

種イモはオランダ、カナダ等より約500万ドルの輸入を行っている。

2.5.4 トマト

表206 トマト：州別生産実績

州別	植付面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
メンドーサ	76	72	78	80	63	63	1087	83.0	74.4	104.0	103.0	83.0
ブエノス・アイレス	24	26	27	25	26	27	811	91.7	93.0	90.0	89.0	81.0
リオ・ネグロ	85	68	68	50	55	56	1360	108.2	132.6	57.6	67.6	60.0
サルタ	43	41	28	32	23	23	578	15.4	36.1	73.4	62.1	58.7
コリエンテス	1.1	1.3	1.3	1.7	2.0	2.2	258	11.6	19.0	26.6	26.7	49.1
フフイ	21	21	10	21	1.5	1.5	164	7.7	10.0	48.1	48.2	40.1
サンファン	23	21	24	20	1.6	1.6	338	35.4	43.0	30.0	32.0	24.0
サンタ・フェ	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	202	23.3	23.1	26.0	25.0	20.0
その他の州	7.1	7.3	6.7	7.6	8.6	8.1	130.4	114.3	101.3	118.3	98.4	130.1
全国計	360	341	322	328	31.0	30.9	6102	490.6	532.5	574.0	552.0	546.0

出所：S, E, A, G.

トマトの生産は比較的新しく世界の経済恐慌直後の1930年代頭初に行なわれた輸入代替政策を契機としている。この政策は直ちに国内生産の拡大を促したが、その結果当時まで継続していたトマトチェーンの輸入を1935年より自給態勢に切り換えており、10年後には輸出余力を持つに至った。

栽培地は全国に分布し他の作物にみられる一地方への集中傾向はなく最も大きな生産をあげているメンドーサ州でも全国生産の15%程度である。生産地帯の中で工業加工原料としての生産が行なわれているのはメンドーサ及びリオ・ネグロの両州のみで、他はすべて生鮮野菜としての消費向けである。これらの生産地帯は1)クエヨ地方及びリオ・ネグロ州 2)西北部(サルタ及びフフイ州) 3)沿岸地方ブエノス・アイレス及びサンタ・フェ州に大別される。1)は上述の通り加工用としての生産が主であり、2)及び3)は生鮮野菜として出荷される。

現時点の生産規模は面積3万ヘクタール、生産量55万トンで、69年～78年の平均2.4千ha及び40万トンを上廻っており、消費量の増加に伴う生産の上昇がみとめられる。

アルゼンチンはその自然条件より冬作トマトの生産は限定され冬期に不足するが、これら市場とくにブエノス・アイレス市場は冬期作を可能とする隣国のパラグアイやブラジルにとっては魅力的な市場であり、現にパラグアイの日系野菜農協よりの定期的な輸出が行なわれている。

表207 トマトの輸入

年度	重量 トン	金額 1,000ドル
1975	6,049	1,270
76	2,781	869
77	2,549	902
78	1,026	532
79	3,707	1,487

2.5.5 にんにく及びたまねぎ

表 208 にんにく：過去10年間の生産推移

年 度	植付面積	収穫面積	単 収	生産量
	1,000ha	1,000ha		
70/71	10.5	10.3	4,786	493
72	11.1	10.8	4,691	508
73	11.6	11.3	4,832	546
74	13.1	12.9	5,186	669
75	13.3	13.2	5,113	677
76	13.7	13.6	5,063	686
77	14.6	14.5	5,035	730
78	17.0	17.0	4,647	790
79	17.7	16.8	4,821	810
80	18.8	18.7	5,080	950

出所：S. E. A. G.

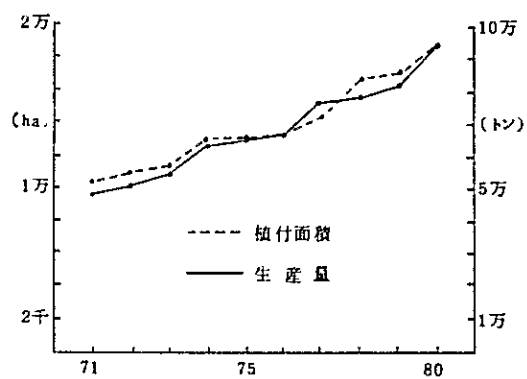


表 209 にんにく：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	73	78	84	90	89	89	380	395	424	41.0	40.0	41.0
メンドーサ	31	32	30	31	36	60	185	191	176	185	237	370
コルドバ	11	08	09	17	20	1.2	32	23	27	51	3.2	53
その他の州	18	1.9	23	32	32	27	80	77	103	140	141	1.7
全 国 計	133	137	146	170	177	188	67.7	686	730	790	810	850

出所：S. E. A. G.

表210 たまねぎ：州別生産実績

州別	植付面積 1,000ha						生産量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
サン・ファン	31	30	23	26	27	33	874	87.0	58.0	65.0	69.0	90.0
メンドーサ	32	3.2	23	21	2.2	27	91.0	89.8	58.0	53.0	56.0	55.8
ブエノス・アイレス	1.6	17	1.6	1.6	1.7	23	355	36.2	19.0	20.0	22.0	28.7
リオ・ネグロ	03	03	03	0.4	0.4	0.5	70	78	7.0	8.5	9.0	97
コルドバ	05	0.5	06	07	08	0.5	130	12.2	15.0	17.0	15.0	7.4
その他の州	85	79	14	89	9.1	83	971	567	15.0	99.5	99.1	86.2
全国計	17.2	166	85	163	169	17.6	3310	2897	172.0	263.0	270.1	277.8

出所：S. E. A. G.

表211 にんにく：輸出実績 単位 トン

仕向先国	1975	76	77	78	79
ブラジル	10,909	11,645	12,863	19,556	23,632
フランス	336	1,122	2,470	2,769	2,429
パラグアイ	157	194	192	316	441
米 国	538	326	153	373	433
スペイン	70	50	-	340	415
プエルトリコ	290	50	90	240	214
その他の国	105	207	1,015	600	5,124
計	12,405	13,594	16,783	24,194	32,688

輸出金額 1,000ドル	10,331	12,606	22,160	27,798	30,900
-----------------	--------	--------	--------	--------	--------

出所：I. N. D. E. C.

2.5.6 マンジョカ

1) 生産

表 212 マンジョカ：州別生産

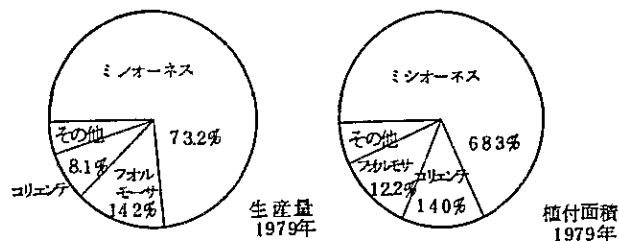
州 別	植 付 面 積 1,000ha					生 産 量 1,000トン				
	1976	77	78	79	80	1976	77	78	79	80
ミシオーネス	146	147	150	151	1549	1670	1200	1340
フォルモーサ	26	24	24	27	.	250	280	300	260	..
フリエンテス	39	34	32	31	.	229	169	163	150	..
チ ャ コ	1.8	15	14	12	.	221	180	157	80	..
その他の州	229	220	220	221	.	01	01	-	-
全国計	229	220	220	221	...	2250	2300	1820	1830

出所：S. E. A. G.

*80年は資料未入手

ブラジル、パラグアイ、ポリビアでは重要な国内食料として豊富に生産されるマンジョカもアルゼンチンでは自然条件が不適であるため、緯度の低い北部地方で少量栽培されているに過ぎない。アルゼンチンでの生産のきっかけとなったのは第2次大戦中澱粉が不足した時で、当時ミシオーネス州とコリエンテス州に設置された澱粉工場

が刺激剤となった。その結果1952年には栽培面積が53,000ヘクタールに達し、現在の倍以上の栽培が行なわれていた。その後澱粉不足の事態が解消されると国内の小規模な工場が一部閉鎖され、以後は原料の生産規模も縮小されて今日に及んでいる。



2.5.7 ポロット豆

表 213 ポロット豆：州別生産実績

州 別	植 付 面 積 1,000ha						生 産 量 1,000トン					
	74/75	76	77	78	79	80	74/75	76	77	78	79	80
サルタ	106.6	1137	2165	1480	1532	1575	693	1320	1500	1380	1400	1170
サンチャゴ・デル・エステーロ	1.2	68	90	95	377	406	1.2	10.7	84	90	480	20.5
ツクマン	14.0	135	107	174	280	203	11.8	163	90	150	280	20.3
フフイ	0.9	60	18	18	56	11.2	0.8	07	25	21	60	10.4
ミシオーネス	23	23	23	25	24	35	23	21	20	09	1.1	28
その他の州	258	84	97	108	81	79	233	87	81	50	89	70
全国計	1508	150.7	250.0	1900	2350	2410	1087	1705	1800	1700	2320	1780

出所：S. E. A. G.

表214 ポロット(豆)の輸出実績

トン

仕向先国	1975	76	77	78	79
イタリ-	15,384	14,751	12,753	18,350	25,926
イラク	-	-	-	-	26,073
オランダ	12,628	26,981	15,322	24,004	22,050
アルジェリア	993	22,464	-	-	18,129
アンゴラ	-	-	-	14,179	13,887
イスラエル	3,265	4,046	6,915	14,529	6,097
ブラジル	1,821	24,436	7,814	6,434	6,574
イラン	-	-	-	16,851	1,285
キューバ	-	-	-	10,181	7,751
フランス	8,384	14,860	9,002	11,623	12,036
ベネズエラ	849	791	3,832	5,189	7,023
その他の国	22,068	40,174	24,421	33,469	29,528
計	65,392	148,503	80,039	154,809	176,359

輸出金額1,000ドル	21,990	※	※	57,437	74,243
-------------	--------	---	---	--------	--------

出所: I. N. D. E. C.

※資料未入手

2.6 果樹

2.6.1 概要

イ) 国内生産地帯

表215 主要果実の生産推移

単位 1,000トン

年度	リンゴ	オレンジ	レモン	桃	みかん	梨	グレープ・フルーツ	梅	すもも	バナナ
70/71	4239	8646	2018	2777	2271	743	131.1	640	179	
72	5123	9900	1986	2653	2651	97.9	1437	726	181	
73	2333	7500	1860	904	2260	432	1400	290	74	
74	7860	7828	2322	2653	2487	1100	179.4	802	181	
75	6080	8330	3060	2519	2300	97.2	177.0	740	190	374.3
76	5767	7290	3390	2879	2295	1228	1850	92.2	21.6	2775
77	8200	7430	2170	2830	2290	1600	1800	78.0	26.0	333.0
78	8100	7400	3200	2500	2500	1500	1700	57.0	23.0	1288
79	9720	6700	2800	2820	2550	1600	1450	71.0	25.0	1440
80	9580	7060	301.0	2380	2240	1550	1340	69.0	21.0	
70~79平均	6700	7808	261.2	2492	2384	1170	1585	687	197	※

出所: S. E. A. G.

※資料未収入

アルゼンチンで栽培されている果樹は次の4グループに分類される。

1) 温帯果樹

イ、多年性果樹

- A. : リンゴ, 梨, マルメロ, 西洋かりん
- B. : 桃, 梅, 西洋すもも, 核桃
- C. : 生食用ブドウ, 柿
- D. : 乾燥果実〜クルミ, 栗, なつめ

ロ、単年性果物

いちご, スイカ, メロン

2) 熱帯果樹

柑橘類, パルマ, チリモヤ, マンゴ, パナナ等

亜熱帯から温帯にかけて幅広い地域を有するアルゼンチンにおいては各種の果樹栽培を可能としており最近とくに注目されている分野である。中でも温帯地方に産するリンゴ及び梨を中心とした落葉果樹は南半球最大の生産地を構成しており、地理的な特性から北半球の端境期に出荷出来る便利な条件を持っているため重要な外貨収入源となっている。また果実生産は生のままにしる缶詰, ジュース等の加工にしるすべて包装を必要とし、包装工業を発達させている点でも重要な意味を有している。

国内の果樹栽培地帯：国内の果樹栽培地帯は次の8地帯に区分される。

1. リオ・ネグロ盆地, ネウケン及びチブ州

輸出用リンゴ及び梨の生産ではもっとも重要な地帯で、その60%以上がここに集中する。品質のよさから外国の需要が多い。中でもリンゴにおいてはブラジル, 梨では米国が最大の市場である。また生食用ブドウ及びブドウ酒原料も産出する。

2. 沿岸地帯

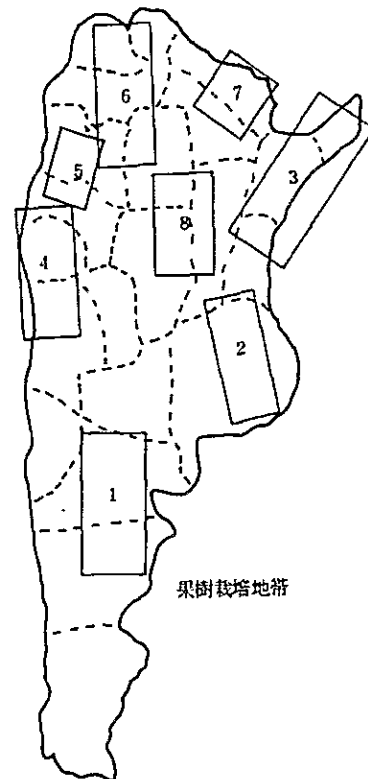
ブエノス・アイレス州南東部及び北部, サンタ・フェ州南東部及びエントレリオス州の一部にわたる地帯で果樹栽培に適した条件下にはないが、ブエノス・アイレス市という一大消費市場を控える有利な立地条件を持つ地帯である。ラ・プラタ沿岸地帯では桃を中心としたリンゴ, レモン, みかん等を小規模に産出する。またブエノス・アイレス州南部の沿岸地方はリンゴの産地である。

3. 東北地方又はメソポタミア地方

国内では柑橘類の栽培にもっとも適した自然条件下にある地方で、その中に含まれるコリエンテス州はオレンジ及びグレープ・フルーツの最大の生産地であり、エントレリオス州がみかん, ミシオーネス州がレモン等の産地である。

4. ターコ地方

メンドーサ州とサン・ファン州を中心とするこの地方はブドウの産地として特に重要である。



5 アンデス地方

カタマルカ州及びラ・リオハ州を含む地帯で小規模な柑橘類や落葉果樹の栽培が行なわれているが、他の地域に比して重要性は低い。

6 北西地方

サンタ州、フワイ州及びツクマン州を含む地帯でアルゼンチンでは数少ない熱帯果樹の生産地帯として重要な意味を持っている。国内最大のレモン生産地帯であるほか、アルゼンチンではいまだに国内需要の大半を輸入に依存しているバナナ及びパイナップルが少量ながら生産されており、輸入代替を目指してその栽培が奨励されている。

7 北部地方

チャコ州、フォルモーサ州及びサンタ・フェ州北部の地帯で6の場合と同様に熱帯果樹の栽培地帯であり、柑橘類も普及している。

8 中央部

サンチャゴ・デル・エステーロ州、コルドバ州及びサン・ルイス州を含む地帯で北部では柑橘、南部では落葉果樹の栽培が行なわれているが国内生産に占める比率は低い。

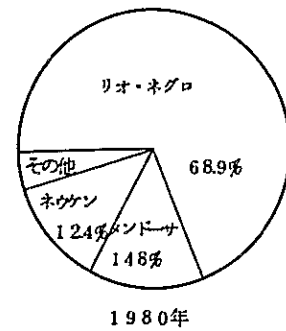
2.6.2 温帯果樹

2.6.2.1 リンゴ

表216 リンゴ：州別生産実績 単位 1,000トン

州別	1975	76	77	78	79	80
リオ・ネグロ	3870	3597	5700	6000	6820	6600
メンドーサ	1165	1219	1160	800	1422	1420
ネウケン	770	660	1030	1030	1223	1190
ブエノス・アイレス	200	197	170	165	154	140
チュブ	13	14	14	15	15	9.8
サンファン	1.7	3.3	4.2	1.4	2.9	2.0
ラ・リオハ	0.8	0.8	0.8	1.0	0.9	0.91
サルタ	1.2	1.1	1.9	1.4	0.5	0.4
その他の州	2.5	2.8	5.7	5.2	4.3	1.7
全国計	6080	5767	8200	8100	9720	9580

出所：S. E. A. G.



年間1億ドル以上の輸出を行っている最も重要な果実でリオ・ネグロ州を中心として産出する。国内生産量は年々増加して現在100万トン近くに達しており、生産量の3分の2が国内市場、3分の1が海外市場に向けられている。外国市場としては隣国のブラジルがもっとも大きく、78年度で全輸出量の60%を占めオランダがこれに次ぐ重要な市場である。輸出は重量金額ともに78年を頂点として79年に減少しているが、それでも1億4千万ドルの外貨を得ており、穀物及び油脂作物と並ぶ重要輸出品目である。最大の顧客であるブラジル側では、同じくアルゼンチンに依存する小麦に次ぐ大型輸出品目であるため国内生産の拡大が奨励されており、サンタ・カタリーナ州を中心とするリンゴ栽培が急速に伸

びているため、今後ブラジルの輸入は減少する見込みであり、アルゼンチンにとっては新規市場の開拓が必要となろう。

表 217 リンゴの輸出実績

年 度	重 量 トン	金 額 1,000ドル
1975	245,549	89,151
76	268,557	93,615
77	325,622	117,796
78	357,023	151,661
79	317,013	143,883

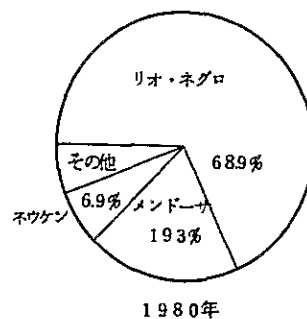
出所：

2.6.2.2 梨

表 218 梨：州別生産実績 単位 1,000トン

州 別	1975	76	77	78	79	80
リオ・ネグロ	650	816	1210	1180	1156	1068
メンドーサ	264	275	225	157	274	299
ネウケン	40	67	97	100	109	107
ブエノス・アイレス	37	39	35	28	26	25
コルドバ	08	08	08	10	10	04
サンタ・フェ	09	08	05	05	06	08
サン・ルイス	03	03	04	03	06	03
サルタ	05	06	01	03	02	01
その他の州	06	06	15	14	11	35
全 国 計	972	1228	1600	1500	1600	1550

出所：S. E. A. G.



リンゴと全く同様にリオ・ネグロ州、メンドーサ州及びネウケン州を産地とし、果実の中ではリンゴに次ぐ輸出農産物である。海外市場もリンゴの場合と同様にブラジルがもっとも大きく、オランダ、西独、ベネズエラ等が主要輸入国である。

表 219 梨の輸出実績

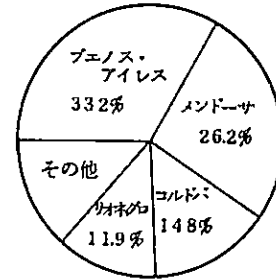
年 度	重 量 トン	金 額 1,000ドル
1975	32,841	14,257
76	47,969	19,389
77	68,642	28,211
78	77,751	35,226
79	66,911	34,952

出所：

表 220 桃：州別生産実績 単位 1,000トン

州別	1975	76	77	78	79	80
ブエノス・アイレス	959	956	1020	1080	1090	790
メンドーサ	1031	1258	1060	690	1010	624
コルドバ	129	117	118	110	103	345
リオ・ネグロ	90	188	123	230	265	264
サンタ・フェ	200	221	273	157	163	151
サン・ファン	27	29	36	42	42	23
その他の州	83	110	473	191	147	183
全国計	2519	2879	2830	2500	2820	2380

出所：S. E. A. G.



2.6.3 柑橘類

ウルグアイ川とパラナ川に挟まれたエントレリオス州ではマンダリーナ及びグレープ・フルーツ、東北部のコリエンテス州ではオレンジ、レモンは北部のツクマン州を主要産地とする。これらの柑橘類は地元消費を満すほか、ブエノス市場にも大量に出荷されており潤沢な供給が行なわれている。

表 221 オレンジ：州別生産実績 単位 1,000トン

州別	1975	76	77	78	79	80
コリエンテス	3318	3347	2900	3000	3320	3060
エントレリオス	627	823	950	900	850	1130
ノクマン	967	581	650	680	600	763
ブエノス・アイレス	642	663	680	570	670	515
サルタ	330	420	600	430	300	427
ミンオーネス	740	605	530	230	480	400
フフイ	267	630	700	470	320	366
サンタ・フェ	201	174	200	210	153	125
その他の州	198	187	190	210	157	214
全国計	7290	7430	7400	6700	6850	7000

出所：S. E. A. G.

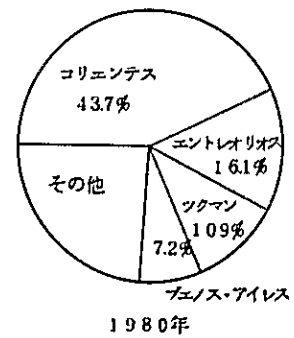


表 222 レモン：州別生産実績 単位 1,000トン

州 別	1975	76	77	78	79	80
ツクマン	2579	1556	2300	2000	1900	3000
サルタ	160	143	200	180	130	234
コリエンテス	134	140	190	210	190	183
エントレ・リオス	176	152	160	120	150	132
フフイ	219	346	180	160	130	127
ミツオーネス	50	68	93	10	97	128
ブエノス・アイレス	24	23	22	21	24	82
サンタ・フェ	34	32	37	37	27	19
その他の州	14	10	18	31	22	35
全国計	3390	2470	3200	2800	2670	3910

出所：S. E. A. G.

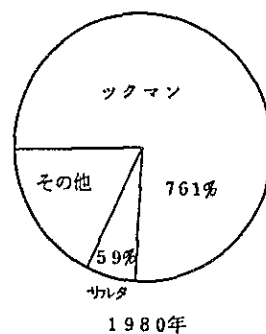


表 223 マンダリーナ：州別生産実績 単位 1,000トン

州 別	1975	76	77	78	79	80
エントレ・リオス	909	858	1040	1050	960	800
コリエンテス	357	338	360	360	320	350
サンタ・フェ	247	218	260	270	220	181
ツクマン	173	104	160	180	170	170
サンチャゴ・デル・エステロ	143	120	110	120	50	120
サルタ	105	138	190	130	70	126
フフイ	101	244	170	160	86	71
ブエノス・アイレス	220	231	230	210	230	48
その他の州	40	39	230	70	84	94
全国計	2295	2290	2590	2550	2190	1960

出所：S. E. A. G.

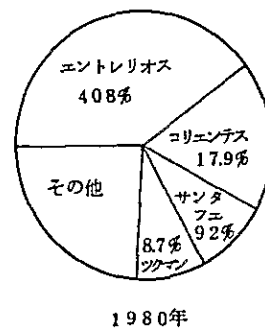
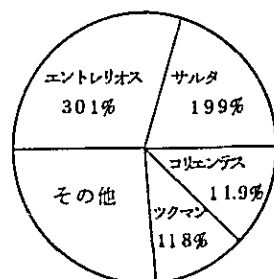


表 224 グレープ・フルーツ：州別生産実績 単位 1,000トン

州 別	1975	76	77	78	79	80
エントレ・リオス	485	435	430	330	350	460
サルタ	21.6	250	400	260	220	304
コリエンテス	37.0	362	22.0	250	210	182
ツクマン	290	289	230	240	200	180
フォルモーサ	82	57	6.0	94	90	133
ブエノス・アイレス	124	109	110	100	110	97
サンチャゴ・デル・エステロ	57	56	42	49	50	50
フフイ	92	11.6	140	85	7.8	46
その他の州	34	126	68	42	42	78
全国計	1850	1800	1700	1450	1350	1530



1980年

出所：S. E. A. G.

これら柑橘類は生果としての海外輸出も盛んで79年にはマンダリーナで15百万ドル、オレンジが5百万ドルの実績をあげた。主要輸出先国はオランダ、フランス、チェコスロバキア、デンマーク等の西欧、北欧諸国である。

表 225 主要柑橘類の輸出実績

年 度	マンダリーナ		オ レ ン ジ		グ レ ー プ ・ フ ル ー ツ	
	重量 トン	金額 1,000ドル	重量 トン	金額 1,000ドル	重量 トン	金額 1,000ドル
1975	10,145	2,570	5,284	1,116	10,354	2,601
76	11,013	2,706	17,584	3,461	12,378	2,805
77	16,466	4,254	33,762	8,095	17,682	4,036
78	23,488	6,299	30,281	7,966	20,515	5,137
79	41,224	14,823	12,940	4,919	12,707	5,109

出所：

2.6.4 熱帯果実

アルゼンチンの自然条件下では熱帯果実栽培のための適地が少なく、全般的に生産規模も小さいが、輸入代替えを目指した生産が奨励されており、北部地方を中心とした栽培が増加しつつある。

2641 バナナ

長年国内消費の全量を輸入に依存していたが国の研究機関（INTA農業技術院）による調査の結果、従来国内生産は不可能といわれていたバナナ栽培の可能性が見出され、ボリビアと接するサルタ州及びパラグアイ国境のフォルモーサ州において生産が行なわれている。もちろん栽培のための自然条件は最悪ではなく、栽培技術によって各種の障害を克服する必要があるが、従来より果物類ではもっとも大きな輸入を占めていた品目だけに今後の増産と輸入代替えが目下の目標とされている。

表 226 パナナ：州別生産実績 単位 1,000トン

州 別	1975	76	77	78	79
フォルモーサ	3303	241.6	2241	681	645
サルタ	356	310	1022	537	720
ミシオーネス	1.1	04	21	35	38
コリエンテス	40	40	34	31	3.1
フフイ	06	05	12	04	06
全国計	3743	2775	3330	1288	1440

出所：I, N, D, E, C.

国内生産量は78、79年に統計上急激に生産を落している（天候不順のためと思われる）ものの77年までは3年間の平均で年間33万トンの生産であり、これが国内生産規模とみられる。一方輸入は過去6年間の実績でみると年平均約12万トンとなっているので、国内消費量は年間約45万トンと推定され国内需要の70%の自給を達したことになる。しかし残り30%の補給のために依然として年間平均2,500万ドルの外貨流出が続いている。

表 227 パナナの輸入実績（重量） 単位 1,000トン

輸入先国	1975	76	77	78	79	80※
ブラジル	131.1	856	1057	1097	1141	314
エクアドル	11	1.0	01	09	552	639
ポリビア	01	-	-	04	03	-
コロンビア	-	-	-	14	62	-
チリ	-	-	-	-	03	-
計	134.3	866	1058	1123	1761	953

金額US\$1,000	288	181	180	215	443	210
-------------	-----	-----	-----	-----	-----	-----

出所：COMERCIO EXTERIOR ARGENTINO

注）80年は1～7月までの統計

パナナの輸入は従来隣国のブラジルに全面的に依存していたが、78年頃よりエクアドルよりの輸入が増加し始め80年の1～7月までの統計ではブラジルをしのぐ状態に変化して来た。これはパナナを主要生産物とするエクアドルが国の援助のもとに強力な輸出市場の多様化を図っていることや、ユナイテッド・フルーツを中心とする巨大な資本が投下されているエクアドルは生産技術、品質においてもすぐれている等によるものでアルゼンチン国内の市場でもエクアドル産が1級品、ブラジル産は2級品という格差がつけられている。この他にエクアドル側の船舶輸送に対し陸上輸送を行っているブラジル側ではラッタ協定の枠内で国境を通過するトラックに種々の制約が加えられ、それらの条件を満たす車輛数が少なく輸送能力に欠けたことなども輸出減退の理由とされている。

国内生産を増加して輸入代替えを図っているアルゼンチンのパナナ市場も輸出側のブラジル、とくにアルゼンチン向けパナナの生産地としてパナナを基本的な産業とするサン・パウロ州のリベイラ川流域地帯では重要な市場であり、エクアドルの進出によるアルゼンチン市場の衰退は重大問題となっており、輸出梱包の改良、輸出品質基準等各種の対策

が補じられつつある。

2.6.4.2 バイン・アップル

典型的な熱帯性果実で霜に対する抵抗力がないため国内に栽培適地がなく、ミシオーネス及びフォルモサ両州で少量栽培されているに過ぎない。又サルタ州では試験栽培の段階にある。公式の統計はないが、国内生産量は約1,000トン、消費は約2万トンと推定されており、不足分はブラジル及びエクアドルよりの輸入によっているが輸入量、金額ともバナナ程大きなものではない。

2.6.4.3 その他の熱帯果実

以上のはかパルタ（PALTA、ブラジルではアバカテ）、マンゴ、パパイヤ、ゴヤバ等が少量栽培されている。中でもパルタは高級果実として価格も高く見込みのある果実であるが、ツクマン、フワイ、サルタ及びフォルモサ各州を合わせて76/77年に1万トンの生産に達したあと減少していると伝えられており、パパイヤは約100トン、マンゴ300トン程度の生産規模を脱していない。

2.6.4.4 乾燥果実

クルミ、栗、なつめ等を指し、この中で生産量ももっとも大きいのはクルミで全国の植付本数は約40万本と推定されており、9千トンが生産される。カタマルカ州、メンドーサ州及びラ・リオ・ハ州が主要生産地となっている。この他サルタ、ノクマン、サン・ルイス及びコルドバの各州でも少量が生産されており、ポテンシャルな生産地としてリオ・ネグロ州があげられる。

栗は現在のところアルゼンチンでは栽培されていないがINTAの調査結果ではネウケン及びリオ・ネグロ両州が適地とされている。なつめはラ・リオ・ハ州のPAQUIA地区で栽培されているが統計は発表されておらず、生産量については不明であるが乾燥果実の中でもっとも可能性をもつものといわれている。

2.7 牧畜

2.7.1 国内の牧畜地帯

国内の牧畜地帯は次の5地域に分類される。

1) パンパ地方

牧畜の国アルゼンチンの中でも自然条件がもっとも適した牧畜地帯はブエノス・アイレス、サンタ・フェ及びコルドバ州を中心とするパンパ地方で国内に保有する牛の3分の2、羊のほぼ半分がここに集中する。中でもブエノス・アイレス州を中心とした半径55kmの地帯はとくにすぐれた牧畜環境を持つ世界有数の牧場地帯である。その周辺をとりまく帯状の地帯でも牧牛飼育は行なわれているが牛よりも羊の飼育に適した条件を備えている。

この地方は自然の牧草が豊富にあるため特別に飼料作物を準備する必要のないこと、防寒対策の施設を必要としないことを特徴としており、それだけに粗放的な牧場形態が圧倒的である。昔はブエノス・アイレス近郊でも羊の飼育が盛んであったが、羊には柔い牧草の必要がなく、また短い牧草を好むためパンパは牛の飼育に優先され、今日ではその周辺や西部、南部へと移動した。この地方のもつ他の特徴は牧畜とあわせて農耕を可能とすることで各種作物の耕作のほか穀物の項で述べた通り飼料作物としての大麦、からす麦、ライ麦やアルファルファ等を栽培して冬期の飼料を人工的に補給出来る強みをもっている。

アルゼンチンの農業地図を作成したPARADAKISはこのパンパ地方を次の通り表現としている。^{*)}この様な種々の

条件を総合するとこのパンパ地方は世界でもっともすぐれた牧場地帯といえる。もし世界の他の地域に単位面積あたりの飼育頭数がパンパ地方より優れた牧場地帯があるとすれば、それは牧草のほか穀物、油粕、砂糖きびのしぼり粕等コストの高い飼料を与えた結果であろう、これらの方法はアルゼンチンにおいても牛肉の国際価格さえ高くなれば可能なことである。このような金のかかる方法によらないアルゼンチンの牧畜分野には改良、投資の余地が大きく残されており牧畜生産をさらに拡大する可能性を有している。“これらのポテンシャルティ―に加え国内の大消費市場や輸出港の近距離にあることもパンパの持つ有利な条件である。

2) 東北地方

牧草の成長度はパンパ地方に比してはるかに高いが牧畜生産力となると次の理由によりパンパ地方に劣っている。

- イ) 柔らかい牧草を育成させるためには冬期の気温が高すぎる。このため繊維の固い牧草が大半を占めている。そもそもこの地方は農業生産への適性も低く西部の一部を除いてアルファルファがほとんど栽培されていないため牧草が欠乏する時期には牛を湿気多い牧草のある地帯に移動させる必要がある。
- ロ) 気温が高いためガラパタ (GARRAPATA) と呼ばれるダニが発生する。ダニは牛を衰弱させるばかりでなく、免疫性のない牛を殺すトリステサ (TRISTEZA) という病菌を伝染する。

牧牛飼育の適性は東より西に向うにつれて薄らいでいく。この様な環境に対してショートホーン種の抵抗性は弱くヘアホード及びアパディーン・アングス種が適性のある肉牛種であり、また米国やブラジルの亜熱帯型の地方に適するセブ種にとって将来性のある地帯となっている。

羊の方はコリエンテス州北部に向ってロミー・マッシュ種及び在来種の飼育が増加する、サノチャゴ・デル・エステロ州では気候条件から在来種の飼育が多い。

3) 西北地方

西部チャコ地方、サルタ市周辺の高台、フイ州、ツクマン州等を含む地帯である。西部チャコ州においてはモンスーン型の気候が支配し夏に降雨が集中して冬期は乾燥する。このため1年のうち6ヶ月間は牧草が極度に減少するので牧牛部は夏期の湿気を保存する低地へ移動する。この地方では冬期対策として灌漑を利用したアルファルファ栽培も行なわれているがその規模は小さく全体の需要に応じきれない。

ツクマン州やサルタ州では乾燥期間は短かく冬期の雨も多く気温も下り、パンパに似た植生である。フイの草原では降雨の頻度がチャコ地方よりも少ないが同じモンスーン型の気候である。飼料用とうもろこし、アルファルファ等も栽培されており、パンパ地方と同様に牧畜に適した条件を有している。これに対しアンデス山麓地帯は乾期が7ヶ月間以上継続するため山羊、リヤーマ、ビクーニャ等の高山動物以外には適さない。一部の低地に草原があるのみでそこに少量のアルファルファが栽培されている。牧牛の種類は乳牛のオランダース・アルヘンティノ種及びJERSEY種等である。

山羊は広範囲に分布しているが改良は進んでいない。品種としてはメリノ種、ロミーマッシュ種がみられる他、皮と毛が高級品として取引されるカラクール種の導入が行なわれており、牛に適性の低いこの地方にとって大きな可能性を持つ分野といえる。

この地方はパンパ地方と異なり地元の消費のほか生きた牛のチリ―向け輸出も行なわれている。

4) 西部地方 (クエ地方)

パンパ地方西部の境界となる山岳地方の半乾燥地帯を指す。この地方がパンパ地方と区別される理由はモンスーン型の気象によって乾燥期があるためである。一部の湿気が多い場所にはパンパに似た草原があるがその規模は極めて小さなものである。この様な状態は近距離間の地域でも牧畜条件がそれぞれ異っており典型的な牧畜地帯となりうる条件を備えていない。

さきの PARADAKIS によると農牧の孤島というべき地帯で農耕は行なわれず牧畜もまた非常に貧弱で羊の飼育が大半を占める。

5) パタゴニア地方

アルゼンチンの南部地方に植生する短かい草原はビンセットに似た歯を持ち短い草を好む羊の飼育に適している。昔カルロス・ダービンが“荒涼たる何の利用価値もない無人地帯”と定義したこの地方も、パンパにおける牧畜が牛を主体として進められるに従い南部に移動した羊の飼育場所となり豊かな羊毛生産地帯へと変貌した。その経緯は世界最大の羊群を持つオーストラリアの広大な砂漠地帯に類似している。又この地方には少規模ではあるが河川沿岸の草原にパンパ型の草原があり、乳牛及び肉牛の飼育も可能とされている。従来大西洋岸に沿ってパンパ地方より肉類の補給を受けてきた同地方にとって今後の牧牛生産は興味ある問題としてとりあげられている。

アンデス山麓の南部とマゼラン海峡近くの湿気を持つ地帯は牧畜形態として中央ヨーロッパ及びニュージーランド南部と比較される地帯であり、羊及び牛の飼育に適しているが牛の場合は防寒対策を必要とし、低温のため牧草の成育が中断される時期があるためヨーロッパの場合と同様に冬期用飼料の保存が必要となる。

パタゴニア地方における牧畜の大勢を占める羊については、全般的にその飼育に適しているが、西部よりも降雨が多く港に近い利点を大西洋沿岸地帯に集中する。

74年の農牧センサスによると以上の各地方に分布する牧場数は510,336であった。これを牧畜生産高よりみるとパンパ地方が圧倒的に大きく全体の85%を占め、これに次いで東北地方の6%、パタゴニア地方4%、西北地方3%及びクエーヨ地方2%の割合である。

表 2 28 牧畜生産高の地方別比率 74年及び78年

地方別	牛		羊 毛		そ の 他		全 体	
	74年	78年	74年	78年	74年	78年	74年	78年
パンパ地方	840	864	430	543	920	922	840	850
東北地方	90	77	40	61	26	26	60	64
西北地方	34	32	06	09	28	26	28	28
クエーヨ地方	24	18	12	21	10	09	17	16
パタゴニア	1.2	09	512	37.5	16	17	55	42
計	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000	1000

牧畜部門全体に対する比率	540	590	95	85	365	325	1000	1000
--------------	-----	-----	----	----	-----	-----	------	------

出所：GEOGRAFIA LA ARGENTINA

2.7.2 牛

1) 牧場数及び保有頭数

1974年に行なわれた農牧センサスの結果によると牛を主体とする牧場は全国で32万であった。牛の保有頭数は77年に6千万頭を越えたあと78年には59千万頭へと減少したが1980年の推定では61千万頭となっている。

表229 アルゼンチンの牛保有頭数の推移

農牧センサス	頭数 1000頭
1888	21,964
1908	29,117
1930	32,207
1937	33,207
1960	43,521
1969	48,298
1974	55,355
1977	60,322
1978 (推定)	59,000
1980	61,052

出所：78年までJ. N. C.

80年 INFORMACION ECONOMICA

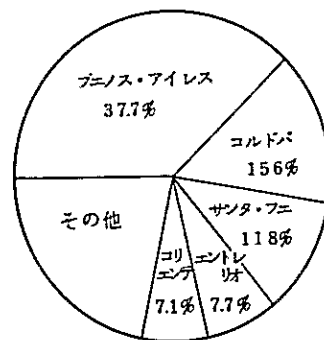
アルゼンチンの保有頭数はインド、米国、ソ連、ブラジル及び中国に次いで世界6位の位置にあるが、人口との比率からみるとアルゼンチンがもっとも高く、中国の15人に1頭、米国及びソ連が2人に1頭、フランスは1人当たり1頭に対し、アルゼンチンは1人当たり2頭の割合である。このことは世界的に牛の分布が不均衡であることを示すものであり、アルゼンチンは同様の条件下にあるオーストラリアと共に世界でもっとも多く牛肉輸出国であることを裏付けている。一方国内においては前述の通り牧畜部門生産高の約60%、アルゼンチン輸出総額の約10%を占める重要部門である。

国内牧牛飼育地帯はパンパ地方に集中し、ブエノス・アイレス、コルドバ及びサンタ・フェの3州が一大生産地帯を構成し全国保有頭数の65%を占める。国内でもっとも普及している品種はショート・ホーン (SHORTHORN)、ヘーフォード (HEREFORD)、アバーダン・アングス (ABERDEEN ANGUS) 等で全体の70%近くを占めているといわれる。これらの品種は前世紀にヨーロッパより輸入された改良品種であるが国土の3分の1を占める南緯30度以内の地域では暑さや牧草不足、病害の発生に対して抵抗性がなく生産力が低い

め、これらの地域に適した品種導入の必要性が感じられてきた。その解決策として考えられたのがセブー種 (米国では BRAHMA 又は BRAHMAN) で1909年にベネズエラ及びブラジルより導入され、1941年頃より上記3種のヨーロッパ種との交配が広く行なわれるようになり、ブラホーン (BRAHORN)、サンタ・ヘルトルージス (SANTA GERTRUDIS)、ブランクス (BRANGUS) 等の新種がつくりだされた。

表230 牛：州別保有頭数 (1977年)

州	頭数 1,000頭
ブエノス・アイレス	22,721
コルドバ	9,414
サンタ・フェ	7,143
エントレ・リオス	4,649
コリエンテス	1,306
ラ・パンパ	3,620
チャコ	1,870
サンルイス	1,386
フォルモサ	1,317
サンチャゴ・デル・エステロ	1,148
その他の州	2,748
全国計	60,322



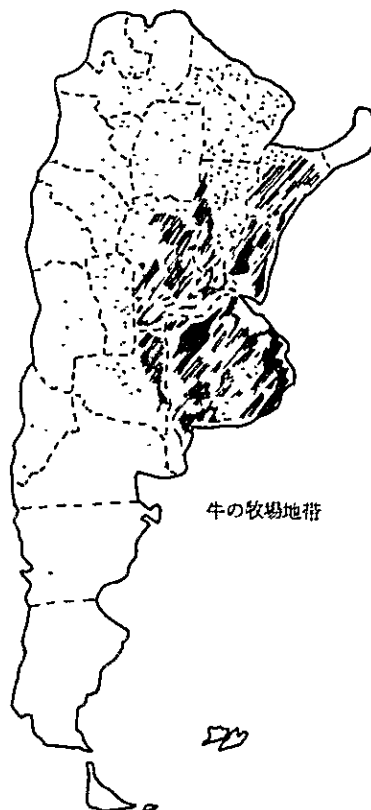
出所：ANUÁRIO ESTADÍSTICO 1978

飼育形態はクリア（CRIA）とインベルナダ（INVERNADA）の2つの方法によって行なわれる。クリアとは広大な牧場に野放しにして仔牛を生まれ繁殖を目的とするものであり、通常2,500ヘクタールの牧場に1,500頭の仔牛（雌）を放ち成長したあと6頭の種牛を放して交配繁殖させる。これに対しインベルナダ又はインベルネと呼ばれる方法は販売前の肥育を目的としたもので牧場を100～150ヘクタール単位に区切り十分な飼料を与えて集約的に飼育する方法である。この場合の牛1頭あたりの面積は天然牧場と造成牧場によって異なるが、パンパ地方の天然牧草では1ヘクタール当り成牛0.6～1頭、造成牧場では1.2～2.2頭の割合となっている。

牧畜サイクル：牛の保有頭数は以上の方法で生産される数と牛肉食産のために屠殺される数との差の大小により変動する。各種の要因によって保有頭数は増減するが、市場で肉不足を生ずる場合と大量の屠殺により牛肉の供給が飽和状態となり保有頭数が減少する場合がある。この現象は自然条件や内外の経済、社会上の要因によって生じるもので、1945年頃より周期的に繰返えしてきた。この周期をアルゼンチンでは牧畜サイクル（CICLO GANADERO）と呼んでいる。このプロセスの1例としてある年に異常な乾燥が続いたとする、牧場主は乾燥による牧草の枯死によって牧牛の全滅を避けるため大量の牛を屠殺にまわすため保有頭数は減少する。屠殺された牛の肉は市場を飽和し当然の結果として価格の下落を招く。しかし雌牛の大量屠殺は以後数年の間、牧牛の増加を鈍らせ市場への牛肉供給量は減少し価格は次第に上向きになっていく。ここに牧場主の更に高値をねらうスペクレーションが作用し屠殺量も制限される。いきおい価格は高騰の時期を迎える。高騰した価格が消費者の購買力の限度を越える頃から他の肉類が代替え消費されるようになり牛肉の需要は減り価格は下落を開始する。牧場主は更に価格の下落をおそれて屠殺をいそぎ、次第に牛肉供給量は増加し逆に価格の下落をおおっていく。屠殺の増加は保有数の減少へとつながっていく。

一例としてあげた以上の牧畜サイクルは実際にはこの様に単純なものではなく、天候不順や国内外の価格に敏感に反応して生ずるほか農産物の市況が好調の時も起り得る。つまり大豆の国際価格が高騰したとすると、今世紀の中期より増加したミニファンディオ（小面積の農地所有形態の呼称で大農地所有形態ラチファンディオに対する言葉）の生産形態が農耕と牧畜を併用する場合が多いため、これらの農家は大豆栽培を拡大するため牧場面積を縮少し通常以上の牛を屠殺にまわす。その結果、市場価格の下落—保有頭数の減少—次第に価格の上昇—購買力の減退—価格の下落—売り急ぎ—屠殺の増加—価格の高騰、のプロセスが開始される。

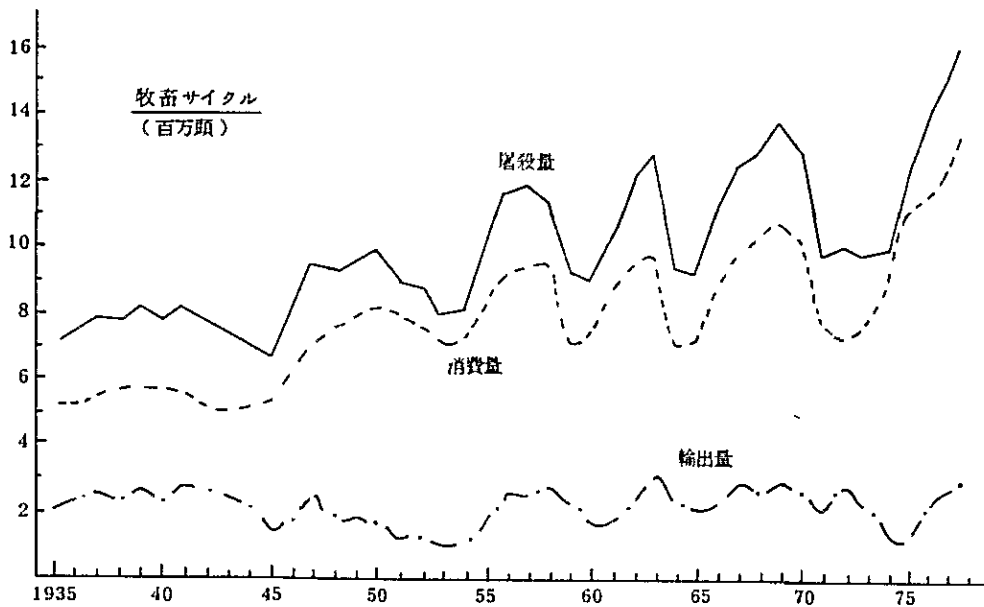
過去の経緯をみると1908年牛の保有頭数は約3,000万頭で以後若干の変動はあったが、1945年頃まで同様な状態が継続した。この頃になると飼育方法の改良や優良品種の導入によって生産性は明らかに向上し45年を境にして保有頭数の顕著な増加が始まり、1930年の世界経済恐慌後衰退した農業部門に代って牧畜サイクルが明確な形として現れてきた。1956-57年には最初の大規模屠殺が行なわれたあと1960年には牛肉生産の極度の減退がみられ、以後ほぼ5年置きの周期でこのサイクルが繰返えされ、最近では69年に行なわれた大規模屠殺と71年の生産激



牛の牧場地帯

減があり俗に「71年の危機」と呼ばれた時期を経験している。この71年を契機として屠殺の制限を含む厳しいコントロールが開始され全国保有頭数の増加が図られてきた。

この様な牧畜サイクルがとくに重要視されるのは国民1人当りの牛肉消費量が世界一の折紙をつけられている程大きく生活費の20%を占めるため牛肉価格の高騰は国民大衆の家庭経済を圧迫し、屠殺の極度の減少は重要輸出品目としての牛肉輸出を減少させて貿易収支に重大な影響をあたえ、関連産業たとえば冷凍工場の操業停止などによって大量の失業を招くといった連鎖反応を起し社会不安を醸成する要因となり得る程、その規模が巨大であるからに他ならない。これも牧畜国アルゼンチンにして起り得る経済現象といえる。



保有数に対する屠殺率は通常4分の1から5分の1であり、ブラジルの約10%に比して高い比率である。1978年を例にとると推定保有頭数59百万頭に対し16百万頭の屠殺でその比率は27%であるが、需給を均衡させる屠殺率を24%とするとこの数字は明らかに均衡を破る屠殺であり新しいサイクルの開始を示している。この16百万頭より320万トンの牛肉が生産されており、1頭の平均重量は200kgとなる。

2) 国内消費

牛肉を中心とする畜産品の処理加工は全国の1,900施設によって行なわれ、71千人がこれに就働している。この中で第一段階の屠殺は国家肉委員会が認可した116工場によって行なわれる。屠殺された牛肉を販売用に切断処理する加工を第2段階とし、冷凍工場での保管、梱包、発送を第3段階とする。これらの加工工場は牧畜地帯のパンパ地方に集中し、その66%がブエノス・アイレス州、17%がサンタ・フェ州に分布する。

生産された牛肉の約80%が国内で消費され残りが輸出に向けられる。国内消費に向けられた牛肉は79年度で約240万トン、同年の人口は約267百万であったので1人年間消費量は約90kgとなる。この消費量は毎年の屠殺量や価格の変動に応じて変化するが過去の統計では1950年の94kgから大量屠殺のため保有頭数が減少し、政府が屠殺を規制した1972年の62kgを最低として78、79年にはふたたび90kg以上に戻っている。アルゼンチンにお

けるこの1人当り消費量はウルグアイ及びオーストラリアと共に世界でもっとも高い水準にあり、78年の統計にみられる米国の5.4kg、西独の2.3kg、カナダの5.0kg、フランスの3.6kgを大きく上廻っている。南米大陸ではウルグアイのほか比較的消費量が高いパラグアイ(4.1kg)を除くと他は2.0kg程度である。ちなみに日本の消費量は4キロ半である。

表 231 牛肉生産量と国内消費量及び価格

年 度	屠殺頭数 1,000頭	1頭当り重量 kg	牛肉生産量 1,000トン	国内消費量 1,000トン	1人年間消費量 kg	価 格	
						1970年価格	US\$/kg
1971	9,468	211	2,009	1,532	64	1.38	0.41
72	10,010	219	2,191	1,488	62	1.30	0.47
73	9,810	219	2,149	1,598	66	1.24	0.68
74	9,755	214	2,163	1,874	75	0.98	0.56
75	12,146	201	2,439	2,177	87	0.66	0.35
76	13,488	203	2,811	2,288	89	0.70	0.35
77	14,368	198	2,914	2,331	89	0.85	0.43
78	16,089	194	3,193	2,453	95	0.73	0.48
79	15,257	198	3,092	2,395	90	0.91	0.92

出所：J. N. C.

3) 世界の生産需要動向

牛肉の主要生産国のうち国内消費を満たしてなお輸出余力を持つ国はオーストラリアを筆頭としアルゼンチン、ニュージーランド及びウルグアイがあげられる。米国は世界最大の牛肉生産を行っているが同時に最大の輸入国でもあり、米国に次ぐソ連、EC諸国、カナダも又100万トンを越す生産にかかわらず輸入側にある。またブラジルは従来の輸出国より大型の輸入国へと転じている。その他、日本、EC外西欧諸国、東欧諸国及びアフリカ、日本以外の極東諸国が上記4国よりの供給を受ける輸入国である。その貿易量は78年で143万トンに達している。

表 232 牛肉の主要生産国と生産量

単位 1,000トン

国 別	1975	1976	1977	1978	1979	1980
米 国	11,113.0	12,011.0	11,694.0	11,163.0	9,828.0	9,624.8
E C 諸 国	6,616.0	6,450.0	6,435.0	6,384.0	6,791.0	6,900.0
ソ 連	6,019.0	5,992.0	6,406.0	6,620.0	6,500.0	6,300.0
アルゼンチン	2,438.0	2,811.0	2,913.0	3,197.0	3,076.0	2,950.0
オーストラリア	1,669.0	1,871.0	2,128.0	2,135.0	1,760.0	1,510.0
ブラジル	1,790.0	2,176.0	2,255.0	2,143.0	2,000.0	1,950.0
メキシコ	889.0	986.0	1,040.0	1,055.0	1,037.0	1,054.0
カナダ	1,049.2	1,162.0	1,143.0	1,145.0	1,025.0	1,000.0
ニュージーランド	507.0	628.0	540.0	534.0	477.0	447.0
日 本	351.0	298.0	360.0	403.0	417.0	430.0
ウルグアイ	344.0	397.0	343.0	337.0	280.0	380.0

出所：FAO

表 233 牛肉の主要輸出国及び輸入国 1978年 単位 1,000トン

輸入国 \ 輸出国	オーストラリア	アルゼンチン	ニュージーランド	ウルグアイ	計
米 国	3940	445	1608	1.5	6008
日 本	97.7	-	22	0.1	1000
ブラジル	-	650	-	345	995
英 国	108	422	48	0.3	581
ソ 連	173	327	38	-	538
カナダ	237	26	243	0.1	507
西 独	0.8	348	0.1	38	395
韓 国	40.1	-	-	-	40.1
エジプト	4.2	309	-	3.6	387
イスラエル	8.5	264	-	3.4	383
ギリシャ	0.1	278	-	3.1	31.0
イタリー	0.3	174	-	1.0	18.7
オランダ	-	14.1	-	1.7	15.8
スペイン	-	10.3	-	4.5	14.8
シンガポール	10.6	-	2.4	-	13.2
ホンコン	9.2	0.7	2.1	-	12.0
フランス	0.3	8.1	-	0.7	9.1
その他	91.2	80.9	23.7	4.7	200.6
計	7088	4387	2242	630	1,434.7

出所：FAO

最近の世界市場は74年の石油ショック以後主要輸入国が行った大量屠殺のための停滞した取引水準は脱却したが価格は次の状況により変動を続けている。

- イ) 主要輸入国側の経済活動が78年及び79年上半年期において比較的高度の成長を続けた。
- ロ) これら主要輸入国では大量屠殺以後牛の保有数が減少した。
- ハ) ブラジルや韓国等新しい大型市場が出現した。
- ニ) EC諸国、中東及び北アフリカの需要が増大し、米国及び日本の輸入枠が実質的に拡大された。
- ホ) オーストラリア及びニュージーランドの屠殺が減少した。
- ヘ) ブラジル、メキシコ、コロンビア他中南米諸国の輸出余力が皆無もしくは極度に減少した。

以上により牛肉の国際価格は78年より79年中期にかけて実質的に倍加したが、この時期を過ぎると次の状況に伴う減退期に入る。

- イ) EC諸国では共同市場保護のための介入措置としてEC諸国に累積されていたストックの緊急買付けを行ないその大部分をダンピング価格で国際市場に放出した。その量は79～80年に80万トンに達したが第2次エネルギー危機による経済減速化に傾いた国際市場に大きく影響した。EC諸国の輸出はアルゼンチンを含む伝統的な輸出国の競争を不可能とする程強力なものであり、その販売がソ連及び東欧諸国に向けられたものの可成りの量がアル

ゼンチンの伝統的な輸出市場であるギリシャ、ポルトガル、北アフリカ諸国、中東諸国に向けられた影響は大きい。事実アルゼンチン産牛肉需要は80年に急激に減少している。

ロ) 国際市場における飼料用穀物の継続的な取引拡大にみられるように牛肉の主要輸入国においては、70年代中期以降代替品としての豚及び鶏の生産が目立って増加してきた。この爆発的な豚肉及び鶏肉の供給増加は飼料作物の生産国であり、牛肉の輸入国である米国やブラジルにおいてみられたほか飼料作物及び牛肉の輸入国においても顕著であった。これら豚及び鶏は牛の場合と異なり小面積で生産を可能とし、大型穀物輸出国の余剰品で飼料需要を満たし得たためその規模は急激に拡大した。その量を世界の各肉生産国55ヶ国についてみると、76年から80年にかけて牛肉の生産量が41.4百万トンから38.9百万トンへと減少したのに反し、豚肉は27.4百万トンから33.1百万トンへ21%増加しており、鶏肉は16.1百万トンから20.3百万トンへと30%の増加をみている。80年下半年期に作為的に行なわれた豚の屠殺減少は豚肉価格の上昇を許したが牛肉の需要を増加させており、前年度末の価格には達しないまでも若干の回復をみている。しかしながらこれら代替肉の供給量は牛肉価格の上昇を抑えるだけの力を持つ規模に達しているため、世界の牧畜サイクルは従来とは異った動きを示すものと思われ、牛肉の主要生産国では均衡のある生産へと移る傾向にある。

ハ) 以上の代替肉の供給量増加と合せて国際収支の改善を図る輸入抑制からブラジルや韓国における牛肉輸入の中断、ブラジルの年末にかけた買付けの減少。

ニ) アルゼンチン及びウルグアイの伝統的な市場には社会主義諸国や南アフリカ等が輸出国として出現しており、低価格を求めるヨーロッパ諸国への売込みを強化している。

以上の状況とは逆に新しい買手として現われたソ連は80年に40万吨以上の輸入を行っている。その大半はEC諸国より供給されたもののアルゼンチンよりの10万吨の買付けは今後の市場として大きな意味を持つものである。

4) アルゼンチンの輸出

牛肉を主体とする畜産品の輸出は伝統的に輸出総額の50%を占めてきたが、70年代に入ってから他の項目の増加と74年以降石油危機の影響を受けたEC諸国ほか主要市場の停滞による畜産品自体の輸出量減少のため75年には輸出総額の12.4%へと落ちた。1976年に入るとEC諸国の輸入が再び復活してきたことや、新規に開拓した市場も加えられ輸出量は倍加するが、国際価格の下落から輸出金額において大きな伸びを示すことなく終っている。しかしこの年以降EC諸国が再びアルゼンチン産牛肉の圧倒的な市場として買付けを始めたことや、スペイン、イスラエル、ギリシャ等の新規市場も出現し、また輸出側にあったブラジルの輸入も加って以後78年まで輸出は順調な伸びを記録した。

しかしながら1979年に入ると最大の市場であるEC諸国が前述の通り国内防衛の手段を講じたほか、アフトーザ問題を理由とした新たな輸入抑制を始め、第2次石油危機がこれに加って買付けは減少し80年には再び76年の水準を割って貿易収支に少なからぬ影響を及ぼしている。

表 234 牛肉の輸出推移

年 度	重 量 (トン)	金 額 (100万ドル)	平均単価 (ドル)
1971	3056	3509	1,148.2
72	4608	5869	1,273.6
73	3526	6586	1,867.8
74	161.2	3307	2,051.5
75	1387	2005	1,445.6
76	3140	371.7	1,183.8
77	361.0	466.6	1,292.5
78	445.9	612.4	1,373.4
79	438.7	987.7	2,251.4
80	273.5	773.2	2,827.1

出所：INFORME ECONOMICO

アルゼンチン牛肉の仕向先は経済圏別では EC諸国がもっとも大きく、国別では78年以降のブラジル、伝統的な米国、英国及び西独等が多くを占める。

一方生きた状態での牛の輸出先はチリーが伝統的な市場で60年代を通じ16万頭前後の輸出が続けられてきたが、1970年以降国内加工による附加価値の輸出を目指した政策のもとに未加工の輸出は制限された。この

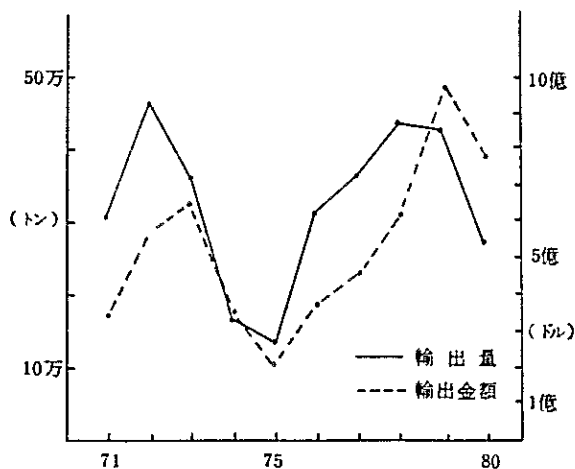


表 235 生きた牛の輸出

年 度	頭 数 (頭)	金 額 1,000ドル
1969	103,745	××××
72	49,186	××××
75	1,294	××××
76	11,185	4,107
77	19,669	8,984
78	102,943	19,170
79	××××	10,969

出所：I, N, D, E, C,

××× 資料未入手

制限は77年まで継続され、その間国際協定などによる一部を除いてほとんど禁止状態にあったが、78年より輸出が再開され、現在10万頭前後の牛が送り出されている。

表 236 牛肉：アルゼンチンの輸出（仕向先別） 単位 1,000トン

国 別	1975	1976	1977	1978	1979
ブラジル	-	2.4	21	57.0	65.0
米 国	273	383	341	47.3	44.5
英 国	196	320	292	4.49	4.22
西 独	138	429	40.3	4.40	3.48
ソ 連	281	11.0	32.1	-	32.7
エジプト	-	4.9	15.5	7.0	30.9
イスラエル	10.4	16.3	11.7	20.7	26.4
ギリシャ	6.0	24.2	31.1	38.9	27.8
イタリア	8.3	16.7	19.6	16.9	17.4
オランダ	4.6	10.1	12.9	13.3	14.1
スペイン	4.4	12.9	19.9	23.6	10.3
フランス	4.6	11.0	13.2	15.7	8.1
スイス	2.1	4.3	4.2	7.7	6.4
ポルトガル	-	22.9	16.6	2.5	6.4
チリ	-	1.0	7.3	12.3	5.0
その他の国	9.5	63.1	71.2	9.41	66.7
計	1387	3140	361.0	445.9	438.7

出所：J. N. C.

表 237 牛肉全体の輸出量及金額

年 度	輸出量 1,000トン	輸出金額 100万トン
1971	477	736
72	703	834
73	551	1,195
74	289	1,144
75	262	765
76	527	705
77	583	801
78	740	828
79	697	1,417

出所：I. N. D. E. C.

冷凍牛肉以外の牛肉製品としては煮豚肉、缶詰、塩漬け等の加工品がある。生肉とこれらの加工品を総合した輸出量とこれらの加工品を総合した輸出量とトン当り平均価格は左表に示す通りである。

5) アフトーザ及びガラパタ対策

牧畜を経済の大きな支柱とするアルゼンチンにとってアフトーザは極めて深刻な問題である。日本が古くより輸入を中断しているのを始め、最近では最大の市場であるEC諸国もこれを理由として輸入制限に踏み切っている。アルゼンチン国内では、EC諸国の中でも輸入に関する規制のきびしい英国が継続して冷凍生肉の輸入を行っていることや、ア

ルゼンチンの42度以南の寒冷地帯の肉までフトーザ保肉とするのは輸入国側が輸入抑制策を際立って行なうためのこじつけに過ぎず自由貿易を阻害するものであると批判しているが、輸入側では他にアルゼンチンと似た供給国がある以上強いてフトーザが云々されている国の肉を買いつけるところか極力避けようとする傾向が強い。

国内では一定の地域における定期的な予防注射を義務づけ、接種済の牛に対する証明書の発行を行っており、フトーザの撲滅と外国の不安解消を図っているが、外国を納得させるためには更に徹底した措置が必要なようである。

フトーザと並んで国内の牧畜に大きな被害をあたえるダニ(ガラパタ)対策については1935年の法律第12,566号及び15,021号を基本法令として全国の組織的な予防対策を義務づけている。同法律は1961年に改訂され対策方法の近代化が図られており、その施行細則にもとづく対策実行中央委員会(COMISIÓN CENTRAL EJECUTIVA DE LUCHA CONTRA GARRAPATA)が設置され今日にいたっている。

6) 牛乳生産

国内の牛乳頭数は約1千万頭でこの中授乳期にある雌牛は350万頭と推定されている。この数は過去の統計と比較すると少ないが1頭あたりの生産性向上によって数不足がカバーされているといわれる。350万頭の牛乳より生産される牛乳は年間520万リットルで近年大きな変動はない。1頭あたりの年間平均搾乳量は1,500リットルでもっとも生産性の高いサンタ・フェ州において2200リットルである。国内には約4万の搾乳場があり、その90%以上がパンパ地方に集中する。生産された牛乳の処理加工は93%の工場において行なわれているが、この中チーズ製造が79.5工場によって占められ、他が粉ミルク、バター、コンデンス・ミルク、牛乳菓子等の製造に向けられる。これら工場には常時2万人が就労していると発表されている。加工原料とされる牛乳は総生産量の70%で残りの30%、すなわち150万リットルが直接飲用の国内消費量である。

パンパ地方以外では北部地方(チャコ、フォルモサ、コリエンテス及びミンオーネス)、西北部(サンチャゴ・デル・エステロ、ツクマン、サルタ、フワイ及びカタマルカ)及び南部(リオ・ネグロ川沿線及びチュブ州)にも牛乳牧場が点在する。これらパンパ地方以外の牧場は1,500頭を越えない。

乳製品の加工部門には主にオランダ及び西独の技術が導入されており、上述の各種製品が造られているが、この中で

もっとも大きいチーズの生産量は年間約25万トンで中、3万トン弱を輸出する以外はすべて国内で消費されるため国民1人当り年間消費量は85kgに達している。この消費量は世界8位の高い水準である。チーズの他では粉ミルク、ミルク菓子、バターの生産量が大きい。

乳製品の海外輸出はブラジル、米、国、ベネズエラ、メキシコ、チリ、イタリー、パラグアイ及びボリビアを主な市場として5~6千万ドルの輸出を行っているが牛乳の国内生産が停滞している反面、国内消費の伸びがみられるため、現在の生産規模

表238 牛乳及び加工品の生産量

区 分	1977	1978	1979
牛乳生産量 (ℓ)	5,200,000	5,200,000	5,200,000
生牛乳消費量 (ℓ)	1,588,000	1,573,000	1,700,000
工業加工 (トン)	3,612,000	3,627,000	3,500,000
内訳			
チーズ	2,41,907	2,50,725	2,44,400
バター	30,049	29,217	29,100
コンデンス・ミルク	10,921	7,129	7,129
カゼイン	4,458	3,103	3,200
粉ミルク	65,870	64,387	※
ミルク菓子	18,183	18,676	※

出所：1977、78～GEOGRAFIA DE LA ARGENTINA

1979～INFORMACION ECONOMICA 80

※：資料なし

では輸出をさらに増大する余地はない。

表 239 乳牛数と牛乳生産量

地 域 別	授 乳 場	授乳中の牝牛頭数	年間生産量 1,000ℓ	年間1頭当り生産量ℓ
パンパ地方				
大ブエノスアイレス近郊	7,000	700,000	1,200	1,500
ブエノス・アイレス西部サンタ西南部	5,200	370,000	490	1,300
ランパ東北部及びビコルドバ南西部				
ブエノス・アイレス南東部	600	60,000	※	※
サンタ・フェ中央部コルドバ東部	15,000	850,000	1,500	1,700
エントレ・リオ南東部				
サンタ・フェ南東部	2,000	120,000	270	2,200
コルドバ中西部	5,000	200,000	380	1,700
コルドバ市周辺	5,000	120,000	120	1,000
エントレ・リオ東部	100	※	※	※
パンパ以外	1,500	250,000	※	※

出所：GEOGRAFIA AD LA ARGENTINA

2.7.3 羊

1) 保有頭数

表 240
アルゼンチンの羊保有頭数の推移

年 度	保有頭数 1000頭
1888	6 6,7 0 1
1908	6 7,2 0 2
1930	4 4,4 1 3
1937	4 3,8 8 3
1947	5 1,1 7 2
1960	4 8,4 5 7
1974	3 4,6 9 1
1977	3 4,5 8 0

出所：GEOGRAFIA LA ARGENTINA

表 241
世界の羊保有頭数

国 別	頭 数 1000 頭
ソ 連	141,025
オーストラリア	131,510
中 国	88,000
ニュージーランド	60,300
トルコ	42,708
イ ン ド	40,432
アルゼンチン	34,000
その他の国	517,722
世界計	1,055,697

出所：FAO 1978

アルゼンチンにおける羊飼育の歴史は古く前世紀末にはパンパ地方を中心に現在の約、倍にあたる7千万頭近くを保有していたが前述の通りパンパ地方が牛によって優先され、羊の飼育はその周辺や南部地方に移動した今日では34百万頭の保有数に落ちている。しかしこの保有数にしてもソ連、オーストラリア、中国、ニュージーランド、トルコ及びインドに次ぐ世界7位の保有数であり、人口1人当

りの頭数ではニュージーランド、オーストラリア、ウグアイ及び南アフリカ連邦に次いで5位の位置にある大型の牧羊国である。

羊の飼育が次第に南下していった推移については1888年と1977年の地域別分布を示す次表によって明らか

ように、現在ではパタゴニア地方が全国保有頭数の約40%を占める最大の羊飼育地帯となっている。1974年の農牧センサスによると全国の牧場数は127,700であった。

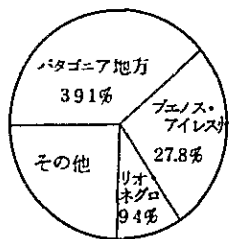
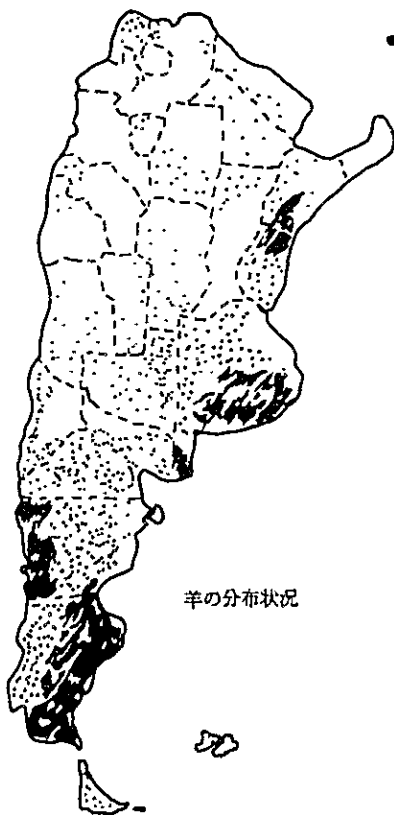
飼育品種はCORRIEDA LE

種がもっとも多く(約16百万頭), LINCOLN種(960万頭), NERINO AUSTRALIANO種(900万頭), ROMMEY MARSH種(400万頭)の他に少数のMERINO ARGENTINO在来種がある。羊毛の生産量はLINCOLN種がもっとも多く、1頭当り年間5~9kgを産し、他の品種は3~5.5kgである。

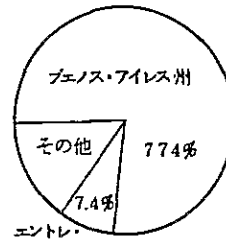
表 242 羊の国内分布状況

地域及州別	1888		1977	
	頭数	1,000頭	頭数	1,000頭
ブエノス・アイレス	55,645	77.4	9,598	27.8
ラ・パンパ	1,671	2.5	1,217	3.5
コリエンテ	611	0.9	2,143	6.3
エントレ・リオス	4,901	7.4	1,403	4.1
リオ・ネグロ	288	0.4	3,255	9.4
パタゴニア地方	0	0.0	13,520	39.1
その他	7,585	11.4	3,394	9.8
全国計	66,701	100.0	34,580	100.0

出所：GEOGRAFIA DE LA ARGENTINA



1977年



1888年

ロ) 羊肉

年間屠殺量は保有頭数の20~23%程度で1940年代には17百万頭の屠殺記録があり、70年代も頭切は1千万頭の屠殺が行なわれていたが最近では7百万頭前後に落ちている。羊肉の消費市場は牛肉の場合と同様で75~80%が国内消費にあてられ残りが輸出に廻される。78年度を例にとると屠殺された約800万頭の羊より13万トンの肉を得たがそのうち10万トンが国内市場、3万トンが輸出に向けられた。1頭あたりの肉生産量は平均16kgである。また国民1人当りの年間消費量は1948年当時の7kgの半分3.5kgである。海外への販売は45%以上がEC諸国に向けられる。

表 243 羊の屠殺量(頭数) 1,000頭

年 度	国内市場向	輸 出 向	計
1971	8,431.8	1,251.2	9,683.0
72	6,118.0	1,162.6	7,280.7
73	5,505.9	1,638.8	7,144.7
74	5,781.9	1,448.8	7,230.6
75	6,342.4	1,764.6	8,107.0
76	5,656.9	2,441.4	8,098.3
77	5,711.6	2,583.5	8,295.1
78	5,559.3	2,381.7	7,941.1
79	6,029.7	1,831.8	7,861.5
80	5,805.1	1,140.1	6,945.2

出所：INFORME ECONOMICO

表 244 羊肉(生肉)の輸出実績

年 度	重 量 1,000トン	金 額 1,000トン
1971	17.1	9.0
72	14.1	10.4
73	24.3	27.1
74	18.2	22.1
75	21.1	21.3
76	26.2	26.3
77	28.4	35.6
78	24.4	35.6
79	22.6	42.6
80	11.1	23.3

出所：INFORME ECONOMICO

ハ) 羊 毛

年間16万トンを生産するアルゼンチンはオーストラリアの70万トン、ソ連の43万トン及びニュージーランドの31万トンに次ぐ世界4位の羊毛生産国である。その生産高は農牧総生産高の約8%を占め輸出面においても重要項目の1つに数えられる。羊毛の生産性は品種によって異なり、また天候、牧草の成育、羊の樹の消耗状態も大きく関係する。統計上は剪毛重量を牧羊数で割って平均値が出されるが1頭あたりの生産量は州別に異っており、南部パタゴニア地方

のサンタ・クルスにおいてもっとも高く平均4kg、ブエノス・アイレス州3.7kg、コリエンテス州1.6kgと北部に向うに従って減少し、サルタ州では0.6kgという数字が出ている。

国内の生産地帯はパンパ地方とパタゴニア地方が大きく両方で全体の91%を占める。国内生産量は合成繊維の普及により減少の傾向にある。

(市場)：国内市場は購買力いかんによって変化するが、通常生産量の20~30%にあたる45,000トン前後が消費される。

表 245 羊毛生産量

年 度	1,000トン
1971	175.0
72	162.4
73	153.8
74	156.0
75	159.0
76	164.0
77	153.5
78	153.5

出所：FEDERACION LANERA ARGENTINA

表 246 羊毛の地域別生産分布

地 域	%
パンパ地方	53.5
その他の地方	46.5
東北地方	6.0
西北地方	1.0
クエヨ地方	2.0
パタゴニア地方	37.5

出所：BANCO GANADERO

海外市場には国内消費を引いた70~80%が輸出される。アルゼンチン産羊毛の買付先は米国及び英国を中心とするヨーロッパ諸国であるが、日本やソ連等にも輸出されている。最大の顧客である米国では外装や毛布用の長く太い繊維を好むが、アルゼンチンで生産されるLINCOLN種の毛がこれに適合している。

70年代の輸出は74年及び75年に極度に減少したが78年には過去10年の実績を上回る7万トンの輸出を行っており約1.8百万ドルの外貨を得ている。輸出品は総重量の60%が精製前の原料の状態で行なわれる。アルゼンチンはオーストラリア及びニュージーランドに次ぐ世界第3位の輸出国で約50ヶ国に供給している。

2.7.4 豚

伝統的な牛肉消費国として豊富な牛を保有するアルゼンチンにおいては牛肉が不足する多くの国とは異なり、代替肉の生産は緊急な問題ではなく豚部門は世界的な位置を占めていない。国内の保有頭数は1970年前後に400万頭を越えた時期もあったが77年には350万頭に落ちている。74年の牧畜センサスによると豚の飼育を行っている農家数は151,500戸であった。国内の飼育地帯はパンパ地方のブエノス・アイレス州、サンタ・フェ州及びコルドバ州が多く全国頭数の75%がここに集中する。年間の屠殺数は300万頭前後で99%は国内で消費され、輸出はごく僅かである。1人当り年間平均消費量は長年変化がなく牧畜サイクルを原因とした価格の変動によるのみ変化をみるにすぎない。現時点での消費量は年間8kgである。

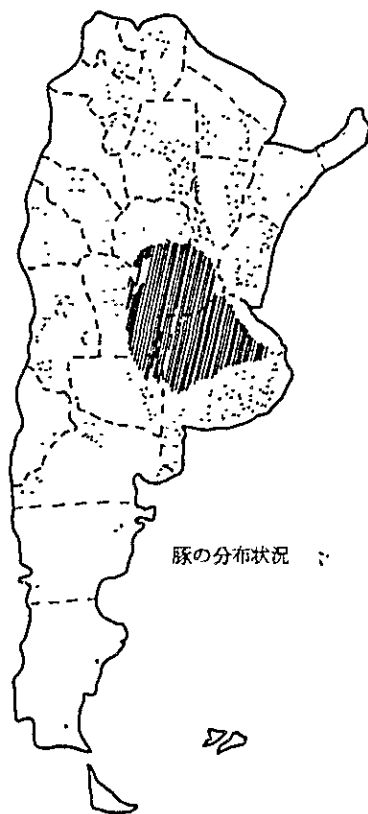


表 247 豚の保有頭数

年 度	1,000 頭
1888	403
1930	3,769
1960	3,881
1969	4,098
1974	4,127
1977	3,551

出所：J. N. C.

表 248 豚の屠殺数 1,000頭

年 度	国内市場向	輸 出 向	計
1971	29619	621	30240
72	26175	608	27083
73	29530	2017	31547
74	29175	659	29835
75	30224	821	31045
76	29145	1976	31121
77	26909	769	27678
78	24027	179	24206
79	28237	50	28287
80	30342	03	30345

出所：J. N. C.

表 249 豚の分布(1977)

州 別	頭数 (1,000 頭)	%
ブエノス・アイレス	1,163	32.7
ザンタ・フェ	634	17.9
コルドバ	883	24.9
その他の州	871	24.5
計	3,551	100.0

出所：J. N. C.

2.7.5 馬

下表にみられる通りアルゼンチンにおける馬の保有頭数は1930年代に約1千万頭に達したあと減少を続け現在では前世紀末の頭数をはるかに下回る270万頭に落ちている。この減少の理由は1時期無差別の屠殺が続けられた反面増産態勢が起きていなかったことその他、農業方式の進歩に伴って昔の馬耕形態が機械化されトラクターに切換えられ、運送面でも又自動車の普及によって次第に馬を必要としなくなったことなどによっている。この様にして激減した保有頭数をもってしてもなお、米国、ソ連、ブラジル、中国及びメキシコに次ぐ世界有数の馬保有国である。74年度の農牧センサスによると馬の飼育を行っていた農家数は全国で307500であり、国内の飼育地帯は羊を除く他の家畜と同様にパンパ地方に集中する。

肉用屠殺は25万頭前後が年平均とするが78年には28万頭に達した。これらの馬肉は輸出を主体とし日本及びEC諸国が主な顧客であり、ECの中ではオランダの輸入が大きい。輸出は増加を続けており、79年には7千万ドルの輸出が行なわれている。一方国内の市場では伝統的に軍隊(騎馬隊用生馬)の需要が大きく重要な納入先であり、国技の“PATO”では不可欠のものとしてその需要継続している。

70年以降も徐々に減少する保有頭数を復活すべく、74年には法律第1591が発令され、各種の規定を設けており、畜馬産業の復活と振興を図るための委員会が設置されている。

表 250 馬保有頭数の推移

年 度	1,000 頭
1888	4,200
1908	7,500
1930	9,800
1947	7,280
1970	3,700
1976	3,500
1977	2,900
1978	2,700

出所：GEOGRAFIA LA ARGENTINA

表 251 馬内の輸出実績

年度	重量 1000トン	金額 1,000ドル
1971	67.5	31.6
72	70.0	39.2
73	58.7	43.1
74	28.8	29.9
75	28.5	25.4
76	38.0	33.2
77	37.8	38.7
78	43.6	54.2
79	44.2	70.9
80	32.7	62.5

出所：J. N. C.

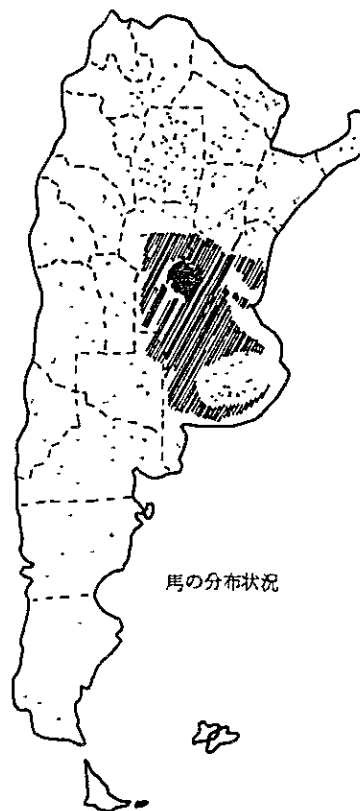
2.7.6 鶏

豚の場合と同様に牛肉が豊富なアルゼンチンにおいては他国にみられるような牛肉代替え問題の深刻さはなく鶏の飼育も大きな規模に達していない。しかし前述の牧畜サイクルにみられる牛肉価格高騰の時期や牛の屠殺が制限される場合には大きな需要が生じており、FAOも豊富な飼料作物を持つアルゼンチンの養鶏は今後拡大されていくであろうと推定している。国内のとり類全体の飼育数はFAOの統計によると78年まで

表 252 とり類1人当り消費量

年度	とり類 (kg)			卵	
	鶏	その他	計	個数	kg表示
1971	8.1	0.3	8.0	12.4	6.9
72	7.7	0.3	8.0	12.9	7.2
73	7.6	0.3	7.9	12.7	7.1
74	10.3	0.3	10.6	13.5	7.6
75	10.1	0.3	10.4	13.2	7.4
76	9.7	0.3	10.0	12.7	7.0
77	9.8	0.3	10.1	11.9	6.5
78	10.8	0.3	11.1	13.3	7.3
79	11.4	0.4	11.8	14.1	7.8

出所：INFORMACION ECONOMICA 80



馬の分布状況

32,000千羽前後でアルゼンチン経済省の資料では79年度で34,285千羽であり、とり内の生産量は25.2千トン(1978年)となっている。

国内の養鶏地域は従来エントレ・リオス州がもっとも盛んな地域であったが、最近では大消費市場を控えるブエノス・アイレス近郊での生産が増加しており、同州が42%、エントレ・リオス州35%、サンタ・フェ州14%、コルドバ5%、その他が4%の比率である。但し産卵鶏の数と卵の生産量ではエントレ・リオス州が依然として1位にある。卵の生産量については年間3,000百万個で均衡してきたが最近増加の傾向にあり、79年には3,700百万個に達した。生産された卵の93%は消費市場向、

7%が孵化場へ廻される。

国民1人当り卵の年間平均消費量は79年度で12打である。この消費量は他の主要消費国と比較した場合にはかなり低い。前述の通り他の動物蛋白源が豊富なことのほか、流通機構が整備されていない点も卵の消費が伸びない原因の一つとされている。

全国に40の配合飼料工場があり、月間生産能力は25万トンでその90%が養鶏部門に供給される。

2.7.7 山羊

他の家畜には遜さない牧草不足地帯がもっとも野生的な山羊の飼育場とされる。またた目につく植物は何んでも食べられる動物であるため植林地帯や果樹地帯での放牧が不可である。したがって全国保有数の90%はパンパ以外の地域やアンデス山麓の半不毛地帯に分布する。保有頭数は年々減少しており、74年の農牧センサスでは485万頭、78年のFAOの統計では320万頭となっている。

山羊は繁殖が早く年間2回出産し、1回に2〜3頭が産まれるのも珍しくない。授乳期の搾乳量は1日当り約4ℓで油脂分が多いため、牛の飼育が不可能な地帯での動物蛋白源としては興味のある家畜とされている。

飼育農家数(74年農牧センサス)は全国で約72千戸であった。

表 253 山羊保有数(74年センサス)

州 別	飼育農家数	頭数 1,000頭
サンチャゴ・デル・エステロ	18,300	8894
ネウケン	2,320	5399
メンドーサ	2,253	4889
ラ・リオハ	4,061	3008
コルドバ	10,469	2945
カタマルカ	3,300	2553
サン・ルイス	3,546	2516
チャコ	6,295	2278
その他の州	21,213	1,6021
全国計	71,757	4,850.3

出所：GEOGRAFIA LA ARGENTINA

2.7.8 皮革製品

世界的な牧畜国のアルゼンチンでは毎年家畜保有頭数の20%以上が屠殺され肉を生産するが、その副産物として残る皮革の生産も膨大な量にのぼる。当然皮革の処理と加工が牧畜に附随する重要な産業として定着しており、最近急激に輸出を伸ばしている部門として注目されている。この部門は屠殺後最初に行なわれる革のなめし加工となめし革を材料とする靴及びその他の製品加工に大別される。

イ) なめし部門

全国には300以上のなめし工場があり、屠殺された牛、羊、山羊の皮を処理する。この中でもっとも大きな規模をもつ5工場の処理量は1日当り3,000〜5,000枚であり、これに続く大型5工場が2,000〜3,000枚、以下の11工場が1,000〜2,000枚の処理能力を持ち、その他の工場は1,000枚以下の規模である。これらのなめし皮工場はその大半がブエノスアイレス圏内に集中しているほかサンタ・フェ州エスペランサ市、ブエノス・アイレス州アスール市、メンドーサ州及びエントレ・リオス州にも散在する。これらなめし工場の就働人口は約25,000人である。

1964年までは国内で産出された皮の35%を処理する能力しか持たなかったが、その後の設備投資により今日では全量が処理可能となっており、牛皮15百万枚、羊皮及び山羊皮をそれぞれ42百万枚が処理されている。これら製品の大半は海外市場に向けられ79年度を例にとると牛皮生産量15百万枚の中14百万枚が輸出されている。なめし皮の輸出額は426百万ドルに達し、この中、牛皮が418百万ドルを占める。輸出品としてとくに重要なのは牛皮製

品で国内市場向は靴材料である。

表 254 なめし皮生産量 単位 1,000枚

年 度	牛 皮	羊 皮	山羊皮
1971	7,000	1,850	2,920
72	9,400	1,300	2,200
73	9,850	3,910	2,300
74	9,500	6,650	3,200
75	8,900	4,700	3,700
76	11,300	4,600	1,000
77	13,150	4,500	4,200
78	14,560	4,300	4,200
79	15,000	4,200	4,200

出所：INFORMACION ECONOMICO 80

表 255 なめし皮の輸出実績

年 度	牛 皮		その他	計
	(100万枚)	(100万ドル)	(100万ドル)	(100万ドル)
1971	35	395	295	690
72	51	902	299	1201
73	45	1040	175	1215
74	52	884	108	992
75	36	624	92	716
76	79	1360	161	1521
77	11.1	1900	204	2104
78	123	2530	250	2780
79	110	4180	434	4614

出所：INFORMACION ECONOMICO 80

ロ) 靴及びその他の加工部門

アルゼンチンの靴工業は頭初の家族労働を主体とした規模で前世紀の終り頃より行なわれてきたが、今日では工場数4,500、従業員数5万を数える大産業へと発展している。現在製造能力は年間約110百万足で、この中約50%が革を原料とするものである。

アルゼンチンに限らず南米諸国では皮の加工はもっとも古く重要な部門の1つで馬具をはじめとする各種の皮加工が行なわれてきたが、今日ではなめし皮と共に大型の輸出産業に成長しており、全国に1,500の工場を有し3万人の従業員を擁している。主な皮製品としてはハンドバッグ、バンド、コート、財布、スーツケース等々多様にわたり、海外の需要も年々増加し、78年以毎年1億ドル以上の輸出が行なわれている。

表 256 皮製品の輸出 単位 1,000ドル

品 目	1975	1976	1977	1978	1979
衣類(脱毛なし)	4,3306	10,8782	29,1222	46,9745	56,1688
〃(脱毛)	10,9290	15,5905	26,3019	51,6456	44,9480
ハンドバッグ	2,4839	1,8141	2,8757	5,0697	9,4532
バ ン ド	7160	6876	1,1093	2,1358	5,0068
敷 物	3,8621	4,6766	4,5339	7,0914	9104
靴 類 カ バ ン	770	2271	6433	6274	8880
タ バ コ ケ ー ス	05	210	355	1638	6731
手 袋	66	852	2098	2640	3257
財 布	1964	1650	2783	8344	11,340
そ の 他	7,3862	7,3267	9,8552	14,5414	16,5638
計	29,9923	41,4720	74,9651	126,3484	136,0718

出所：INFORMACION ECONOMICO 80

2.7.9 蜂 蜜

国内の養蜂はパタゴニア地方と乾燥、半乾燥地帯を除くほとんどの地域に分布しており、現在90万戸以上の農家がこれに従事する。生産者は農家の副業としての家族労働による小規模のものが多いが、中には400箱以上の巣箱を持っている農家もある。海外の需要も順調に継続しており、輸出は73年に1千万ドルを突破して以降増加を続け、78年には28百万ドルの記録を作った。主要輸出先は西独、日本、英国及び米国等である。

表257 蜂蜜の輸出

年 度	重 量 1,000トン	金 額 百万円
1971	14.3	4.0
72	19.4	8.9
73	17.9	11.1
74	15.5	12.6
75	22.6	16.5
76	29.9	20.8
77	28.4	23.2
78	34.3	28.0
79	23.6	21.9

出所：I. N. D. E. C.

2.8 林 業

2.8.1 森林資源

国の北部に森林地帯を持つアルゼンチンでは一見森林資源に恵まれている様に見えるが、農業、牧畜部門とは逆に毎年2億ドル以上の木材及び紙原料の輸入国であり、近隣のブラジル、パラグアイ及びボリビアにとって機材の重要な市場となっている。とくにボリビアにとっては、同国東部地方における最大の輸出品目である木材はアルゼンチン市場に集中して出荷されており、又大豆など大型の輸出品目を持つパラグアイにとってもアルゼンチンの木材需要が、同国内の森林を乱伐する

原因となった程である。

表258 アルゼンチンの森林面積(A)

州 別	面積 1000ヘクタール	%
リオ・ネグロ	7,027	13.4
サルタ	6,337	12.2
ラバンパ	5,217	10.0
サンチャゴ・デル・エステロ	4,538	7.8
ラ・リオージャ	3,089	5.9
メンドーサ	2,929	5.6
フォルモーサ	2,492	4.8
サンルイス	2,483	4.8
コルドバ	2,425	4.7
チャコ	2,439	4.7
チュブ	1,880	3.6
サンタフェ	1,686	3.2
その他の州	9,546	18.3
全 国 計	52,088	100.0

出所：統計年鑑，1978年

木材部門においてアルゼンチンがこの様に外国に依存しなければならぬのは、そもそも経済的に利用価値のある木材資源にとぼしいことその他、1948年に森林法が設定されるまで無統制な伐採が続けられ、同法律の発令後も適格な森林利用が行われなかったことを大きな理由としている。また現存する森林地帯が国内でも特に未開地域にあるため、現地よりの搬出に種々の困難を伴うことや有用材が一地域に集中せず点在しているため経済的に開発が進まないことも他の理由としてあげられている。経済地理を扱った

『GEOGRAFIA DE LA ARGENTINA』では森林分野の専門家ドミンゴス・コッソ技師の言葉を次の様に引用している。『アルゼンチンは国内需要を満たし得る森林をもちながら、真の意味での森林資源に欠けている。

表 258 アルゼンチンの森林面積 (B)

区 分	面積 1,000ヘクタール	%
森林区域総面積	103,300	100
山、川、湖の面積	43,000	42
森林に覆われた面積	60,300	58
森林に覆われた面積	60,300	100
利用が困難な森林	21,300	35
利用可能な森林	39,000	65
利用可能な森林	39,000	100
木材利用可能な森林	27,000	69
薪としてのみ利用する森林	12,000	31

出所：GEOGRAFIA DE LA ARGENTINA

表 258 アルゼンチンの森林面積 (C)

区 分	面積 1,000 ㊦	%
(1) ミシオーネス森林	2,275	3.9
(2) ツクマノ・ポリビアノ森林	3,470	5.9
(3) チャケーニョ森林	29,945	50.9
(4) パンパノ森林	6,225	10.6
(5) メソポタミコ森林	2,950	5.0
(6) パンパ草原	-	-
(7) 西部山岳部	11,670	19.9
(8) スブ・アンタルテイコ林野	2,050	3.5
計	58,740	100.0

出所：INST・TUTO FORESTAL NACIONAL/GEOGRAFIA LA ARGENTINA

国土の植生区分

1) ミシオーネス森林

パラナ川とウルグアイに挟まれたミシオーネス川の4分の3を覆う森林でブラジルのパラナ州及びサンタカタリーナ州、パラグアイの東部地方にあたる森林の延長とみなされる。ここには各種の有用伐があるが同種の木が集中しておらず極めてまばらであるため、伐採搬出が経済的に行ない得ない難点があり、開発は進んでいない。もっとも重要とされる木材はミシオーネス松（ブラジルではパラナ松という）でヤツ等も自生しているが月桂樹や杉は少ない。この地方には製材、製紙原料用の松が大規模に植林されている。

2) ツクマノ・ポリビアノ森林

ミシオーネス森林よりも北部に位置しているにもかかわらず雨量不足のため森林の密度はミシオーネスの場合よりも薄い。ただし樹高は30～35mに及んでいる。この森林はポリビアの森林の延長であるため標記の名称が付されており、西部のアンデス山麓と中央部のアコンキーハ山脈間を30～80kmの間で700kmにわたる森林を形成する。その

これらの資源が少ないのではなく経済的利用の可能性に乏しいというべきであろう。しかしながらアルゼンチンは植林し得る土地を豊富に持つ国であり、伝統的な森林保有国に比して樹木の成長も早く、新しい森林造成において大きな可能性がある。”

アルゼンチンの森林面積については資料毎に差異があり一致していない。統計年鑑によると52百万ヘクタール、上記経済地理習が公式統計として発表しているのは603百万ヘクタール、森林庁の資料では58.8百万ヘクタールとなっており、その中間をとって57百万ヘクタール程度が森又は林に覆われた面積といえそうである。この現状に対して1915年に行なわれた調査では106百万ヘクタールとなっているので、この間に4千万ヘクタール以上の森林が失われたことになる。1915年の調査に幾分かの誤りがあったとしても1948年までは森林を規制する法律もなかったことであり無差別な乱伐が行なわれたことは疑うべくもない。森林を含む国土の植生は次の様に区分されている。

細長に形状から別名「青い半島」とも呼ばれる。樹種は標高によって異なるが低地では月桂樹、ティープ、ツクマン杉、ノガール等が主な木材である。

3) チャケニー森林

パラナ川より上記のツクマーノ・ポリビアーノ森林に接する地帯まで広がる 600,000km² の森林と草原地帯を指す。北部はポリビア及びパラグアイの国境より始まり、コルドバ山脈及びサンタ・フェ中央部まで広がる。有用材としては皮をタンニンの原料とするケブラチ。その他ラバーチ、ウルンダイ、鉄道の枕木や電柱に用いるケブラッチ、コロラド、サンティフェーノ等がある。

4) パンペアーノ平野

ラ・パンパ州の中央部、サン・ルイス州南部を占め、コロラド川河口に続く。地域の70%は草原である。

5) メソポタミコ森林

気温は穏和で十分の湿気があり多くの河川支流の間に森林を形成する。別名「回廊形の森林」と呼ばれるミシオーネス森林とチャケニー森林の延長である。

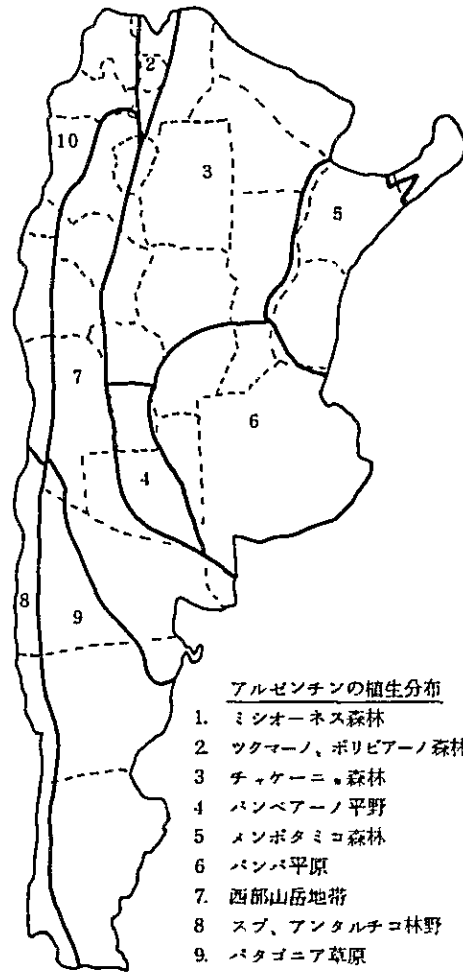
6) パンパ平原

40万キロメートル平方(4千万ヘクタール)に及ぶ限りない大平原で全体が草に覆われており森林は存在しない。ブエノス・アイレス州全体、サンタ・フェ州及びコロラド州の南部、ラ・パンパ州東北部の三角地帯とサンルイス州の一部によって構成される。海に向かってわずかな傾斜があるだけで標高は低い。樹木が全く見られないため巨大な大地を感じさせるが、一面奇妙な

この現象は土壌内の水分不足と不規則で夏期に不足する降雨のためであると説明されている。

7) コルドバ州東北部、サン・ルイス全体、ラ・パンパ州西部、メンドーサ州及びサン・ファン州の大半、カタマルカ州及びラ・リオハ州の中央部、ネウケン州北部の三角地帯、リオ・ネグロ州の3分の1及びチブ州北部を含む水分が極度に不足し、気温は比較的高い。全般に灌木が植生し有用材は少ない。唯一の有用材は床用材としてのALGARROBA程度である。

8) スブ・アントルティコ林野



アルゼンチンの植生分布

1. ミシオーネス森林
2. ツクマーノ、ポリビアーノ森林
3. チャケニー森林
4. パンペアーノ平野
5. メソポタミコ森林
6. パンパ平原
7. 西部山岳地帯
8. スブ、アントルティコ林野
9. パタゴニア草原
10. アンデス無人地帯

南緯 37 度より国の南端までのアンデスに沿う細長い帯状の地帯を指す。この林野はアンデス山麓の集中的な降雨によって出来たもので面積は400 万ヘクタールに及ぶ。中でもとくに降雨の多い北部地方はバルディビアナ森林 (SELVA VALDIVIANA) と呼ばれ隣国のチリにある同名の森林地帯の連続である。南部は降雨が少なくマゼラン森林 (SELVA MAGALLANICA) と呼ばれ植生は北部に比して少ない。全体に樹木の種類が統一的事であることや開発が比較的容易なところから森林開発の可能性を有しているが、太平洋に通ずる適当な輸送手段に欠けるのが難点とされている。

9) パタゴニア平原

北部が西部山脈地帯、東部を大西洋に接するアルゼンチン最南端の平原地帯であり、植生上はフェーゴ島北半分とアルビーナス島全体を含む。

10) アンデス無人地帯

国の最北端より南緯 34 度、すなわちネウケン州においてサブ・アンタルティコ森林との接点まで連続し、北部にボリビアのアルティプレーノ高原に連続するアタカマ高原を含む。サルタ州及びフアイ州の約半分、カタマルカ州の大部分、ラ・リオハ州、サン・フアン州及びメンドーサ州の一部を包含する。灌木と耐乾性の植物、サボテン類のほか民芸品の材料として貴重がられている CARDÓN (おになべな) が植生する。

ロ) 再植林及び植林

1948 年以前にも国有地の森林を保護する法律はあったが、法律の適用が国有地に限られ、民間の森林を保護する役目を果たさなかったため乱伐が続き 1948 年の森林法発令となったことは前述の通りである。同年に法律第 13,273 号として発令されたもので「森林資源の保護と造成」をうたっており、以後これを補足する政令が随時追加されているが 48 年の森林法が現在にいたるまで森林に関する基本法令となっている。

同法律の第 VI 章及び第 VII 章では再植林及び植林の必要性からこれを促進するための恩典措置として次の通り規定している。

- 1) 森林基金 (FUNDO FORESTAL) の設定：森林活動に関する各種の税収入の一部、木材の輸入にかかわる単一税の課税収入を積立てて植林振興基金とする。(注：1971 年以降単一税の方法は輸入額に対する一定比率による税に変更された。)
- 2) 間接的な恩恵：森林地帯にかかわる租税の免除、森林活動より得た収益に対する税の軽減、植林のために必要とするすべての輸入器材について輸入税の免除。
- 3) 直接恩典：低利長期の植林融資

後日 1977 年には法律第 21,695 により森林庁が認める場合、植林を行なう個人及び団体に対する資金援助の細則が定められ植林又は再植林の振興が図られている。

なお、ここに用いられる再植林 (REFORESTACIÓN) とは森林の伐開地域に植林を行って森林面積を復元することをいい、植林 (FORESTACIÓN) とは新たな森林地帯を造成し、国全体の森林面積を増加させることをいう。以上の振興策を実施する優先地域としては次の地域があげられている。

- a) ミンオーネス州及び北部コリエンテス州：推選品種～松及びヒューカリ
- b) エントレリオス州コンコルジア地区：松
- c) コルドバ州カラムチータ溪谷：松
- d) 北部地方 (サルタ、フアイ及びツクマン州)：松
- e) 灌漑地方 (メンドーサ、サン・フアン州及びリオ・ネグロ盆地)：ポプラ
- f) パラナ川デルタ地帯：柳科植物、松

g) ブエノス・アイレス州コスタ・ドウニコラ地区：松

h) アンデス、パタゴニア地方中央部

上記優先地域に対する植林については1978～1994年の国家植林計画が次の目標のとおり承認されている。この計画が達成されると1988年には国内自給を達し、以後輸出余力を生ずる見通しである。

表 259 国家植林計画目標

年 度	植林面積	ヘクタール
1978	年間	56,000
79	"	70,000
80	"	90,000
81	"	100,000
}	この間毎年1万haを増加	
	年間	160,000
88～93	"	170,000
99	"	180,000

出所：GEOGRAFIA DE LA ARGENTINA

表 260 植林及再植林面積

州 別	面積 1,000ha
ブエノス・アイレス	243
リオ・ネグロ	118
エントレ・リオ	102
サンチャゴ・デル・エステロ	96
ミシオン・ネス	76
コルドバ	52
サンルイス	40
サンタ・フェ	37
チ　　ャ　　コ	34
チ　　ー　　ブ	32
コリエンテス	28
そ　　の　　他　　の　　州	81
全　　国　　計	939

ANUARIO ESTADISTICO 78

参 考 文 献

REVISTA DE LA BOLSA DE CEREALES 1980	ブエノス・アイレス穀物取引所
ANUARIO ESTADISTICO DE LA REPUBLICA ARGENTINA 1978	統計院 (I. N. D. E. C.)
BOLETIN ESTADISTICO TRIMESTRAL 1979	同 上
COMERCIO EXTERIOR ARGENTINA	同 上
INFORME ECONOMICO RESEÑA ESTADISTICA	経済省
INFORMACIÓN ECONOMICA DE LA ARGENTINA 80	同 上
EVOLUCIÓN ECONOMICA DE LA ARGENTINA	同 上
DESARROLLO RECIENTE Y PERSPECTIVA DEL INTERNACIONAL DE CARNE VACUNA	農牧省
GEOGRAFIA HUMANA Y ECONOMICA DE LA ARGENTINA	ISIDRO J. F. CARLEVARI
GEOGRAFIA DE LA ARGENTINA	FEDERICO A. DAUS,
INDA SUPLEMENTO № 26	農牧技術院
FAO PRODUCTION YEARBOOK	FAO
FAO TRADE YEARBOOK	FAO
LA NACION (新聞切抜)	ラ・ナシオン紙
LA PRENSA (")	ラ・プレッサ紙
在亜 日本商工会議所調査部速報	
南米農業要覧	海外移住事業団
アルゼンチン国概要	国際協力事業団ブエノス・アイレス支部
農業関係参考事項	同 上

1981年 7月

報告書作成

SIN PROMOÇÃO E MARKETING LTDA.
RUA DR. CINTRA GORDINHO 117,
ALTO DA LAPA, SÃO PAULO
BRASIL.

JICA